

飽海郡誌 卷九

160
10
130

160-130



1200901383952

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

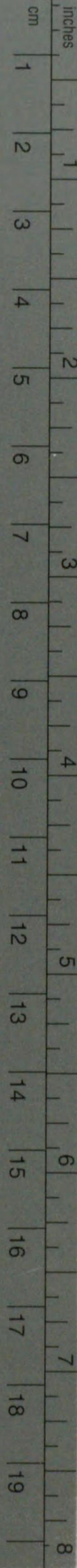
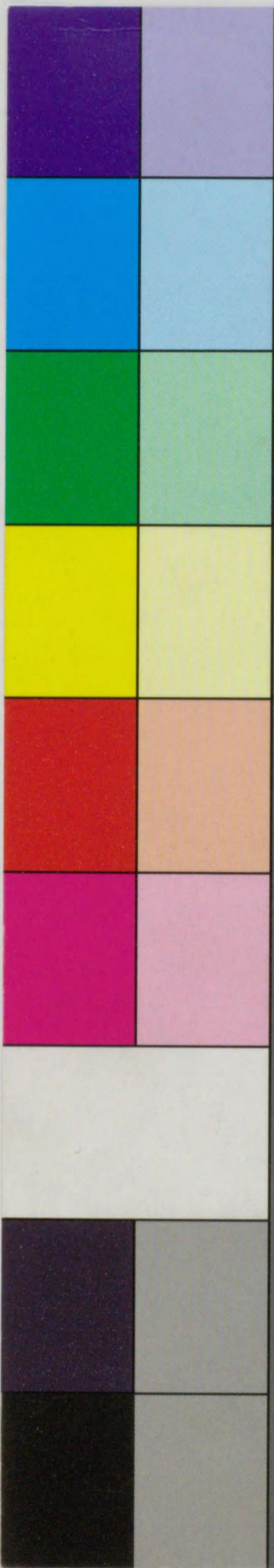
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



飽海郡誌卷之九

目錄

第八編 村里

第五章 南遊佐村

宮野内 北宮野内 宮野内新田 齋藤氏 宮之内 2

楯外野 高橋氏 今泉 興休 中島 北中島 12.6 寄贈

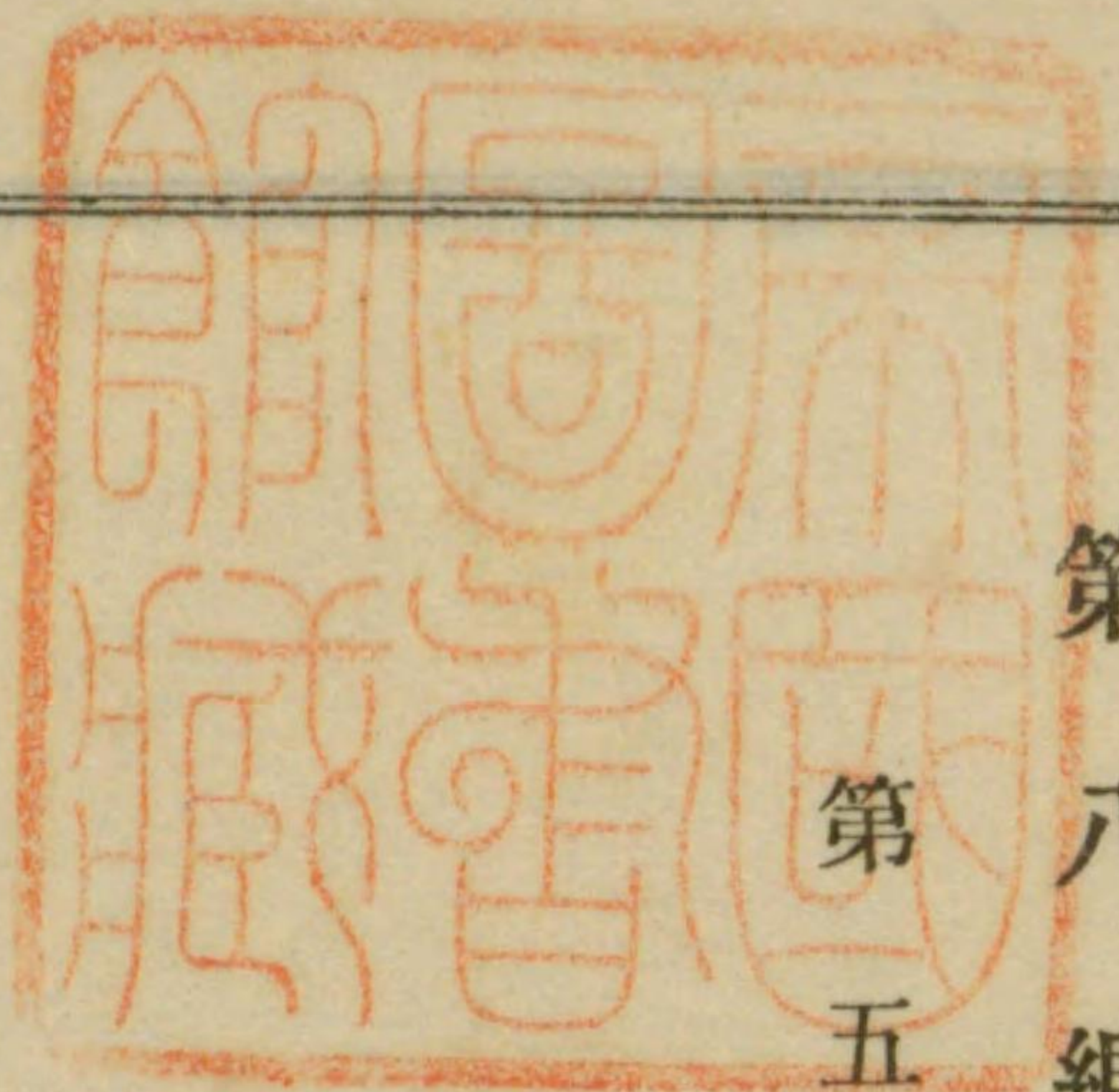
白山姫神社

稻田村

大井 大小服部 岩川 岩川新田 福升 福升新

田鶴鷓沼 仙北新田 宮田 齋田 武取 下山 王

川 川行 村 田 宮田 大宮田 平宮田



口 邨 寄 贈 本

楸島 石川氏 宮田 向宮田 大宮田 下宮田
万部新田 五步市 宮田楯 江地 石山氏 玉龍
寺

遊 佐 村

遊佐町 十日町 八日町 本願寺 六日町 二之
瀧神社 大楯 大楯新田 平津新田 漆曾根 岡
田 尻引 京田 吉出 佐々木氏 下野澤 菅原
氏 下野澤新田 上野澤 齋藤氏 上野澤新田
御嶽神社 安養寺 野澤館 廣野新田 上野新田
藤井新田

蕨 岡 村

石辻 阿部氏 八幡神社 三川 今野氏 大内野
目 大淵 蕨岡 大物忌神社 蕨岡口之宮 龍頭寺

蕨岡楯 水上 鹿野澤 天神新田 來生彦左衛門
杉澤 熊野神社 長橋 小松 平津 帝立寺 平
津楯

飽海郡誌 卷之九

第八編 村里

第五章

宮野内

傳へ

南遊佐村宮野内宮野内同新田北宮野内千代田外野今泉米嶋中嶋北中嶋興休ヲ管ス

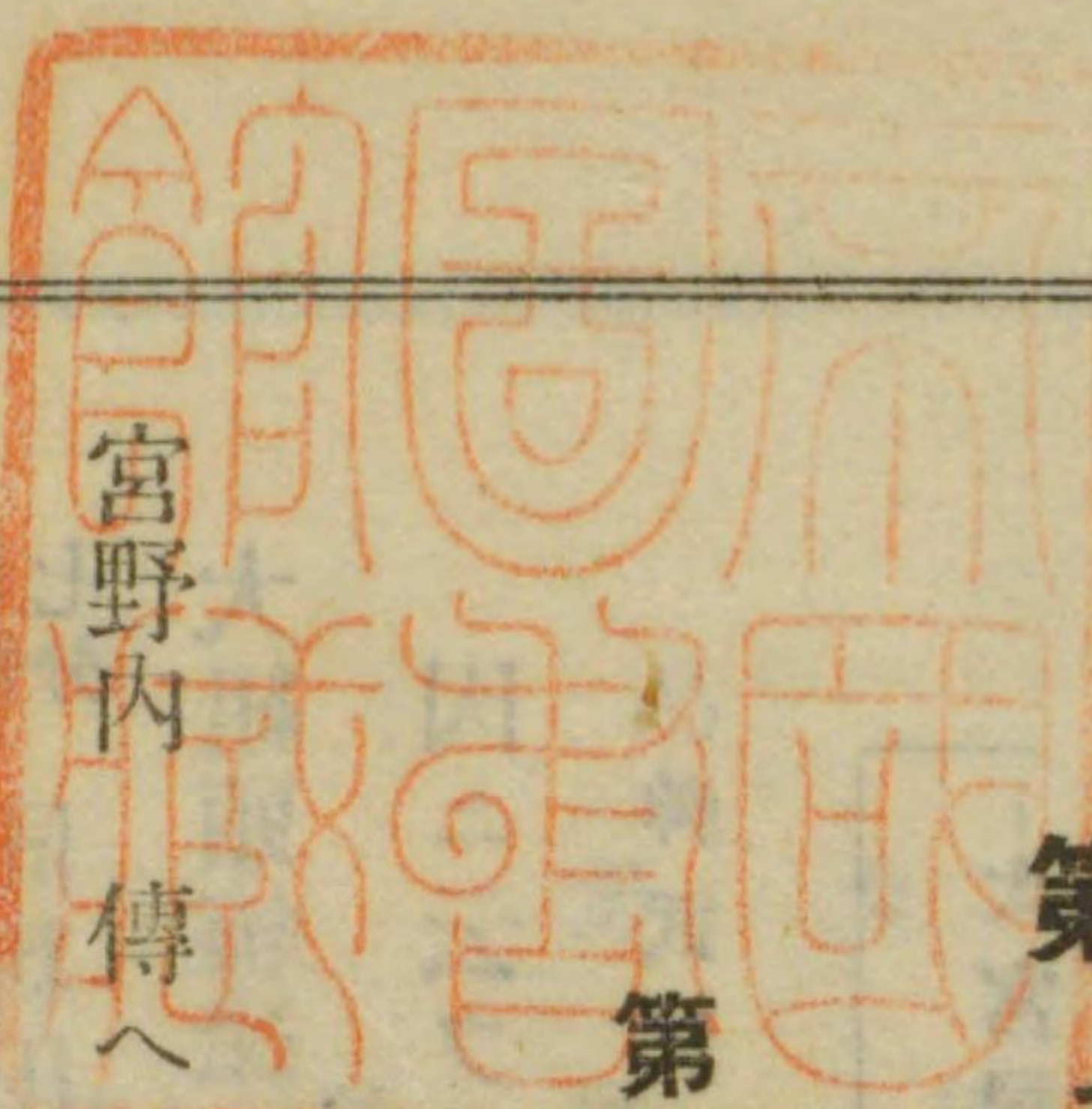
内大輔忠勝侯入部ノ後チ叙爵ヲ避ケ野ノ字ヲ挿ミ宮野内ト稱スト慶長十六年九

月檢地帳風土略記所引ヲ案スルニ本田ノ内五百束、出田ノ内六百三十九束苗代ノ内十

二束兩所領兩所ハ吹浦ノ社頭ナリト見ユルノミナラス古來當村鎮守祭禮ニ吹浦ノ御鉾獅子

頭ヲ渡スヲ以テ例トスレハ古老ノ傳誦亦據アルニ似タリ

寛永二年ノ現高五百七拾八石貳斗七升八合平均免五ツ五毛同年宮内定免證文明曆二至リ



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '水', '取', '神', '田', '米', '立', '門'.

八百參拾三余、貞享ノ初メ八百九十五石余トナリ

(明曆二年檢毛帳)高五百廿五石六斗六升三合貳勺宮内當番方高三百十八石八斗八升四合四勺宮内喜右衛門分九斗四升九合七勺宮内村與頭與目(貞享村組付)宮内村高八百九十五石四斗四升五合貳勺家數十八軒内十三軒御役下小湊ヨリ長ノ方同處ヨリ道有、入口前一里塚有南ヨリ入北へ出

後チ本高貳百九十九石壹斗壹升九合三勺免五ツ七分同組頭與壹石六斗七升五合七勺免貳ツ七分同新田七十三石四斗七升三合四勺免三ツ七分トナレリ舊宮野内組ノ組元ニシテ

大組頭梅津喜右衛門以來世々コ、ニ住シタリキ

因ニ云フ當處阿蘇某ニ阿蘇系圖ヲ傳フ録シテ參考ニ供ス但節略

神武天皇 神八井耳命 健磐龍命 (中略)

大宮司宇治三位友詮

八皇七十七代後白河帝 肥後國安蘇郡球摩郡益城郡三郡神領タリ都大亂保元・年七月源平合戦ニ六條判官爲義之八男鎮西八郎爲朝新院方ニ有テ白川殿集リ合戦強白川御所大攻メ敗軍鎮西一人戰遁レテ九州下向豊後國佐賀關ヨリ宮地來リ友詮娘ヲ愛シ男子一人産ム是則友

廣爲朝太刀一振り留テ友廣ニ附與ス

大宮司宇治友明

二位

鎮西八郎爲朝室

女

尾形三郎惟義室

女

男 阿蘇千鶴丸

阿蘇武智麿

松根五郎丸

此子孫肥後加藤清正ニ仕今細川家ニアリ

安蘇豊後守宇治友廣

母大宮司二位友明娘 兒名美保丸

建久五年安藝國沼邊小松莊賜リテ領依テ安蘇沼殿ト稱ス完戶山城守 聲トナリ四子ヲ生

友廣七代孫 安蘇藏人大夫宇治爲國

(中略)

後小松帝永徳二年能州黒峰城移云々

加賀右衛門友重

大膳滿友

大永三年北國亂三宅神保朝倉等國ヲ亂ス依テ廿三才・シテ祖母妙光院連レテ國ヲ去リ越後ニ來ル長尾爲景頼テ越後ニ居ルコト三年是モ亦亂國故去テ出羽國ニ下ル平田郷中野目村平民部ヲ頼居住

供 青木兵庫

沼邊治兵衛

浦上内匠

一家内十七人

享保二年兵庫ヲ荒瀬郷泥澤村江移シ居ラシム

北宮野内 明曆二年檢毛帳ニ村名石高ヲ記セス之レヲ宮内村ニ收メラル當時ハ一村里トナラサリシナリ貞享村組付ニ宮内村支郷北宮内村トシテ高四百九拾石八斗八升四合貳勺家數廿七軒ト記セリ後チ四百九拾三石九斗五升四合四勺免三ツ七分

トナル

宮野内新田 俗ニ六ツ新田ト唱フ、ムツハミヤウチ約言ナリ貞享村組付ニ所見ナシ以後ノ創始ナリ高七十三石四斗七升三合四勺免三ツ七分タリ

齋藤氏 金四郎ハ遊佐郡宮野内組高六千八百七石五斗五升余ノ大庄屋タリ是レヨリ先キ明和元年遊佐郷ヲ三組ニ分割スルニ當リ初メテ大庄屋ニ係ル宮野内組ヲ立テラレ阿部源五兵衛ハ石辻組ニ、石山平内ハ江地組ニ、阿部久右衛門當組ニ召出サル同五年久右衛門松山侯ニ事ヘ嫡子專八之レニ代リシモ安永五年亦松山左澤代官ニ仕ヘトナル同七年中川通荒川組ノ劔持平八代リ來リ天明元年病死子亥之助幼

少ナルヲ以テ鶴岡ニ赴キ後チ御郡代支配トナル漆曾根組高橋儀六之レニ代リシガ寛政二年狩川組ニ移リ彼組ノ齋藤隼人コレニ命セラル同五年隼人添川組ニ移リ下余目組相馬重内來ル同十二年隼人再ヒ當組ニ移サレ養子隼之助相續シ文化十三年江地組ニ轉シ下余目組佐川貞治コレニ代リ嫡子惣藏相續シ天保六年御組外トナリシカハ是ニ至テ金四郎當組ニ召出サレタルナリ先祖金右衛門ハ本ト山形ノ浪士ニシテ元

和八年酒井家ニ仕へ北御門添役タリ同年御組外トナリ六世ノ孫金藏文化十一年京田組大庄屋ニ命セラレ同十三年石辻組ニ移リ十四年病死嫡子金藏相續天保九年休役トナレリ金四郎ハ實ニ其嫡子ニシテ子孫相承ケ維新後ニ及へリ御郡中大庄屋之記

宮内楯 現今役場所在ノ敷地ニシテ土居堀形尙存ス土人ハ丸岡民部大輔之レニ據リ後チ新田目村ニ移リシト云フ興廢ノ事歴詳カナラス

外ニ野 一ニ殿ニ作ル正保庄内圖明曆二年檢毛帳ニ高七百七拾九石八斗三升貳合壹勺

外野村、高五拾石兵右衛門新田ト見ユ兵右衛門ハ高橋氏ニシテ遊佐郷先代大肝

煎ナリ下項ニ詳カナリ眞享ノ比八百六拾七石三斗八升貳合家數六十六〇タリシテ後チ本高

七百八拾三石六斗六升貳合七勺免六ツ兵右衛門新田百貳拾八石壹斗六升三勺免五ツ五分貳厘

トナレリ

高橋氏 出ツル所ヲ詳カニセス蓋地侍ニシテ所謂遊佐高橋ノ一党ナルヘシ先代太郎左衛門ハ上杉時代ニ東禪寺城主甘粕景繼ノ推舉ニ依リ遊佐郷大肝煎ヲ命セラレ祿百石ヲ食ミ最上酒井兩家ニ歴仕シ寛永四年退役ス嫡子長四郎年廿二ニシテ

跡式ヲ賜ハリ太郎左衛門ト稱ス下ニ引ケル寶永八年ノ文書ニ據ル時ニ酒井家入部以來日尙淺カリシ

ニモ拘ハラズ領内ノ田畝ニ丈量ヲ加フルコト二回ニ及ヒ爲メニ百姓ノ隱蔽地多

ク檢出セラレ且最上時代マテ八年々作毛ノ豊凶ニ依リ見作ヲ斟酌シ貢租ヲ收納

セシカ酒井家ニ至リ毎村一定ノ稅率ヲ制セシテ一旦水旱ニ遭遇スレバ有司

ノ檢毛如何ニ依リ百姓納租ニ堪ヘスト稱シ頗ル怨嗟ノ聲アリキ而モ酒井家ノ檢

田及ヒ稅率ノ規定ハ當時適切ノ施政ナルヘシト雖モ久シク軍政ノ下ニ在リテ寛

潤ノ制度ニ恆レタル人民ハ以テ非常ノ苛法トナシ寛永九年十月遊佐荒瀨ノ百姓

相率キテ由利仙北ニ亡命スルモノ甚タ多ク隨テ田畝ノ荒廢ニ屬スルモノ亦少カ

ラス時ノ郡代家老柴谷武右衛門加藤甚十郎等是レ大肝煎ノ措置宜シキヲ得サル

ノ効ス所トナシ太郎左衛門及荒瀨ノ池田刑部左衛門ノ職ヲ奪フ太郎左衛門抗辨

屈セス獄中ニ投セラル翌十年幕府ノ横目分部左京將ニ庄内ニ下向シ施政ノ良否

ヲ察シ百姓ノ疾苦ヲ問ハントス开モ封内ニ流民ヲ出スハ即チ領主ノ失態ニ歸ス

ルヲ以テ柴谷等ノ沙汰トシテ川北代官堀兵助ヲシテ下野澤村菅原次右衛門上鞞

島村石川作右衛門ヲ由利仙北ニ遣ハシ彼領主ニ交渉シ流民ヲ拉ヘ歸ラシム二人其功勞ヲ以テ遊佐荒瀨ノ大肝煎ニ命セラル同年六月分部氏庄内ヲ巡視セリ有司百方彌縫幸ニ無事通過スルヲ得タリ同十二月太郎左衛門赦サレテ出獄セシカ同十一年幕府ノ巡見使再ヒ下向ノ聞エアリ柴谷等太郎左衛門ノ訴狀ヲ捧ケ治安ヲ妨害センコトヲ恐レ事ニ托シ之レヲ殺サントス太郎左衛門聞知シ大ニ憤リ同年五月弟長四郎ト共ニ竊ニ江戸ニ赴キ左ノ目安ヲ上リヌ

(外野邑高橋氏文書)

○出羽國遊佐郡前代名主太郎左衛門乍恐御目安指上候事

一酒井宮内殿戌年庄内江御入國被成候當年迄拾三年庄内御持被成候戌之年ヨリ子之年迄三年ノ内ハ御百姓手前有次第ニ御物成御取被成候丑之年三國○御引由利飽海三郡ヲ云フ御繩入被成村々定免ニ御定被成候田地も相當不仕候御物成御取被成候ニ付三郡之百姓前代語傳ヘニも箇様ニ過分之御物成相濟マセ身上不能成候義庄内出初御座有間敷と迷惑仕候事

一最上源五郎殿御代拙者扱申候御物成取米五千七百石程罷出申處ヨリ年々日損水損御指引被成百姓も身上罷成候様ニ被成候が御當代御繩入取米壹萬石之上ニ罷

成水損日損戌之年ヨリ巳之年迄八年之間御差引者無御座候故年々御物成不能成我等扱所取米壹萬石之内外之所とも男女共ニ人數千人程も賣申候て年々御物成ニ相濟ませ申候以來も御尋被成候共其かくれ御座有間敷候
一庄内三郡江午之年殊之外水損日そん入作物過半絶し申候得ハ少し御指引被下候へ共跡亥之年詰りと申其年も不作ニ合せて少し指引御座候間村々ニ而百姓身を賣潰し御物成ニ相濟申候取わけ庄内之内岩川村東村與申所戌之年ヨリ巳之年迄八年之間ニ百姓大方身を賣此兩村ニ百姓無之候得者田地野ニ罷成候を人返しを申付られ町人などの金子貳兩三兩宛買置申候百姓を町人以下代金損ニ仕買申もの共相返し申付午之年ヨリ身上不能成百姓身を賣可申與申候へ共買候て人返しに逢いらさる事ニ候と申百姓置申もの無御座候ニ午之年未進御催促ハ中々筆ニも不申及候様ニ而百姓女房子供殺生被成候得ハ身を賣申候ニも右之人返ニ驚買申人無御座候間何共節角未年申年兩年○寛永八九年ニ拙者扱所ヨリ百姓四十四軒之家ニ而人數四百人程欠落仕候をわれノ不念と被申前代我等儀者庄内國主ヨリ少知行をも被下代々遊佐郡扱仕候を身上をも被召上其上西之三月○寛永十年宮内殿御居城江被召寄奉行衆之計ニ而百姓江拙者違有様ニ目安上候得與内證ニ而被仰付候得者百姓も奉行之斷ニ候間不及是非目安指上申候乍去拙者覺も無御座事五拾色程我等ニ申かけ仕候奉行衆も太郎左衛門手前ニ少も非分有之ハ成敗可致旨ニ而

三度迄對決いたさせ申され候へ共皆僞りを申かけ候間百姓のまけニ罷成候を又此目安之事ハすて置申之年百姓之欠落仕候か拙者之不念與被申籠捨仕候得と被申付候其時我等申候者去年中百姓はしり候而も我等非分成事とも申かけ太郎左衛門ニ恨御座候間欠落をも仕申之由置書成ともいたし欠落仕候ハ、我等籠捨被仰付候も尤之義にて候田地も相當不致候様ニ御物成御取被成候故ニ生國をふり捨て欠落仕候ニ我々科ニ成候事いわれぬ義與申候得者上與下與の義ニ候へバ西十月十六日ニ無理籠へ入被申候□なしに成敗可仕様ニ兩奉行衆内談被申候か御家中年寄衆被申候者科なきものを成敗仕候義成間敷候與被申候ニ付西十二月十九日ニ籠ヨリ出し被申候是と申も我等前代百姓之頭をも仕候者ニ候得者已來も江戸ヨリ御國巡衆御下向ニ候者百姓之不罷成候通を御目安上ケ可申かと兩奉行氣遣被仕あらざる義を申かけ成敗可致旨ニ候間當三月十三日ニ宮内殿居城罷出申國々回リ五月十八日ニ江戸江參申候其上庄内中ニ而御物成ニ人賣申候事戌之年ヨリ巳年迄八年之間ニ男女共ニ五六千人も賣可申と存候此外ニ馬牛賣御物成ニ濟申事ハ筆ニもおよひ不申候扱又御入國以來百姓欠落仕候者家數貳百五六拾軒も仕候尤我等なみ之百姓之頭とも數多御座候其ものとも扱所もいか程之百姓欠落仕候ニ其者をハ無事ニ指置拙者計わけて成敗を仕度様被存候間迷惑存爰元江罷登候事

一庄内荒瀬之郷新田目村と申所之百姓戌之年御物成ニ付御催促被成候百姓之手前米有程者御取被成候而其上ニ御才促ニ被遣候百姓命もつゝき不申様ニ御せつかん被成候而是ニ迷惑ニ存候秋田佐竹様之御領分へ百姓拾貳參軒欠落仕候を庄内ヨリ竹内五兵衛と申家中之年寄之内ニ而御座候を使者と被仕欠落百姓相返し可被申と御佗被成候へバ佐竹様御奉行衆被仰候ハ何方之百姓も身上不罷成候得ハ欠落仕ものニ候間此百姓以來身上罷成候様被成候者御返し可被成與御返事被成候得者奉行衆被申候者以來も身上罷成候様ニ可申付候與堅被申越候ニ付秋田佐竹様ヨリ御侍さしそへ被成右之百姓子共女房とも迄も庄内江御越人數も御渡被成候御侍衆被罷歸候と欠落仕候百姓共無殘御成敗被成候女房子供御城江御取上ケめし被遣候其内他國江も御賣被成候依此儀只今いか程百姓佐竹様御領分へ欠落仕候得共御返し不罷成候事

一庄内之鹽濱之百姓數多御座候が別而作物不仕候鹽をやき郷ニ而米ニ賣其代米持罷歸身上つゝけ前々罷在候ニ御當代ハ鹽濱と在郷之間ニ口留と申鐵砲之ものと指置かれ鹽成共鹽賣申代米ニても見合次第ニとられ御藏江納申様ニ候へバ何とも庄内郡々鹽濱百姓迷惑仕米壹升貳升宛懷ニ入妻子をはこくみ申様ニ御座候間節角ニ存御城米借リ申候て身上つゝけ申候得者敦賀之米直段之代金年々御取候間彌々身上不罷成候事

一 庄内之内飛鳥與申所庄内之内ニ御座候か庄内ヨリ舟路ハ十里程御座候前代其内
 三郡江嶋ヨリ肴を持參候て秋春賣買仕其代米持歸身上送り申候家百軒計御座候
 御當代ニハ庄内在郷ニて肴賣買御法度ニ被成候得者百姓とも身上不能成候御城
 米借申候得者敦賀高直段ニて金子御取被成候間百軒計之家六拾軒程ハ庄内地江
 渡リ女房子供迄引つれ門こつちきを仕殘四十軒計之家往來之舟入御座候間其力
 ニてなきノ續罷在申候事

一 庄内酒田與申所家數千五百軒も御座候か前代田地ハ無御座候往來之舟出入之力
 其上在郷江出入少宛之商仕候て身上を送リ申候御當代ニハ酒田與在郷ヨリ之間
 ニ御鐵砲衆口々ニ番を置見合次第ニ賣物又賣候而も代金爲御取被成候得者かし
 に及申を迷惑存候御藏之米借リ申候得者敦賀之高直段ニ金子御取被成其外商ハ
 無御座候ニ代金調可申様無之候得者能家持申ものハ家を賣船を賣濟マセ申候能
 家船持不申候ものハ身をうらせ代金御取被成候酒田ニかきらす田地をも不仕
 鹽をやき商内をもいたし身をおくり申候者家之三千軒も四千軒も可有之候が其
 所江ばん置米前代者通し申候を御通し無之事ハ御藏米を貸し敦賀高直段ニて金
 子御取可有御分別ニ候かやう之所江いろノ役所・筆^{取カ}にもおよひ不申候事
 一 庄内遊佐郷八日町村甚左衛門與助と申もの其村之名主與兵衛と申ものハ御城へ
 年々相濟申入來ぬかわら草之少お入申分仕御公儀ニ申上候得ハ寅之年ヨリ此兩

人之百姓を籠捨被仰付候但し百姓と名主ニハ御物成によらず少々之出入者數多
 御座候得共是程ニハ不被成候此者當年迄九年之間籠ニ指置被成候ハ此甚左衛門
 與助八日町之郷ニて前代大百姓ニ御座候間籠捨御免元之百姓ニも被仰付候様ニ
 與毎年數度御佗申上候へ共御合點無之候内に彼之與助與申もの酉之霜月籠ニて
 相果申候殘ル甚左衛門ハ當三月迄籠ニ罷在候此者とも親類何程迷惑ニ存候へ共
 上と下との儀ニ候得者不及是非候事

一 庄内江御國巡ニ分部左京殿酉三月御下向之節荒瀬寺田村彌助と申もの宮内殿御
 入國以來御物成ニ女房子供迄も不殘其上其身までも賣御物成濟マセ申候由左京
 殿江御目安指上ケ申候へハかゆう成御仕置庄内奉行衆非分之由被仰候ニ付女房
 子供其身までも取かへしもの田地ニ彼彌助を被申付候て満足ニ存候得共左京
 殿江戸江御登被成候得者彼彌助酉之十月中籠ニ入被成候是も當三月迄ハ籠ニ罷
 在候其上庄内郷ニて萬ッ御仕置非分之通少も御目安さし上ケ可申ニ支度仕候を
 れとも萬事ニ付迷惑之様ニ奉行衆指引ニて候間朝夕なげき可申上様無御座候事
 一 酉之六月庄内江御國巡リ衆江戸ヨリ御下向之由酉之正月ヨリ奉行衆間被申庄内
 三郡之郷中町中迄も無殘被申渡候ハ萬ッ諸役差引可申候間江戸ヨリ之御國巡衆
 御下向被成候ても御目安上ケ申間敷由惣別江被仰渡候間左様ニ指引さへ被下候
 者何分ニもと申御仕置非分之通不申上候ニ左京殿御登被成候得者役所も差引不

被成右之通ニ御仕置御座候間上下迷惑存候事
一前代ハ宮内殿居城侍衆町人迄も取次第ニ薪をも伐候木山を宮内殿御代ニ留山ニ被成鹽濱通ヨリのはりさし被仕身上以來罷成候様ニ可仕候間扶持人ニ成候と取ぬきニ百人能者を取そろへ少々之御扶持方にてかゝへ木をきらせ家中町人ニ賣被成候木剪ニ定申者も年ニ一日も不參なく木剪山へ計罷在候木を買町人以下も迷惑存候事
一酒田ニ申所家之千五百軒も御座候處にて五丁野ニ申萱野を前代少々谷地御年貢濟苜申を只今留谷地ニ被成家を持申候町人ニハたとへ後家にて可有候共札壹枚を上銀貳匁ツ、ニ御渡し被成候又家壹ツニも人足持候もの候へバ五枚も十枚もあて被申候後家杯ハ萱をもからず札を捨申候ともなへなどを賣かへ候て札銀子相濟申候事此義ニかざらす庄内村々にて村近之川野地江ハ其村々ゆいかけ次第ニ御年貢御取被成候罷成間敷ニ申候得バ川ならバ子とも成共立よらせ申間敷由書物をいたし候へど申付候間不及是非被申付次第ニ川谷地之御年貢濟マセ申事一萬事ニ付庄内三郡之百姓長人迄も他國ニ相違仕候御仕置敷多御座候故身上も不罷成候義庄内出始リ御座有間敷と朝夕之なげき中々筆にも及不申候殊ニ庄内ヨリ江戸迄ハ遠路と申庄内ヨリ之百姓以下他國江罷出申事手別無之候てハ不罷成候得者かやう之義申上義なく拾貳參年之間三郡之町人百姓ハ不及申從上様前代

神領寺領江被下候年々にて祈念仕寺々山々知行其主之手作ニ致候所江御繩にて打出し宮内殿御物成御取被成候様御座候得バ日本四番之鳥海山程之衆徒中者前代なく身を賣申候て御物成を宮内殿江濟申ものも御座候但前代從上様地方にて被下候神領寺領江宮内殿御繩を入打出之分ニ出家ニ身を賣せ御物成御取被成候者庄内をのけ他國ニハ無御座候事萬事ニ付かやう成御指引計にて御入國以來十二三年間暮しも町人百姓寺々迄元之身上十之物只今者三ッ壹ッも不罷成候此儀偽りと被思召置候付てハ御横目衆申請我々御先立甲宮内殿ニ御恨御座候百姓共ニ面々之御目安上ケさせ可申候此儀不罷成候得者庄内奉行武右衛門甚十郎と申もの江戸江罷登我等と對決仕候様ニ御指引被下度候拙者儀百姓なから代々庄内之國主ヨリ御知行をも被下百姓之うきしづみをも見計百姓之不罷成時者百姓罷成候様ニ訴訟仕申人々代々庄内名主被申付候ニ今度宮内殿御代ニ罷成候て御徳取被成候事ハ御合點にて候百姓不罷在候て少々御損をも被成候百姓罷成候様ニと申候へハ御合點ニハ無御座候去年中百姓之我々ニ公事を仕かけ申をも皆々我等申わけ候御家中ニも年寄衆被存候又我等科なく候ハ、籠江入申ものか罷出候乍去恨者宮内殿兩奉行武右衛門甚十郎と申者ニ御座候得共十三年之間少知行をも被下候間此御恩をいかゝと存候て當五月江戸江登着候得共宮内殿御内石原平右衛門同内記村井兵左衛門山中五左衛門と申者を頼様々申分仕候ニ國之奉行申

義御合點被成我々を見あいニうたせ可被成様御分別之由承候間上方ヨリ上様御還御被遊候内にハ随分拙者之身をつゝミ罷在候而憚至極ニ御座候得共代式ニ而御披露申上候御馬之先ニ而うたれ申候とも御還御被遊候ハ、路道中ニ而御目安指上ケ可申候間以來之義ハ奉願上候憚成申事ニ御座候得共御國ニて及承申候其上今度上方ヨリ御仕置ニ御下向之由承リ申候間先ニ如此御座候此外ニ數多申上度事御座候得共筆を殘し御披露仍如件

寛永十一年戌之八月二日

出羽國庄内遊佐郡

太郎左衛門

松平右衛門様

御小姓中御披露

時ノ老中ハ松平伊豆守信綱ナリ而モ忠勝侯ノ世子忠當ハ實ニ信綱ノ女壻ニシテ酒井家ノ顧問トシテ内政ニ預リ莊内ニ於ケル總ヘテノ事情ハ既ニ稔知シツ、アレバ太郎左衛門ノ訴狀ヲ受理セラル、ヤ松平右衛門大夫正久ト商議シ双方ノ理否ヲ推究セス百方調停シ○東平田村朝日山城ノ下ニ掲載スル増井所左衛門ノ書翰參照スヘシ太郎左衛門ヲシテ過ヲ謝セ

シムルト同時ニ忠勝侯ニ高橋池田ヲ復職シ向後縱令過失ト認ムルアルモ自ラ之レカ證左トシテ左ノ書ヲ太郎左衛門兄弟ニ交付シ其局ヲ結ハレタリ盖是レ歸國ノ後チ有司ノ爲メニ害セラレンコトヲ慮リ豫メ之レニ備ヘタルモノナリ

(高橋文書) 今度其方など出入之儀宮内殿江達て佗言申様子能相濟歸候上ハ何之違亂茂有之間敷候乍然其方など違目在者成敗有度と宮内殿思召候ハ、我等共江御相談ニて候上成敗被成候様ニと申定候萬一不慮之義も候ハ、此書物親類共持參候ハバ遂穿鑿可遣候 以上

寛永十一年十月廿六日

松平伊豆

信綱

松右衛門

正久



庄内遊佐之郡

太郎左衛門とのへ

長四郎とのへ

(雞肋編)

寛永九年壬申十月川北遊佐郷荒瀬郷の百姓數多由利仙北江欠落ニおよふニ付遊佐大肝煎高橋太郎左衛門荒瀬大肝煎池田刑部左衛門兩人取計方宜しからず大肝煎役被召上其上太郎左衛門儀者牢舍被仰付候

同廿七日奉行所より下野澤村次右衛門貢味島村石川作右衛門兩人被登召此度遊佐荒瀬の百姓貳百八十余人由利仙北江欠落いたし候ニ付兩人之者才覺を以早々可引込旨命せられ金子等被下兩人仙北江罷越男女不殘引連歸と云々

石川作右衛門覺書に仙北江罷下佐竹様御扶持人佐々木喜左衛門矢嶋領小松將監等作右衛門相職之者ニ付右兩人を頼遊佐荒瀬の欠落百姓者勿論川南之内添川組狩川組余目等之欠落百姓若干不殘連歸ると云々右ニ付追て仙北佐々木喜左衛門並小松將監江爲御音信殿様ヨリ木綿五十端作右衛門を御使者として贈り遣はさる其後喜左衛門爲御禮鶴ヶ岡へ罷出武右衛門甚十郎逢候て猶又御上下銀子貳兩を賜ると云々

右之次右衛門作右衛門翌年の春五拾石宛を賜ハリ遊佐荒瀬の大肝煎を命せらる寛永十一年八月二日於江戸遊佐郷大肝煎高橋太郎左衛門松平右衛門大夫殿江目安之訴狀を差出す是ハ去ぬる寛永九申年遊佐荒瀬兩郷の百姓數多欠落之一件ニ付右太郎左衛門並池田刑部左衛門兩人之大肝煎御咎之次第有之兩人共大肝煎役被召放

別て太郎左衛門右不屈之由を以て牢舍被仰付候處其後御赦免有之此年五月潜に江戸江登リ郷奉行仕置宜しからざる旨數ヶ條之訴狀を以今二日松平右衛門殿江指出と云々然る處右衛門大夫殿正久伊豆守殿信綱御取扱之上今年十二月廿六日御兩所より右太郎左衛門並弟長四郎兩人江御書を賜ハる其意趣者今度其方抔出入之義宮内殿江達て佗言申様子能相濟歸國之上者何之違亂も有之間敷自然其方等違目有之成敗有度と宮内殿思召候ハ、我等共江御相談候事ニ申述候間萬一不慮之儀も候ハ、此書物親類共ニ持參候へと云々太郎左衛門歸國其罪を免され如故百石にて大肝煎被仰付寛永十五年寅御知行貳百石被下御家中並被仰付弟高橋兵右衛門始長四郎百石被下大肝煎相勤候處在役十五年にして不調法之義有之御知行被召上と云々

是ニ於テ高橋兄弟八年來ノ迷憤ヲ展ヘ脱走越訴ノ罪ヲ問ハレサルノミナラス池田刑部左衛門ト共ニ遊佐荒瀬大肝煎ニ復セラレタリ成覺院御分限帳ニ高百石遊佐長四郎ト即チ是レナリ此皆信綱ノ措置ニ出テシモノニシテ柴谷等亦之レヲ奈何ントスル能ハサリシナリ

然リト雖モ高橋ノ復職ハ本ト柴谷等ノ欲セサル所ナリ且菅原石川ハ爲メニ郷中横目穀止役ニ轉セラレシヲ以テ勢ヒ高橋兄弟ニ平カナラス當時ノ事情ヲ察スル

菅原等ハ既ニ大肝煎ノ職ヲ失フト雖モ郷中横目ニ在リテ柴谷等ノ威ニ籍リ優
 ニ高橋ヲ制スルノ順境ニ立チ高橋ハ一旦勝ヲ訴訟ニ制セシモ其實逆境ニ在ルモ
 ノナリ故ニ事毎ニ柴谷一派ノ有司及ヒ菅原等ノ爲メニ窘メラレシモノ、如ク從
 來ノ經歷上自ラ然ラサルヲ得サリシナルヘシサレハ寛永十二年十二月長四郎有
 司ノ非理、菅原等ノ不法ヲ松平右衛門大夫ノ臣増井所左衛門ニ縷述シ併セテ心
 事ヲ吐露シ哀ヲ乞フニ至レリ菅原等亦之レニ對シ答辯スル所アリ之レニ係ル文
 書左ノ如シ但此文書ハ今高橋菅原兩家ニ傳ハラス萬書集抄ニ掲載セラレタリ

(萬書集抄所載菅原文書)

乍恐以書付を申上候

〇二三字 計虫食 訴訟我等兄弟罷登候節ニ御取成を以て〇此間四五 字計虫食 様御前へ太郎左衛門被召出様
 子とも山爲〇同ため思召候哉又我等共ふびんと被恩召候〇此間六七 字計虫食 ことばり被仰無相
 違國本へ被召返候事右衛門様伊豆守様御かけありかたく奉存候春〇一二字 計虫食 にも早々
 以飛脚なりとも御禮可申上候へ共〇此間三四 字計虫食 様かさにかき何をかうつたへ申と人々ニ
 あやぶまれ申候へ共不入事と存態と延引仕候御次而之刻可然様ニ御取成奉願候
 一霜月我等罷下リ候節貴様被仰渡候間遊佐郡大肝煎太郎左衛門前々仕來候ことく

拙者ニ被仰付候あら瀬之郡ハ不殘大肝煎如前々六兵衛〇刑部左衛門ノ嫡子ニ返し被下兩郡ニ
 於て萬毛頭御如在不申御奉公仕候其上御兩殿様御えいろひ罷歸候間たれしもの
 いかやう事申かけ候共必々いらん申間敷候いにしる我等にかゝみ申者ニも此上
 ハこしひぎを折ひろき道せまくあるき申様ニと兩山被爲仰候是ハ皆我等ためニ
 御座候間六兵衛我等身上大事ニかけ當八月迄御年貢諸役等も不及申何にても公
 儀御用隨分相調御奉公申候處ニ八月半ヨリ遊佐荒瀬兩郡ノさいそく入米留のよ
 こめとして右ニたゞつを武右衛門殿甚十郎殿被仰付郷中村々へいろ／＼さまさ
 まのせこを入太右衛門年來仕付申能小肝煎などを取はなし免々のきに入申者新
 肝煎ニ申付其外公儀内儀共ニさし引仕候間肝煎百姓共ニ此兩人次第ニ仕我等共
 ハ大肝煎と申名付計ニ而候此者とも奉行所並ニ武右衛門殿甚十郎殿その外郡奉
 行代官ニも内證共ニたち入免々身之ためノ能様ニ計取成百姓以下の訴訟申儀も
本ノマともまかり申候ニ付彌々我等共ぶてうはうものに罷成尤よ國餘郷にもさいそく
 人と申事可有御座候へとも餘人を被仰付候ハ、何様之儀も不苦候へとも日ごろ
 太郎左衛門てき／＼にて百姓の中太郎左衛門とあひのよきものをバ惡敷あしき
 ものニハいろ／＼のそ／＼をか筋なき事をいはせ終ニ太郎左衛門を追たをし
 申者を被仰付候さりとハ／＼武右衛門殿甚十郎殿御なさけなく是ハ我等命をね
 らい被成候御たくみニ御座候事

一御奉行所江御召被成候間參候へハ酒田へ米留之奉行ニ次右衛門作右衛門ニ被仰付候間此兩人はきくへむささ米もちし候者おさへ置又々可申上由被仰付候然處ニ作右衛門次右衛門酒田へ米を過分出したかくうり申由人々參申間候へども内々此兩人ハ我等と間あしく候ニ付而ちうせつニ申と存候へ共しせんわきより右之旨御奉行所へ御聞候ハ、我等如在ニ可罷成と存我めしつかひ候こもの四五人酒田へ渡り申川はたに番を置申候然共下々のきに御座候へハ無心元存岩河村彌三郎と申肝煎を頼我等こものよこめニ付置候人ノ如申九月十五日夜五斗入ノ米拾俵鹽四俵付出し申處をおさへ取候へハ馬かたに物共ニすてにげ申候馬かたなく候てハ口なしニ罷成候間當座御奉行所へ申上候て爲念馬かたをとらへ繩をかけ様子御奉行所へ申上候へともよし惡ハ御せんさく不被成人馬共二十月十三日迄我等ニ打付被爲置候其後代官三人へあい渡し申候右ニ我等頼米留申候彌三郎をバ我等ニたのまれ申^{ホテ}と^{ホテ}り故カ肝煎をとりはなし鶴岡籠者ニ被仰付候我等故ニ迷惑申候ニ付籠ノ賄も我等仕候此以前鶴岡より少々禮儀を茶を郷中へ入候とて江戸にて壹人御國もとにて壹人御成ばい被成候も御座候我等大分之ちうせつを仕ぶちうせつニ罷成我等之米留申候より外ニ過分ニ作右衛門米かくし出し申候由方々より訴人書付上ケ申候間御奉行所へさし上ケ申候へ共于今何ノ御せんさくも無御座候我等六兵衛此壹ヶ書ノ御法度あひそむき候ハハ十類火あ

ぶりニ可被成候へとも作右衛門事ニ候間御さたなく候閑様ノ御仕置めつらしく
存候事

一遊佐郡荒瀬郡兩郡ニ過分ノ田地あらさせ候由作右衛門次右衛門御奉行所へ申上候ニ付郡奉行貳人御代官壹人御たちあい郷中めいさいニ御改候へ共あれ申處壹歩も無御座候作右衛門次右衛門いつわりものニ御奉行衆被仰候事
一あらせの郡の内ニ壹條村と申所ニ大夫と申者はハ我等弟にて御座候此者過分ニ隱田仕候由作右衛門さいかくにて彌右衛門と申百姓訴人ニいたさせ候就夫酒井九兵衛殿本多庄大夫殿御奉行にてさを入候へ共隱田壹歩も無御座候作右衛門次右衛門御奉行所へ參長四郎弟にて御座候故御奉行衆るこにさを御入之由申上候へバ其後五兵衛殿權大夫殿奉行にていろさまノ御改候へ共右之通壹歩も出不申候事

一右申上候郷中ニあれ候と申田地改ニ當夏北目と申村ニとまり候處ニ御郡奉行傳左衛門と申仁夜半時分ニぬきかたにて長四郎のかし申まじき由にておしこみ申候は何とても身ニとりおほえ無御座罷出あいてニなるへき存候へとも是貴公様いろノ被爲仰聞候儀此事と存戸をつめ内ニ罷在候其内□□方入無事ニ罷成候則御奉行へ申上ケ子細を可承と存候へ共時分を以可申上と存延引仕候事ニ候右有増申上候此外いろノ儀御座候へ共とても以來迄御百姓仕とノけ宮内様御

用ニたち可申御しかたニハ無御座候間御せんさく被成被仰付可被下と申上候事に
 ハ無御座候武右衛門殿甚十郎殿あいてニ仕申分致候へ共 右衛門様伊豆様かさに
 き申様ニ御座候とかく右衛門様伊豆様何とぞ被仰上 宮内様へ御ことわりを被仰
 我等ニ御いとま被下御國安土被爲置候様ニ御取成奉願候去年我等兄弟御訴訟ニ罷
 上リ候前後ハ 宮内様も我等一類をまくしニもさしたく可思召候へとも右衛門様
 伊豆様御いろこひ被成候へバおくそこなく萬事を御ゆるし被成如前々之六兵衛我
 等ニ兩郡被仰付候去年霜月極月罷下一年も不立ニ又當八月我等共てきかたきと存
 兩人をよこめさいそく被仰付閑様ニ被成候事さりとハ迷惑申候然共罷下候時分貴
 公様いろく御いけん被仰候間今日迄毛頭あしき事も不仕候何之申分も不致候太
 郎左衛門ハケ様ニ可有之と兼テ分別仕他國致候我等も壹萬壹貳千石ノ大肝煎被仰
 付御知行も被下候へハ遊佐郡のおやかたといはれ罷在度事ハ海山に存候へ共右ノ
 御しかけてハ一年もかんに罷成間敷候間いわくなから御いとまを申又百姓
 の身上に罷成度と申上候心中ふびんと思召可被下候いか様ニ罷成候共 宮内様ニ
 たいしもう頭御恨ニハ存間敷候ケ様之書狀も兩殿様へ御披露ハ無用ニ御座候以來
 □□如此ニ御座候委此者口上可申上候 以上

寛永拾二年亥極月十一日

庄内遊佐郡 高橋長四郎

増井所左衛門様

右表書之訴狀遊佐之長四郎ヨリ參候御内見可被成候使之者口上御き、被成度候事

亥極月廿一日

増井所左衛門

加藤六兵衛殿

上雅樂頭典名付先肝煎喜不明取はなしかの彌三郎に肝煎申付候故戌年未進過分
 ニ御座候とて彌三郎手前ニも未進をなく仕候へハ御さいそく□□太郎左衛門手か
 た致年貢請負□□干今御年貢濟させ不申候太郎左衛門手かたいたまた御座候惣テ
 彌三郎いたつら仕候下くみ島村御百姓孫七郎と申者御年貢たり不申よし・御あら
 し子ニ出可申と相定申候を彌三郎申様ニハ御年貢をバ未進ニ書上人をバ我遣申候
 其の上亥ノ年八月ヨリ村々まで大ふんの米留を仕候がその留米を御代官へもしら
 せ不申候てぬすみ取申候又なわしろ田をあらさせ又御代官へ上リ申候名寄の内々
 にて入作の御年貢をかくしいろくのぬすみ仕候事その村々之御百姓衆能存訴人
 申ニ付て籠へ入申候そのち先肝煎喜右衛門と申者ニ被申付候へハ御年貢皆濟仕
 戌ノ御未進迄取上ケ申候此外四五人肝煎かわり申候ハ先肝煎を太郎左衛門參リ候
 て取はなし新肝煎四五人仕立申候ニ付て戌ノ御未進大分ニ仕候去年共先肝煎を
 申しら被仰付候へハ御年貢も皆濟仕又戌ノ御未進迄相當ニ取上ケ申候是も長四郎

るこ仕目をかけ申候者ハ手前よき者ニも未進をさせ申候事

一遊佐之郷荒瀬之郷兩郷ニて御田地あらし申候と拙者共申上候よし書上申候ゆめ

くなき事ニ御座候その改ニハ小關正左衛門被爲遣申候て御見せ被成候へバ□

□にて仕付不申候御田地御座候ニ付て正左衛門肝煎衆上リ書付を取持參申上候

へハ郡奉行衆兩人御代官同手代衆迄罷出仕付かね申處をバ人足を以仕付させ被

申候へバ御奉行所の御情を以田不殘仕付申候へハ長四郎申上ケ候事皆いつわり

ニ御座候事

一荒瀬郷之内一條村大夫手前の事申上候是ハ先肝煎彌左衛門と申者とがも無御座

候ニ肝煎を取はなし長四郎弟を大夫がむこニ仕新肝煎ニ致候ニ付て彌左衛門そ

れをやしんニ存隱田御座候由訴人ニ罷出候ニ付酒井九兵衛本多庄大夫檢見ニ被

罷出候次テ御改被申候へハ隱田御座候そのち又も御座候と彌左衛門申上候ニ

よつて鎌田五兵衛中村權大夫御越にて御改被申候へハ又田出申候御改帳御座候

間長四郎申上候事いつわりニ御座候

一郡奉行江積傳左衛門ぬきかたにて長四郎おとし被申候由申上ケ候いつわりに

て御座候右申上候郷中ニ仕付不申御田地御座候ニ付て長四郎無念のよしにてし

かり被申候をつくろい書上ケ申候御尋ニおゐてハ傳左衛門可被申候

一亥ノ正月廿日ニ我かやしきのめぐりニ人足を以堀をほらせ御林より柴をきりよ

せ惣くねをゆわせ剩門を立申とて宮内様御用ニさへ御遣なくしせんの御用のた

めとて御たしなみ被爲置候けや木の太木を八本まで下黒川御はやしにて切大も

ちにてひかせとりよせ門を立申候閑様の我ま仕候

一長四郎書上如申一年も不罷立ニ最上殿御代よりの能肝煎を取はなしわれニ奉公

ぶりを致候へバ彌三郎かやう成ル人の下人身うけ致居候者ニ新肝煎を申付いろ

く我まいたつら仕候事何も譜代の御百姓めいわくかり去年の二月三月村々

より太郎左衛門長四郎いたつらなる仕方目安ニ上申候右衛門様伊豆様宮内様へ

御理リ被仰前々之通ニ被仰付候者ニ御座候へバ幾ほともなくいたつら仕候儀を

せんさく申儀もいかと被存候か武右衛門甚十郎此せんさくもいまニ不被申候

へハそれを能事ニ存いよく□さつけ成体にてかやう成いたつら成書物上ケ申

長四郎太郎左衛門いたつら成仕合ヲ去春御百姓共上ケ申候目安ハ武右衛門甚十

郎處ニ可有御座候其上庄内之儀ハ最上殿御代ヨリ他國へ人の出入むさど不仕候

事御法度被致方々ニ口留申爲致候殊ニ近年ハ加藤肥後殿御預リニ御座候へハ御

公儀ヨリ人の出入御改させ申成候様を被仰出候處ニ御法度ヲ背山道をしのび江

戸へ折々の使ヲ越候事いたつら與奉存候ひろき道をせばきと書上候事ナク閑

様成義を申上候哉と奉存候

右之條申上候儀憚多御座候へ共長四郎書付ニのせさし上申候ニ付無是非返答書仕

申上候此外ニも様々之儀共御座候へとも永々敷ハ不被申上候間如此有増申上候

(寛永十三年)

二月十二日

菅原次右衛門

石川作右衛門

増井所左衛門様

此爭論ノ結果如何ニナリシヤ文書ノ徴スヘキナシ同十五年ニ至リ太郎左衛門新
知二百石ヲ賜ハリ家中並ニ召出サレ弟長四郎ハ舊ニ仍リ大肝煎トナリ祿百石ヲ
食メリ有司ノ覺エ愛カラヌ高橋兄弟ニシテ此恩典ニ預ルハ其間多少ノ消息アリ
シナランモ今得テ考フヘカラス是レヨリ高橋氏兩家ニ分レ太郎左衛門ハ鶴岡ニ
移住シ子孫連綿トシテ今尙存セリ

長四郎後チ兵右衛門ト改メ遊佐郷ヲ支配セシカ毎ニ菅原石川等ノ爲メニ窹メラ
レ承應元年吹浦新湊等ノ事ニ坐シ解職閉門ニ處セラレ明曆二年ニ至リ幽閉ヲ赦
サレシモ翌三年病死ス年五十三閉門年限及ヒ歿年等ハ下ニ掲ク
ル延寶六年同八年ノ書ニ據レリ

(酒井家御土藏記録寫)

乍恐口上之通以書付申上候

一下野澤村肝煎與八郎與申者極月十三日ヨリ當春迄なわをかけ指置申段辰正月廿
五日御會所へ罷出申上候へバ先御横目代官衆へことわり可申由被仰出候ニ付而
則横山五右衛門殿へ參候て右之様子申上候へハ五右衛門殿被申候ハひらき畠八
尺さを之由申分兼ニハおさをなりに御年貢出し可申與手形仕候者與八郎なわを
御ゆるし可被成由案紙被遣候間其通ニ手形を仕五右衛門殿へ相渡し申候それニ
仍二月四日ニ御會所へ罷出不申候事

一上野澤新田之ひらき畠之儀ハ前代上野澤村之地之内ニ御座候間御檢見衆御さを
御入被成候當御代之御檢地ニハ道切川切ニさいま迄さし申候間只今北目分と肝
煎主計申ニ付而兵右衛門儀主計口次第ニ北目分ニ帳ニ取申候又ハ明日京田新田
より御檢見衆御先立可申と申候へハ兵右衛門主計如何様ニ談合仕候哉御檢見衆
ニ爲見不申候而霜月三日雪ノ上ニ而御横目代官衆と何れ御さをいれ被申候我等
畠之儀ハ丑ノ年御さを御入被成候ニ只今川切ニ罷成候而北目之地方ニ罷成候と
新田村之肝煎御檢地帳をひろげ色々才覺申候へ共御合點不被成八るニ被仰付新
田之肝煎百姓衆被召出爲御聞可申と御檢見衆御通之刻ハ爲見不申候而程過候て
兵右衛門自分ニさを入被申候ハ是ハ子細御座候事

一京田新田家十軒上野澤新田ニ家數五軒兩村ニ家數十五軒御帳ニむすび指上候我
等才覺ニ而たて申候新田ニ御座候へハ兵右衛門大方つぶし被申候へ共それにも

拙者ハかまい不申候へ共新田ハ近邊ノ野谷地を見たて家をたて申ものニ而御座候北目之地方と申高を北目へ越京田吉出上野澤方々へ高をわけとられ申候者新田兩村つづれ可申候乍去郡中之新田たち申なみに被仰付被下度候事萬事口上ニ而可申上候 以上

慶安五年辰ノ二月十四日

菅原五郎左衛門

御奉行所

乍恐遊佐之内水上村肝煎清藏書付を以申上候事

一大肝煎兵右衛門殿萬事ニわかま、被成水上村たいてん仕田地あまり申ニ付而卯ノ春中水吞百姓七間杉澤村より越被來候はづニきわめ被成候其上ニ我等くみ下村より兵右衛門殿御かし米とり可申由我等ニ被仰候へ共春中之義ニ御座候へバ人を賣りとり申より外ニ無御座候左様ニ仕候へはいよ、我等無念ニ可罷成候間御かし米取申事なり申間敷候と申候へバ右ニ我等村へ御越被成候はづ之百姓不被成ニ杉澤村へふり田ニ被成候へバ我等無念ニて郷中ふりつぶしふり田ニ仕候と御公儀より御尋御座候へバ存なから我等無念ニ罷成候間右之通卯ノ四月書付指上申候へバ兵右衛門殿卯ノ七月より肝煎組頭とがなき處ニ取はなし被申候ニ付而則八月より極月迄此方ニつめ申しな、之義申上度存罷在候へ共郷中に

て我等おや子兄弟まで廿日あまり繩をかけられ申候へハ何共迷惑仕候又ハ御檢地帳無御座候へバ御年貢之らち明不申と申候而先々之帳渡し可申由郡御奉行衆被仰付候間御意次第ニ仕候て帳渡し申卯ノ四月より申上候ことくニ兵右衛門殿わかま、ニ被成百姓つめ被成候事かず、御座候間卯ノ八月より同極月迄鶴岡ニつめ罷在候間兵右衛門殿と御引合被下候ハゞしな、之義乍恐御前にて口上ニて申上度候事爲後日仍如件

(承應元年)

たつノ正月十八日

水上村 清藤 印

御奉行所

水上村清藏御目安上申返答書之事

我等萬事我ま、仕水上村たいてん仕候と清藏申上候一切覺無御座候去年春中御田地百六十石余あまり申候と我等方へ申候ニ付拙者參百姓改申候へハ清藏申ことくに御田地過分ニあまり申故我等申やうは此跡武右衛門殿御存生之時分十六年以前今泉村と申處田地過分ニあまり申ニ付水上村へ八十石余渡し候此御田地を今泉村へ返し本村之田地を作り申様ニと申付候へ共合點不申候故御代官衆と相談仕杉澤村へ水上之あまり地去年春中百六拾石余相渡つくらせ申候其後清藏申様ハ杉澤へ之越高ノ分居なから肝煎仕壹分給をも取可申訴訟數度之處ニ拙者

申候ハ其方も今泉村より請取申高之分肝煎給取申候間左様ニハ成間敷と申候其上肝煎與頭はなれ申品ハ寅ノ御物成御勘定御代官衆被仰付候へ共右之通杉澤之百姓扱ニ被成不被下候者勘定仕間敷と申きり卯ノ七月末迄勘定不仕候間内々にテハ不能成候間郡御奉行衆迄御代官衆狀被遣漸つれよせ勘定きハめさせ申かやうニ我まゝ申ものニ御座候間肝煎與頭御代官衆と御相談仕はなし申候扱又水上村之御物成帳御檢見之時分ニも御代官衆様々渡し候へと被仰候へ共渡不申候其後御物成時分ニ罷成候へ共帳渡不申候ニ付又々御代官衆と相談申卯之極月朔日之比郡御奉行衆へ狀遣申候て帳請取申候此帳を其時分迄渡し不申候も清藏我まゝ仕置候間渡兼申候と見へ申候水上村之たいてん萬事之儀百姓共被召出被聞召可被下候 以上

辰ノ二月十二日

高橋兵右衛門印

御奉行所

乍恐以書付を御訴訟申上候事

一御公儀にて御存知無御座候所ニ内々ニて御百姓衆つまり申候間肝煎百姓連判を以とら五月^{○慶安三年}御訴訟之書付申上則御會所ニて對決仕候時分萬事御公儀より被仰付候ことくニ可申付由兵右衛門殿へ被仰付候へ共右ニ不替萬事我まゝニ計被

申候間卯ノ四月も書付指上申候へバ則御うら判被下候ニ付て兵右衛門殿返答書被成御會所へ上ケ被申候へバ重て御聞被遊可被下と被仰付候事

右之書付之外ニ申上候事

- 一御公儀より被仰付候萬事之諸役并人足本たてニ被成□仕ニ被仰付たびノニ兵右衛門殿手前へ萬事迄取込被成候ニて惣百姓之つまりニ罷成候事
- 一兵右衛門殿米村々へかし被成八割ニ利をかけ御年貢前ニ御取被成候へバ其者之御年貢あき申候ニ付て御未進ニたてさせ被成候としも御座候八わり米指引申候者ハ武右衛門と申百姓過分之持高之者を何の諸役もさせ不申永代ニ置被申候へバこれも百姓之つまりニ罷在候并ニ與右衛門與七郎と申ものも八わり米指引仕候へハ兵右衛門殿御かけにて自由成事仕候事も御座候事
- 一御國さかい之松杉兵右衛門殿自由ニ切被成吹浦村之うらめ之家土藏門材木其外ニも御遣被成候女鹿村之肝煎兵右衛門殿次第ニ萬事自由成事仕候此儀偽りと思召被遊候ハバ御檢者衆御遣被遊候者我等御先立仕委掛御目可申上候事
- 一兵右衛門殿百姓之手前より萬事迄申かけ取被申候事ハさておき御公儀之物迄盜遣被申候事御公儀へ申上候へハ盜不申様ニつくり手形可申候有市様へ狀を被申候・大事之儀ニ御座候間定てつくり手形ハ御出し被成間敷と奉存候遊佐貳萬三百石之内ハ何様ニ被成候も兵右衛門殿自由ニ候へハ有事も左様又ハ無事も有様

ニつくり被成候か剩へ御家中之内迄自由成様ニ状遣被成候兵右衛門殿被申候ハ我等儀ハ余人之大肝煎ニ違ひ御江戸にて大肝煎ニ罷成候間遊佐中之内ハ如何様之義仕候而も末代身上替り申事無御座候と被申候就夫か又ハ兵右衛門殿大肝煎之内ニもわき百姓ニも無并キヒぶん限し者やニ御座候へバいつかたにも其身之たりにならせられ候御市様へハ色々之御ちうほうニ罷成候音物をさしけおんみつニ奉願候上□□兵右衛門用も候者申候へと之御ことわりも萬ニ一ツ御座候哉遊佐中ハさておきうき世迄物事自由成様ニ被仕候事ハ無上キふるまいニ御座候と奉存候兵右衛門殿有市様へつくり手形可被下と之状越被申候事偽りと思召被遊候ハ其證據御座候間御意次第ニ罷出掛御目可申上候事

一兵右衛門殿内々にて御百姓つめ被成候間萬事御公儀より如被仰付ニ兵右衛門殿へ被仰付可被下候と寅年も肝煎百姓連判を以御會所へ御訴訟申上候へハ其連判之肝煎百姓中間之百姓斗無口ニ籠へ入又ハ繩をかけ萬事を申かけ被成候へハつゝ可申様無御座候間當正月廿五日之御會所より三月十四日之御會所迄詰申候右之條々兵右衛門殿并ニたとな吉兵衛と出合品々之儀御會所にて口上ニ申上度奉存候へ共重て御聞可被成候由被仰出候間不及せヒニ御意次第ニ罷歸り御田地さいばい仕候右申上候如く兵右衛門殿我まニ斗諸役人足萬事を申かけ其村々たいてん仕候と我等共無念ニ可申付候たくみ被成候間御公儀之御仕置御正直

ニ御座候へ共内々にて御百姓之つまり申儀御公儀へ御訴訟申上候へハ兵右衛門殿にくみを申請其上御會所へたびノ詰申候へハ定て物すき者と思召可被遊候間とかくは我等共おいてニも又ハ御せいはいニ被仰付候而も右之連判中間之百姓共遊佐二萬三百石之内之百姓なみに高下なく仕候様ニ被仰付被下候ハ我等共何ニ罷成候而も少もくるしからず御座候乍去毎度より我等共申上候事偽りも申上候かと思召被遊候御市様も御座可有候間兵右衛門殿我か□□ニ斗被成御百姓つめ被成候しやうこ數々御座候間兩口御聞被遊候事如何と思召被遊候ハ此しやうこ斗も御覽被遊被下度奉存候閑様ニ申上候ハ我等連判中間之百姓共ところニすみ可申様無御座候間乍恐書付を以申上候爲後日仍如件

遊佐ノ内(楸嶋村)

作右衛門印

善助印

御奉行所

表書之通致返答書來廿五日ニ會所へ罷出可遂對決者也

四月十七日

源左印

兵左印

高橋兵右衛門殿

御目安返答書指上ケ申候事

一 御公儀御存知無御座候處ニ内々ニて拙者御百姓つめ申と寅の五月肝煎百姓御訴
 訟申上候其時分之被仰付迄拙者違背申候と申上候儀偽ニ御座候其上卯ノ四月御
 目安上ケ申候御裏判被下候ニ付て則御會所迄罷出連判之肝煎百姓三十七八人其
 内三十二三人印形も不仕上ケ申候間一人も不殘御前へ被召出さいきやう被仰付
 可被下と申上候へハ重て連判之者共不殘引合可申候間先々罷歸候へと御意御座
 候間罷歸候今度彼者共又々御目安を以申上候うへハ右之連判之者共皆々被召出
 面々對決被仰付可被下候事

一 御公儀より被仰付候諸役并人足本たてに仕付添付仕被仰付候度々ニ拙者とりこ
 み仕候と申上候儀一向覺無御座候事

一 村々へ拙者之米迄かし御年貢前ニ取申候と申上候毎度如申上候拙者せかれの米
 なども此あとしハ少ツ、借し申候へ共ふさく仕候へハすまし不申候何とて御
 年貢前ニ取可申哉いつわりニ御座候事

一 御國境の松杉さり自用仕候と申上儀いつわりニ御座候其上目鹿村之肝煎拙者次
 第罷成候由申上候是も則肝煎被召出御尋可被下候事

一 御公儀之物迄ぬすみある方様へつくり手形被下候様ニと狀迄越申候と申上候義

一向覺無御座候其上御家中へ拙者之御音信書仕御えこ申請候と申上候御せんさ
 く被成可申候扱又跡々高橋太郎左衛門跡式申請拙者ニ渡し申儀ハ貳拾年以後ニ
 御座候其内□□まね申罷有候處ニ三年前とらの年春中より彼者共申分くわた
 て候付て遊佐之百姓□□之様申上候遊佐郷中七十ヶ村余御座候男女共五千五六
 百人も可有御座候其内四十之内外之者ニ斗何とて別て拙者之作道ニ諸役可申付
 候哉連判仕候百姓居付之内にても相殘肝煎百姓被召出御尋可被下候次右衛門つ
 くろい仕候連判之者共一人も不殘被召出對決被仰付候爲其返答書如此ニ御座候
 以上

辰ノ卯月廿一日

遊 佐

高橋兵右衛門印

御奉行所

覺

一 丑八月千石夫四人江戸へ登候時一人ニ金貳步宛路錢渡候余り錢江地之二郎右衛
 門鶴岡登雜用ニ渡し候事悪ク候事

一 五俵壹斗六升ハ組頭三人北目組主計八日町與右衛門かの澤組勘三郎寅ノ年江戸
 御普請千石夫之訴訟ニ鶴岡へ參候時分遣候由酒田ニ二日滯留高旅籠被下鶴岡ニ
 て日數八日高旅籠被下天下之御役御詫言仕なご申遊覽仕儀曲事ニ候

一卯ノ年御檢見之拂米貳十六俵三斗九升六合小黑兵右衛門横山五左衛門加藤市右衛門ニ酒田宿賃并鶴岡酒田上下之舟賃ニ渡し候ハ曲事ニ候但毎年其作法ニ候ハ
 一民家勘右衛門ニも可相渡候事ニ候
 一兵右衛門吹浦之家作ニ松杉遣候事申分各承届候然共兵右衛門大肝煎ニ被仰付□
 少不延兼ニハ可有之候事
 一酒田新田青源寺だし御普請人足出候事組嶋ヘハ高百石ニ三步四厘五毛割懸其外
 遊佐中壹萬七千八百石余ヘハ高百石ニ三步壹厘貳毛割掛組嶋村ヘ依怙仕迷惑與
 申候事

外

一水上村清藏しうと小しうとむこ三人繩かけ申候事尤科可有事ニ候ヘ共役所ヘも
 不相届私ニしほり私ニゆるし候事
 一下野澤村與八郎八重年貢申懸久々しほり候間兵右衛門并北目之主計そこつに候
 間菅原五郎右衛門ニ詫言仕相濟候ヘと申付候處ニ其沙汰無之候事
 辰ノ五月四日
 右七ヶ條常世勘右衛門今野佐次兵衛之兩人にて高橋兵右衛門ニ申渡し申分無之ニ
 付ヘいもん申付候此外十壹ヶ條之科之書付別紙有之云々
 慶安五年辰五月四日

乍恐高橋兵右衛門しん類之者共御訴訟狀申上候事

高橋兵右衛門御公義御無沙汰仕と御意被遊候てへいもんニ被仰付候儀御尤ニ奉存
 候去年中より長々のへいもんにて罷在候ヘハしんるいのもの共迷惑仕候故御書付
 を以御訴訟申上候長々の義ニ御座候間へいもん御免被遊候てしん類之者共ニ御預
 ケニも被成被下候者過分至極ニ奉存候乍慮外此通御訴訟之通り可被下候以上
 巳ノ七月十七日
 親類連判

御奉行所

○酒井家御上藏記録寫ニハ兵右衛門ニ係ル諸方ノ訴狀ヲ收メラレタルモ繁キニ依リ之ヲ略ス

参照 (酒田町野附家御用留)

御城米船通水門建直ニ付歎願書

遊佐郷御年貢米船通酒田水門與唱候ハ其始二百卅年以前正保二年酉西濱通村々
 鹽焚竈有之候爲メ濱山諸木伐盡シ不毛之地ニ罷成年中四季共ニ風吹度ニ飛砂強
 く吹立遊佐船通砂埋ニ相成不容易難澁ニ付其節之大庄屋高橋兵右衛門與申仁御
 沙汰申上候次第ハ今度吹浦ヘ船着湊願申立遊佐中之御年貢米不殘同處ヘ差下申
 度由申立候處早速御聞届ニ罷成願之通被仰付候處酒田町大庄屋より右兵右衛門
 へ被及示談候由ハ實ハ遊佐中之御年貢今度吹浦新湊ヘ被差下候而ハ御町方船乘

者不及申船宿丁持ニ至迄多分之家株ニ拘リ候程之義ニ付何卒新湊願之義願下吳候様就而水除等之入用者如何程ニも町方より可差出ニ付是迄之通下ケ來候小湊江差出吳様強て被頼入其情實難默止夫々示談之上洪水除土手穴水ハ諸入費人足共酒田持已後引請之約定を以新湊願下ケ被仰付候(下略)

明治六年月日

兵右衛門ニ一子アリ長ヲ權三郎ト云ヒ次ヲ長四郎ト云フ歿後伯父太郎左衛門跡式ヲ權三郎ニ預ケ且訓誡スル所アリ

(高橋文書)

兵右衛門跡式其方ニ預置候間當年より覺悟可給事

- 一 田島ニ念を入可被申候事
- 一 火之用心無油斷可被仕候事
- 一 男女下人共ニ油斷不仕それノ可申付候但人々ニハ色々ハ色々有物ニ候間頼やうに仕候ヘハ能奉公仕しかり候ヘハ能奉公仕候ものも有物ニ候間能々見合可被遣候
- 一 よるノあるきはなし申ましく候事
- 一 あさね仕ましく候事

- 一 碁すごろくうち申ましく候事
 - 一 遊山かましき事ニあるき申ましく候事
 - 一 つりうを川かりを仕ましく候事
 - 一 其方家へわかきもの共又ハざとふなど入間敷候事
 - 一 其方宿ニてハかミこもめんきる物より外着し申間敷き事
 - 一 當年ハ其方一代之身上善惡之處ニ候間分別可被成候此一ツ書を用ゐ候ハ一代可然候
- 右之通一日ニ壹度宛此壹ツ書見可被申候若し少も相背き申候ハ我等分別次第ニ仕候間少も恨有間敷候何事ニおゐても此方江可被承候 以上

太郎左衛門

吉成



五月十七日

高橋權三郎

どのへ

○丁酉ハ即チ明曆三年ニシテ兵右衛門歿後直チニ之レナ與ヘタルモノナリ教誨周密威嚴ノ中自ラ慈愛ヲ存セリ古人云フ兄弟ノ子ハ猶子ノ如シト太郎左衛門能ク之レナ躬行ス實ニ其人トナリテ知ルベシ太郎左衛門ノ子萬右衛門萬治寛文ノ際御郡奉行ニ命セラレ頗ル令聞アリ萬右衛門ノ後ニ濟助アリ亦才器ヲ以テ稱セラレ

承應元年兵右衛門解職ノ後遊佐郷ニ大肝煎ヲ欠キ郷内ノ大組頭三人宛月番ニ大肝煎代トシテ之レヲ攝行セシガ郷内ノ百姓等深ク名家ノ斷絶ヲ惜ミ權三郎ヲ大肝煎トナシ之レヲ再興センコトヲ訴願セシモ省セラレズ寛文四年三月大組頭等連署シテ輪番勤務ヲ辭シ更ニ大肝煎ヲ置カレンコトヲ請願ス同五年江地村ノ石山治郎右衛門石辻村ノ阿部彌七郎共ニ大組頭ヲ擢ンデテ大肝煎トナス是レ遊佐郷ニ二人ノ大肝煎ヲ置カレシ始メナリ

(遊佐郷村々御舊記調書上帳)遊佐大肝煎高橋兵右衛門御改易後承應元年より同郷大組頭三人宛月持大肝煎代被仰付相勤罷在候處寛文四辰年御免願申上翌巳年御免被仰付大組頭之内兩人兵右衛門跡初メテ大肝煎御役被仰付候其節左之通奉願候

乍恐以書付御訴訟申上候事

遊佐郷大肝煎代九人之組頭共ニ被仰付候ニ付壹月三人宛ニテ月行持ニ辰年より當年迄仕御公義之御用等相調迷惑仕候五三年前より郡御奉行所御代官所江何とも御計ニテ御免被下候様ニと度々何れも申上候へ共未相叶不申迷惑ニ奉存候此上ハ御公義御目兼次第誰成共大肝煎御定可被下候ケ様ニ申上候義恐入候得共大肝煎役仕方々江走廻少々宛も遣もいたし申候へハ身代も不罷成候故其上以來御公用

如在成義出來仕候歟與奉存候何共迷惑仕候間大肝煎役御免被下候ハ、難有奉存候爲其組頭共以連判御訴訟申上候 以上

辰 三月

大組頭九人連判

御奉行所

改年之御慶同意ニ存候然者江地村治郎右衛門石辻村彌七郎兩人之者大肝煎被仰付候左様御心得萬事 御公用兩人之者可被申渡候間下知次第肝煎小百姓江も急度可被申付候御合力米貳拾俵ニ手代壹人被下納方共ニ仕候へと被仰付候可得其意候恐々謹言

正月三日

金野佐次兵衛

氏時

西

禰津孫四郎

正長

五

大淵與三兵衛

吉買

五

山中權之助

五山

如

大組頭九人宛名

寶永八年三月長四郎更ニ宮野内大井青塚ノ三組ヲ以テ宮野内組ヲ立テ大肝煎ヲ置キ遊佐郷ヲ三組即チ江地石辻宮野内ニ分割シ以テ家名ヲ再興セント欲シ先祖書ヲ添附シ之レヲ内願セラレシモ事成ラスシテ止ミヌ

(高橋文書) 乍恐先祖之書付を以奉願候事

一松平伊豆守様同右衛門大夫様拙者親兵右衛門被仰出候御奉書干今拙者所持仕罷在候事

一拙者親高橋兵右衛門不調法之者其比遊佐郷中御成箇三萬俵余納申候其節馬荷ニテ酒田江出し申候得者米壹俵ニ付三升宛掛申候都合貳千六百俵程入申候吹浦江出申候得者千五百俵程之御百姓徳分ニ御座候其上舟賃なしに五年も拾年も舟乘申候人馬之手間徳ニ罷成候ニ付遊佐中惣百姓奉願候ニ付親兵右衛門御訴訟申上候所ニ一分之分別を以吹浦ニ新湊を立申候との無調法を以閉門被仰付出入五年目ニ御赦免被成下候處ニ無間茂病死仕候兵右衛門世忤權三郎與申者拙者兄年拾八歳ニ罷成候遊佐中惣御百姓連判を以御訴訟申上候へ其相叶不申候て大組頭之内石辻村彌七郎江地村治郎右衛門右兩人ニ四十年前ニ大肝煎被仰付候無是非五十年余親兵右衛門御役儀跡潰罷在候御慈悲を以今度宮内組大井組青塚組合三組之分高ハ六千三百六十九石余御座候拙者仕配ニ被成下候様奉願候被仰付被下

候ハ、難有奉存候外ニ石辻組鹿野澤組小松組吉出組江地組楸嶋組北目組吹浦組八日町組合九組高ハ壹萬四千三百七十七石余之所ニ阿部五兵衛石山平内仕配之分罷出候右之通大肝煎三組ニ遊佐郷御立被成下候得者諸事御百姓之勝手ニも能御座候旨内々ニテ奉願候以御慈悲何とぞ奉願候様ニ被仰付被下候ハ、難有可奉存候 以上

寶永八年卯三月

高橋長四郎印

御役所

覺

一越後景勝様庄内御持分之時御内衆天粕備後殿御取次ニテ拙者曾祖父高橋太郎左衛門年廿八ニテ被召出遊佐大肝煎被仰付御知行百石被下候て御奉公申上候處景勝様御代四年目ニテ終申事最上出羽守様莊内御持分ニ罷成候て志村伊豆守殿御取次ニテ曾祖太郎左衛門年三十一ニテ被召出如毎々最上様御代貳拾年御奉公申上候事

九十年以前元和八年戌之年宮内大夫様御入部被遊候節曾祖父太郎左衛門年五十二ニテ被召出高力但馬守殿石原平右衛門殿御取次ニテ如毎々御知行百石被下置遊

佐大肝煎被仰付候曾祖父高橋太郎左衛門卯之年○即寛永四年五十五ニ病死仕候事

一祖父高橋太郎左衛門年二十三ニて如毎々御知行百石御役儀共ニ同年被仰付候得

て酉ノ年○寛永十年迄七年御奉公申上候處其節柴谷武右衛門殿御郡代之時分遊佐郷中

より色々書付指上申ニ付祖父高橋太郎左衛門弟同兵右衛門七十九年以前戌之年

○寛永十一年江戸罷登申分申上候得者松平伊豆守様同名右衛門大夫様宮内様御相談ニ

祖父太郎左衛門御知行二百石八十四年以前寅之年○寛永十五年被下置御家中並ニ被仰付

候本知百石遊佐大肝煎役共ニ弟同名兵右衛門ニ右同年被下置候事又高橋太郎左

一高橋兵右衛門四十一年以前丑之年○寛永十四年より辰之年迄○承應十五年御奉公申上候處

兵右衛門無調法仕候故同辰之年より閉門被仰付候得て五年目申之年○明暦二年御赦免

被下候處貳拾貳年以前酉之年○同五年五十才ニて病死仕候事

延寶六年午ノ八月十七日 同 長四郎印

高橋萬右衛門様

一三十四年以前之午之年○即延寶六年御尋ニ付同名高橋萬右衛門江書付指上ケ置申候事

寶永八年卯四月 遊佐

高橋長四郎印

承應元年ヨリコ、ニ至ルマテ六十年間長四郎兄弟百方苦心家名再興ヲ計畫セシ

モ不幸其志望ヲ達スル能ハズ遊佐ノ名家モ恢復ノ時機ヲ失ヒ空シク農民トナレ

リ當處高橋文助ナルモノハ實ニ其苗裔ナリ

今 泉 明暦二年ノ現高貳百八拾貳石八斗六合同年檢毛帳後チ二百八十九石九斗壹升

八勺免五ツ壹厘免五ツタリ酒井家御土藏記録寫ニ水上村へ越高ニ係ル文書アリ錄シテ參考ニ

供ス

乍恐書付を以御わび申上候事

一高貳百八拾五石五斗八升八合 今泉村之高ニ御座候毎年は拾貳間御座候て御公

儀之諸ぐん役仕候處ニ此ほと右之家數之内五間賣つぶれ殘て七間にて御公儀之

諸役仕候百姓迷惑仕候間右之二百八十石之内賣つぶれ申候百姓之高兵右衛門殿

四十七石毎年より御作被成候か何之諸役も不被成候へハ今泉村百姓之つまりニ

罷成候間百姓貳間たて殘百姓之くつろきニ仕度奉存候間兵右衛門殿へ内々にて

御訖申上候へとも御合點無御座候其上右之四十七石之地之義ハ兵右衛門殿御

手前にて御作不被成宮之内村貳右衛門と申ものつくり申候間田地かへし可申由

いろノ申候へ共合點不仕候間乍恐御意を以此御田地今泉村へかへし申候様に

被仰付被下度奉存候かやうニ申上候も今泉村之儀ハ遊佐中無御座候たいてん之郷ニ御座候へハ百姓數無御座候處ニ四十七石之萬事諸役かつき申候ニ付惣百姓之つまりニ罷成候間御わび申上候事

(明曆元年)

未ノ正月十九日

遊佐之内今泉村

肝煎長三郎印

長人百姓惣右衛門印

惣百姓連判

御奉行所

乍恐返答書指上ケ申候事

今泉村より今度兵右衛門手前御田地之儀ニ付御目安指上申候右之御田地外之村彦右衛門同村彌右衛門ミヤ内村伴右衛門同村清藏拙者共ニ五人にて一作つくりニ巳午兩年作り諸役相つとめ申候此御田地御返し候へと内々にて拙者方へ斷仕候由御目安ニ申上候兵右衛門田主ニ御座候へハ拙者方へ斷仕候と申上候義偽ニ御座候此田地之元來拙者存候事ニ無御座候間如此物かたり仕候間申上候事
今泉村高三百六十八石六斗九升六合御座候此跡戌ノ春中寛永十一年御きつしよあかり申時

分百姓四間御座候て御田地之義も人足作ニ年々仕候處ニ丑ノ年寛永十四年柴谷武右衛門様より御代官清水吉右衛門殿拙者被爲召寄遊佐中人足作ニ候を當年より不仕候間水のみとも改方々御田地あまり申候へ入爲作可申段被仰付候ニ付今泉村へも水吞三間入申候それとも御田地高百三拾石余作人無御座候間此通御代官衆を以武右衛門様へ申上候へバなうびの郷へ渡し候へと御さたニ御座候間其時分人数田地ニ御とり見被申候處ニ水上村外ノ村兩郷人数田地ニ過申候ニ付清水吉右衛門殿より水上村へ高八拾五石八斗九升外ノ村へ高四十七石六斗四升御渡し被成候外之村之御百姓今泉村之田地之義ハ作あらし田ニ御座候ニ付同者拙者之田之内被下度と申ニ付我等前代もち置申帳面之内五十石余相渡し只今迄爲作指置申候其上水上村へ末代ニ相渡り申候高八十五石八斗九升之内貳拾三石六斗之分仕付兼申ニ付是をも拙者しはい仕則兩郷之高六十八石貳斗四升拙者手前にて其年寛永十一年より當年迄十九年持置高ニかゝり申御ぐんやく相つとめ申候處ニ御ぐんやくも不仕候と申上候其上内々にて田地返し候へと斷仕候段偽りにて御座候右申上候通品々御座候間貳拾年このかた持置諸くんやくをも相つとめ申候御田地之趣ニ御座候へハ内々にて拙者方へ田地返し候へと今泉村之御百姓衆御斷申候事ニ無御座候と兵右衛門申候

右之通兵右衛門物かたり仕候間返答書仕指上申候 以上

未ノ二月七日

御奉行所

みや内村貳右衛門印

奥休^{オコシ} 明曆二年ノ現高百七十石八升五合^{同年檢} 後チ百七十三石壹斗貳升八勺^{毛帳}

免六ツ
貳厘
タリ

○奥休一ニ御奥休ニ作リ之レニ係ル傳説アレトモ今之レヲ取ラス或説ニ田畝ヲ開發スルヲ「奥」ト云ヒ其租税ヲ免除スルヲ「休」ト云ヘリ即チ歛下三年乃至七年免租シ民力ヲ休養スルノ義ナリ由來村名ハ高尚ノ意味ヲ取ラス偶然ノ事跡ヨリ命名スルモノ多カレハ田地ノ奥休ヨリ起レル名稱ナランモ知ルヘカラスト云ヘリ

中島、北中島 明曆二年ノ現高中島村ハ高五百六拾六石貳斗七升六合貳勺、北中

島村ハ六百三十九石三斗六勺ナリ^{同年檢} 當處ハ久保田、金山、中城宮下、樋口、

福島、田中、前門、奥野ノ民居ヲ汎稱シ別ニ中島、北中島ト稱スル區域ナシ貞

享村組付ニ中島村高壹千貳百六石七斗九升八合貳勺家數卅三軒内廿一軒御役下

奥休ヨリ長ノ方今泉^{奥休ヨリ南、川ヨリ北} 北中島村高五百六拾壹石八斗五升九合三勺家數卅一軒内廿二軒

御役下^{中島ヨリ三町程北ニ有} 見エ後チ中島高六百二十五石五斗四升三合^{免五ツ九分七厘} 同新田廿五

石三斗八升貳合四勺^{免四ツ四分} 北中島高五百四十七石九斗五勺^{免五ツ九分七厘} 同新田三十四

石六斗壹升七合七勺^{免四ツ四分} タリ

白山姫神社 字中島ノ單田ニアリ菊理姫伊弉册ノ二神ヲ祭ル創祀經歷詳カナラス

明治九年二月廿四日郷社ニ列セラル

稻田村 庄泉^{大井、大} 岩川^{岩川同} 増穂^{南北福升鶴沼、} 菅ス^{仙北新田}

大井 後藤寺ノ小名アリ大井一ニ大飯^{菅原政廣記} 二作ル遠田肥前覺書ニ據ルニ武藤

時代ニ於テハ砂越城主武藤萬歳丸ノ所領タリシト之レニ係ル事跡詳カナラス

明曆二年ノ現高大井村五百拾壹石九升二合、大井新田廿六石二斗壹升三合、大

井村之内後藤寺五十五石^{同年檢} 所謂大井新田ハ寛永十一年下野澤村菅原次右工

門楸島村石川作右工門藩命ヲ以テ仙北ヘノ流民ヲ招致シ開發セシムル所ナリ事

彼村ノ下ニ詳カナリ後チ本高五百拾四石七斗七合六勺^{免六ツ四分} 同村新田六十壹石

六斗貳升貳合七勺^{免四ツ三分四厘} 後藤寺^{高異同ナシ免六ツ三分七厘} トナル當處ハ遊佐郷大井組ノ組元ニ

シテ古來大組頭眞島氏コ、ニ住シタリキ

大小服部 遠田肥前覺書ニ據ルニ亦砂越氏ノ所領タリ出羽風土略記ニ「眞島楯ハ服部邑ニありて眞島ハ館主の苗字なり」ト蓋大組頭眞島氏ト關係ヲ有スルナラシモノ今得テ考フヘカラス

明曆二年ノ現高大服部村ハ四百四拾九石貳斗貳升七合ニシテ小服部村ハ百拾六石壹斗八升八合ナリ同年檢 毛帳後チ大服部四百五拾八石壹斗八升七合六勺免六ツ三 分七厘同新

田六石壹斗九合三勺免三ツ 分六厘小服部百拾八石三斗八合三勺免五ツ貳 分五厘トナル

岩川 木ノ下、中村、荻生田ノ小字アリ明曆二年ノ現高六百四拾八石貳斗六升

四合四勺同年檢 毛帳後チ岩川六百五拾七石九斗七升三合三勺免六ツ四 分七厘中村新田六拾七石

五斗九升七合四勺免四ツタリ 四厘

岩川新田 明曆二年ノ現高九拾壹石貳升七合同年檢 毛帳後チ九拾七石壹斗九合免五ツ五 分四厘タ

リ

福升 南北アリ明曆二年ノ現高南福升ハ貳百廿八石貳斗壹升八合ニシテ北福升ハ四百五石五斗八升八合ナリ同年檢 毛帳後チ南二百卅八石九斗貳升三合貳勺免五ツ七 分七厘北四

百六石壹斗七升七合四勺免五ツ六 分七厘タリ

福升新田 承應三年仙乏ヘノ流民ヲ召還シ開發セシムル所ナリ

(酒井家御土藏記録寫)

明曆元年未三月四日御當地より毎年仙乏ヘ走申人數十七人去年中引登セ申新田立可申旨被仰付候間種夫食并家材木等御林より申請度願之書付福升新田之百姓上楸島之百姓共願書指出

乍恐ら虫食を御訴訟申上候事

一御當地より毎年仙北ヘ走り申御百姓去年中三間人數拾七人爲登引申新田たて可申と存午ノ四月虫食之御會所ニ御披露申上候ヘハ種夫喰貳拾俵御かし被下則右之御借米糶米にて御藏ヘ納申間當年も御借米□□被下度奉存候事
一毎年御當地より仙北ヘ走り申候御百姓壹間男女共ニ人數五人午之霜月爲指引申候此御百姓ニ御かし米御借被下度奉存候事
右之條々少も僞無御座候爲後日之仍如件

未ノ三月三日

福升新田百姓

長五郎印 甚十郎印

右馬之丞印 三吉印

御奉行所

南福升村
久右衛門印
上くみ島村
作右衛門印

仙北より春中歸候御百姓衆新田へ出申候家材木之事

一木拾八丁ハ 虫食三間三尺之木但家三間分拾五間材木

一同廿四本ハ さす壹本持

一同三拾本ハ けたむなき二本持

木數合六拾七本三間分

右之材木升川村御林にて申請候様ニ御うら判可被下候爲後日一札如此候 以上

午ノ七月三日

上くみ島村 作右衛門印

南福升村 久右衛門印

新田 長五郎印

明曆二年ノ現高福升新田高貳石四斗八升七合ト見ユ
同年檢 毛帳 後チ二石五斗六升七

合免三ツ
九分タリ

鵜沼 明曆二年ノ現高八拾貳石七斗六升貳合
同年檢 毛帳 後チ百卅七石五斗六升七合

七勺免四ツ
九分タリ

仙北新田 寛永十九年上楸島ノ石川作右衛門ナルモノ藩命ヲ受ケ仙北ニ流亡セル

百姓ヲ拉ハ歸リ大井鵜沼兩村ノ谷地ヲ開墾シ新田ヲ創立ス故ニ名ク
事上楸島ノ下ニ詳カナリ

貞享ノ初メ高五拾六石六斗七勺
同村組付爾後異同ナシ

川行村 宮田
上下楸嶋宮田大宮田
向宮田下宮田萬部 江地
上下江地ヲ管ス

楸嶋 上下アリ一ニ菜黄嶋
來迎寺 寛永十
年代記 貢味嶋 正保庄
内圖 二作ル孰レカ是ナルヲ

知ラズ來迎寺年代記ニ「天文六年桃井殿菜黄嶋ニ始住同十年十月桃井殿生害」ト

見ユルモ之レニ係ル事跡詳カナラス

明曆二年ノ現高上楸嶋村ハ三百貳拾四石貳斗三升八合三勺ニシテ下楸嶋ハ貳百

九十五石五斗三合及ヒ下楸嶋組頭奥田壹石八斗壹升四合七勺ナリ
同年檢 毛帳 後チ上

ハ三百貳拾石六斗貳升貳合四勺
免四ツ九分貳厘 下ハ貳百九拾石四斗壹升壹合壹勺
免五ツ貳分貳厘

同組頭新田四石九斗三升八合免貳ツ七分トナレリ

石川氏 作右衛門ハ上楸嶋村ノ人ニシテ楸嶋組大組頭タリ寛永九年遊佐荒瀨ノ百姓由利仙乏ニ亡命スルヤ郡代家老柴谷加藤等以テ大肝煎ノ舉措宜シキヲ失フモノトナシ遊佐ノ高橋太郎左衛門荒瀨ノ池田刑部左衛門ヲ解職シ下野澤ノ菅原次右衛門及ヒ作右衛門ヲ由利仙乏ニ遣ハシ彼領主ニ交渉シ流民ヲ拉ヘ歸ラシム同十年三月其功ヲ以テ共ニ遊佐荒瀨ノ大肝煎ニ命セラレ祿五拾石ヲ賜ハル但菅原ハ二月ニ係成覺院御分限帳ニ「高五十石遊佐作右衛門」ト即チ是ナリ

(遊佐郷村々御舊記調書上帳)

其方才覺之物ニ付遊佐之郷荒瀨之郷大肝煎之内ニ被仰付候依之高五十石之所被下置候條郷中百姓御田地荒不申様ニ村々節々廻萬事御役儀油斷不仕候様ニ情を入可申付者也

寛永十年酉三月八日

武右印

甚十印

平右印

喜兵印

遊佐之郷貢味嶋村

作右衛門とのへ

同年六月歳大ニ旱シ酒田城附近ノ田地挿秧スル能ハス作右衛門菅原ト共ニ郷内ノ百姓ヲ率キ之レニ助力シ事下野澤ノ下ニ詳カナリ同十一年菅原ト相議リ流民ヲ招致シ上下野澤新田北目新田大井新田平津新田天神新田臭津クサツ新田ヲ開發シ新田七ヶ所ヲ創立ス下ニ掲クル文書及ヒ下野澤ノ下參照スヘシ同年十月高橋池田復職スルニ當リ作右衛門菅原ハ川北横目穀止奉行ニ補セラレ此際高橋ト爭論ヲ起シ松平右衛門大夫ノ臣増井所左衛門ニ答辯セラレシト菅原文書ニ見ユ原文外野ノ下ニ掲載ス同十九年遊佐ノ百姓又仙乏ニ亡命ス時ノ大肝煎ハ高橋長四郎太郎左衛門ノ弟、後チ兵右衛門ト改ムナルニモ拘ハラス有司作右衛門ノ才幹アリテ且其經略ニ富メルヲ以テ仙北ニ遣ハシ之レヲ拉歸シ大井鷓沼谷地ヲ開墾セシメ一村ヲ創立ス所謂仙北新田是ナリ藩主其功勞ヲ嘉ミシ廩米五苞ヲ賜フ要スルニ作右衛門ハ柴谷等ノ信任ヲ得菅原ト共ニ拔擢セラレ高橋ト反對ノ位置ニ立チ伎倆ヲ揮ヒ地方ニ功績アリシモ寛永以前ノ事歴詳カナラス子孫衆民トナリ今尙存セリ左ニ掲クルハ享保十三年作右衛門ノ後孫重左衛門ガ其功勞ヲ藩主ニ廩申セシ文書ニシテ本行ノ事歴ヲ確ムヘキモノナリ但作右衛門ハ菅原ト同功一体ノ人物ニシテ經歴聯絡スレハ宜ク下野澤ノ

下ヲ參照
スヘシ

(同上) 楸嶋村大組頭作右衛門と申もの寛永十年酉年大肝煎被仰付其節被仰渡書
于今所持仕其外御注進書 ○注進トハ忠進ノ假字ニシ
テ邦家ニ忠勤ヲ盡スナク云フ 與申古書所持仕居候右家ハ其後及斷
絶當時御百姓ニ御座候書付類左之通

先祖より御注進仕候事

一 寛永九年申之年遊佐荒瀬より御百姓數多由利仙北江欠落仕候夫ニ付遊佐大肝煎
高橋太郎左衛門殿荒瀬大肝煎池田刑部左衛門殿兩人之衆大肝煎被召上候其上太
郎左衛門殿籠捨ニ被仰付候事

一 寛永十年酉年上様 ○幕府
ナク云フ 御横目衆國々御廻リ被遊候夫ニ付御郡中ニて欠落百姓御
座候而者御爲惡敷候間作右衛門義者由利仙北様子存知候與承候早々罷下右之欠
落百姓共引歸可申由武右衛門様甚十郎様御意ニ而御代官堀兵助殿被仰付候間下
野澤村菅原治右衛門殿より相談仕仙北へ罷下拙者近付ニ佐竹様御扶持人佐々木
喜右衛門殿矢嶋御領分小松將監殿兩人之衆頼入遊佐あらせ之欠落百姓不及申川
南之内添川組狩川組余目組欠落百姓迄不殘引歸申候得者治右衛門作右衛門ニ五
拾石宛御物成被下置遊佐あらせ之大肝煎被仰付候則仙北佐々木喜右衛門殿小松
將監殿兩人ニ殿様より爲御音信木綿五拾反被遣候則御使者作右衛門江被仰付候

間仙北江罷下互ニ申合候其後喜右衛門殿爲御禮鶴ヶ岡罷登甚十郎様武右衛門様
迄御目見致し候御上下金子貳兩拜領いたし罷下候右之品々偽り無御座候五拾石
御書付萬事證文所持仕候事

一 御江戸御横目衆 ○寛永
十年 六月朔日ニ御通被遊候其節あらせ上寺田村彌助與申者遊
佐あらせ御百姓共誘ひ御仕置之儀安目上可申與内々相談相究候處菅原治右衛門
殿作右衛門才覺を以無事にいたし御横目衆首尾能御通被遊候事

一 治右衛門作右衛門才覺ニ而遊佐之内新田六ヶ村上様御横目衆御通被遊候每方立
置只今本村同前ニ罷成候事

一 其後御當地より身代相續不相成百姓仙北江欠落仕候もの拙者 ○菅原ト共
ニセシナリ 才覺ニ而貳
拾人 ○寛永
十九年 引歸大井村鷯沼村地形之谷地ニ仙北新田與申新田一ヶ村立置申候
其砌拙者江爲御褒美御米五俵并拙者仙北江遣申候久右衛門與申者迄御米被下置
候歸リ百姓ニ御米貳拾八俵無利御貸被下置候大内野目村大井村鷯沼村谷地五十
石余新田ひらき御注進候事

一 未之年 ○寛永
二十年 遊佐中ニ御物成大分ニ明き申候而不埒ニ御座候故御代官所御才促
を以手代衆郷中ニ御越年三月迄郷中ニ被成御座候得共御物成之義ハ不及申御田
地仕付可申様無御座候御代官五右衛門殿久右衛門殿作右衛門殿御頼被遊候而水
吞百姓三十六軒當人才覺ニ而仕付其外ニも作人仕付申候御代官所より御頼之御

狀所持仕候事

一未之年上江地村大服部村兩村ニ而御吟味之上ニ而御公義江御取上御米御座候御代官所與作右衛門御賴被成候而當人才覺ニ而貳拾五俵取上候事

一此以前荒瀬之内吉田村大炊介與申者下女欠落仕大宮田村與申所ニ隱罷在候様之外六ヶ敷罷成候處五左衛門殿久右衛門殿御賴ニ付當人取計内々ニ而無事いたし申候事

一廿年〇二十五已前寶永申年矢嶋御百姓與鳥海山出入之時分親重右衛門義正月より江戸江罷登首尾能相勤六月罷下申候夫より矢嶋迄罷下諸事御用等首尾能相勤申候事

一十九年以前享保五子年才覺米百俵被仰付候手前より出し可申様無御座候而高利之金子才覺仕差上申候段々困究仕候事

右之通先祖より御注進書を以寫取申候少も偽無御座候若御尋御座候ハ、御書御狀共奉入御覽度奉存候 以上

申二月

上楸島村
重左衛門

宮田 古老云往時吹浦大物忌神社ノ神領當地方ニアリ故ニ村名トナセリト記錄

ノ徴スヘキナシ明曆二年檢毛帳ニ大宮田喜三郎分高四百四石九斗五升七合四勺

大宮田彌三分高四百拾石九斗三升貳合トアリテ別ニ宮田村所見ナシ理由詳カナ

ラズ且喜三郎彌三ナルモノハ草分ノ人名ト聞ユルモ亦事歴分明ナラズ後考ヲ俟

ツ貞享ノ初メ四百拾貳石五斗五升壹合五勺タリシヲ後チ四百十七石三斗三升三

合五勺免五ツ五分五厘トナル

向宮田 明曆二年ノ現高百貳拾壹石壹斗五升五合同年檢毛帳後チ百拾三石九斗五升七合

五勺免四ツ三分貳厘タリ

大宮田 貞享ノ初メ高四百拾六石六斗八升六合九勺同村組付後チ四百十七石七合七勺

免五ツ五分七厘タリ

下宮田 明曆二年ノ現高百四十五石五斗四升八合同年檢毛帳後チ百四拾壹石貳斗八升七

勺免六ツ壹分七厘タリ

萬部新田 明曆二年檢毛帳ニ萬邊村ニ作り高五十五石四斗四升五合ト見ユ貞享村

組付ニ萬邊新田高五十六石四斗九升九合七勺家數四軒トアリ後チ五十八石七斗

九升七合七勺免五ツナリ三分七

五步市 明曆二年檢毛帳ニ五分一二作り高百廿石七斗六升トアリ後チ百十九石九

斗貳升三合五勺免四ツ壽分七厘タリ

宮田楯 古楯、内堀、外堀、堀之内、大木戸及ヒ内楯外楯ノ字アリ月光川但今古川敷トナレリ

ヲ以テ東西ノ要害トシ西方ヲ大手口トナセリ

(出羽風土略記) 宮田村ニ有内館外館とて館地ニケ所あり肝煎石垣某といふもの今内館に住す堀形等今ニ有土門掃部といふ百姓ニ館主の系圖有りしに今ハ紛失したりとぞ

楯主ノ氏名詳カナラサルモ初メ土門氏ニシテ最上時代ニ板垣氏コレニ據レルモ

ノ、如シ板垣一二石垣ニ作ル舊説ニ遊佐ノ石垣氏本ト板垣ト稱セシヲ板垣ハ朽腐シ易ク文字不詳ニ屬スルヲ以テ石垣ト改メ家門ノ長久ヲ祝セシト云フサレハ板垣石垣同姓ニシテ當時通用セシナルヘシ板垣河内守ハ莊内地侍ニシテ武藤義氏ノ幕下ニ屬シ天正九年莊

内最上矛盾ノ際義氏ノ爲メニ眞室延ニ出陣シ同十一年武藤義興ノ爲メニ仙北

草井ニ於テ戰功アリ同十四十五年ニ亘リ義興其臣前森東禪寺ト隙ヲ構ヘ庄内動

亂ノ際最上義光氏家尾張ヲシテ前森ヲ援ハシム此役河内之レニ屬シ當處新田目

ニ轉戰シ亦功アリ爾後ノ消息詳カナラズ慶長六年志田川村東禪寺城ニ嬰守スル

ヤ志村鮭延ノ部下ニ屬シ北口嚮導トシテ庄内ニ入り酒田濱手ヨリ進ミ頗ル高名

アリ庄内悉ク最上ノ所領トナルニ及ヒ當處ニ住シ祿千石ヲ食メリ最上家諸士分

限帳ニ一千石垣河内守ト即チ是ナリ

元和八年主家改易ノ後チ浪士トナリ酒井家ニ仕ヘント欲シ自己ノ高名書ヲ有司

ニ上ル此書流布ノ先亡武功書ニ洩レタルモ幸ヒニ酒田三十六人永田家ニ傳ハリ寶曆十年酒井家ニ贈本ヲ差出セシヲ萬書集抄ニ收メラレ賴テ以テ其全文ヲ見ルヲ得タリ而シテ本書ノ永田家ニ傳ハリ

シ事由ハ詳カナラサルモ先人永田傳次河内守ニ討タレタルニ因ミ之レヲ購入若クハ他ノ源因ヨリシテ所藏セラレシモノナルヘシ但原書今同家ニナシ

(萬書集抄) 三十六人者之内持傳候書付之寫 永田茂右衛門

仕場之覺

一庄内最上取合之時まむろの地ニ籠新城前ニ而天正九年七月廿一日之合戰ニ首壹

ツ取申候但新城譜代之者ニ候

一鮭延田之澤にて天正十年之合戰ニ首壹ツ但最上譜代之者ニ候

一仙北草井ヶ崎城前ニ而天正十一年首壹ツ但此ものは山城主佐貫次右衛門と申

者ニ御座候

一 庄内前森筑前守○前森藏人、東禪寺筑前ノ二人ナリ 丸岡兵庫○武藤義興ナリ 取合之時天正十四年極月廿八日宮田

前ニ於て首貳ツ右之内壹人ハ中村五郎左衛門ト申者壹人ハ宮田村助右衛門ト申者ニ御座候

一 庄内新田目之地ニ而首貳ツ但天正十五年八月八日之合戦右之内壹ツ傍輩へ出置候壹ツ拙者取申候右兩人打申候者南部彌七郎今一人ハ彌兵衛ト申候ものニ御座候

一 庄内觀音寺前ニ而天正十五年八月朔日首壹ツ取申候此者ハ土門與惣右衛門ト申者ニ御座候

一 慶長六年庄内東禪寺城景勝之内信田修理籠城之時分志村伊豆守鮭延越前守兩大將ニ而先達之時拙者案内ニ御座候間兩人先馬ニ仙北秋田由利之人數召連罷上申候陣供之砌濱ニ而三人討取右之内首一ツ仁賀保兵庫家中ニ出置候右之外貳ツ瀧澤兵庫家中へ出置候但三人討申者永田傳次松村彦市○永田松村ハ酒田三十六人ナリ 田代彌四郎ト申者也

以上合拾壹首數

板垣河内印

而モ其志ヲ達スル能ハス子孫當處ノ住民トナル舊大組頭石垣氏ハ河内ノ子孫ナリト稱シ其二代某ノ法名ヲ記セル一軸ヲ傳フ

南無歸依僧

出羽國主前河内守性某甲二代孫

南無歸依佛

内館院宮田豐寧大居士 位

南無歸依法

九月初四日

又當處先代肝煎石垣次右衛門○當主兵次郎ト稱ス モ亦河内ノ末裔ト云フ寛文三年次右衛門

主トナリ升川谷地ニ於テ新田ヲ開發シ一村ヲ創始ス箕輪新田是レナリ家ニ之レ

ニ係ル文書ニ通有リ左ノ如シ

一 遊佐之内升川谷地新田場ニ被仰付則谷地四十町之所貳町新田百姓居屋敷之分境ヲ立よみわけ相渡候事

一 谷地之内田地ニ與不申候所ハ相應ニ谷地御年貢上納可仕候事

一新田場不殘切開如御作法之三年休相過其以後谷地御年貢御赦免之事若未々迄田敷ニ不成所ハ升川村谷地主方江相返可申候此旨御郡代所依被仰付ニ申渡候爲後日仍如件

寛文三年卯三月十四日

御使

加藤吉兵衛印

向宮田村

次右衛門

乍恐向宮田村次右衛門以書付申上候事

一新田場ニ畠少も無御座候間升川山成共瀧浦山成共吹浦山成共かつて次第ニひら
き申度候間御うら判被懸御意被下度爲其書付差上申候 以上

(寛文四年)

辰三月廿五日

次右衛門印

御奉行所

江地 上下アリ明暦二年ノ現高上江地村ハ貳百七十五石壹升六合ニシテ下江地

村三百壹石七斗三升七合四勺ナリ同年檢後チ上江地二百七十六石八斗壹升七合

免四ツ四分七厘タリ

石山氏 江地組七千八百貳石八斗壹升貳余ノ大庄屋タリ下江地村ニ住シ本ト同組

ノ大組頭タリシヲ治郎右衛門ニ至リ寛文五年石辻組大組頭阿部彌七郎ト共ニ遊

佐郷中ノ大肝煎ニ召出サレ子孫相承ケ總藏ニ至リ寛政五年櫛引通田澤組ニ移サ

レ後チ御組外トナレリ

(御郡中大庄屋之記)石山治郎右衛門ハ寛文五年巳大肝煎ニ被召出彌七郎ト共に遊

佐郷を支配し貳拾石を給り延寶八申年病死嫡子勘左門相續元祿十四年巳病死嫡子

平助相續後二郎左衛門ト改享保三戌年拾俵を増給リ寛延二年病死嫡子重藏相續後

百平助ト改む明和元年遊佐郷組分ありて源五兵衛ハ石辻組ニ阿部久右衛門ハ宮野

内組ト平助ハ江地組御役たり寛政元酉年病死嫡子惣藏相續同五丑年櫛引通田澤組

江移さる後また京田通西郷組江轉ず其孫宮多天保七申年御組外となれり

惣藏二代リ當組ニ命セラレシハ添川組ノ川俣治五兵衛ナリ在役八年ニシテ寛政

十二年舊組ニ復歸シ十日町大組頭今野喜七當組大庄屋ニ召出サレ文化十三年御

組外トナリ宮野内組齋藤隼之助之レニ代リ初メテ上野澤村ニ住ス但宮野内組ニハ下

ル文政元年隼之助清川組ニ移リ横山組ノ齋藤七大夫來リ亦上野澤ニ住シ當組ヲ

支配シ御郡中大庄屋之維新後ニ及ヘリ

玉龍寺 江地字上屋敷ニアリ日蓮宗越后國蒲原郡日蓮宗本成寺末ニシテ釋迦牟尼

如來ヲ本尊トナス寺傳ニ貞治二年僧日陣ノ開基ナリト云フ日陣俗姓佐々木氏ニ

シテ出雲守護鹽谷高貞ノ遺腹ナリ高貞落去ノ際其ノ妻孕メルアリ京都西陣ニ屏

去セシガ同族佐々木信胤之レヲ越後ニ赴カシム既ニシテ分娩ス即チ日陣ナリ延

文五年弘法ノ爲メ當國ニ下向ス同族佐々木石見守綱利之レニ從ヒ來リ共ニ鳥海山麓字七堂ニ居ヲ占メ應安三年綱利吉出村ヲ創始シ永住ノ處トナス日陣爲メニ月光川上流附近字三之股ミツノマタニ一佛刹ヲ創立シ同族ノ菩提所トナシ後チ越後ニ赴ケリ年代不詳三之股ヨリコ、ニ移轉スト云フ

遊佐村

遊佐町

十日町八日町六日町吉出田

吉出京

野澤上下野澤同新田

小原田ノ内平津新田

大楯白井新田

遊佐町

十日町村八日町六日町村ヲ惣稱ス延喜式ニ出羽國驛傳遊佐十疋トアリ遊

佐ノ名稱久シ十日町八日町六日町等ハ即チ定日市ヲ立テラレシヨリ起リ中世以

後本郡ヲ遊佐郡ト稱セシモ亦コレヨリ推及セル稱呼ナリ以テ當時ノ繁華ヲ想見

スヘク今尙其名殘トシテ郡内ノ名邑タリ

十日町

明曆二年ノ現高三百貳拾石九斗壹合同年檢貞享ノ初メ三百廿四石余後チ三

百三十貳石五斗四合貳勺免六ッタリ

(貞享村組付)十日町村高三百廿四石五斗三升五合三勺家數卅一軒内廿五軒御役下

外野村より北同處より道者入口前ニ一里塚有東より北へ出村より北ニ川有

八日町

明曆二年ノ現高三百七拾七石三斗三升八合、與頭奧目三石九斗六升同年檢

後チ三百八十四石九斗六升六合五勺免五ッ與頭奧目四石三斗壹升四合免貳分トナ

ル即チ八日町組ノ組本ニシテ大組頭梅津氏コ、ニ住シタリキ

本願寺

八日町ニアリ山號ヲ安養山ト云ヒ淨土宗ニシテ慶長十七年壬子八月草創

等蓮社良通上人透故大和尚ヲ開山トス、コノ僧後元和八年壬戌三月由利郡淨光

寺ニ轉住寛永廿年癸未七月廿八日寂ス本尊ハ阿彌陀三尊如來寺傳ニ第二世善譽

上人ノ時本郡西濱十里塚ノ漁夫三十郎ト云フモノ海中ヨリ引上ケ苦屋ニ安置シ

タリシヲ宿緣アリテ本寺ノ本尊トセシナリト故ニ西遊佐村十里塚ノ住民大半現

ニ本寺ノ壇徒タリ

六日町

明曆二年ノ現高四百五拾貳石四斗七合貳勺與頭奧目貳石八斗六升七合三

勺同年檢後チ四百四拾九石五斗壹升六合貳勺免五ッ新田八石五斗五升五合二勺免貳

分五厘タリ

○因ニ云フ正保庄内圖ヲ案スルニ當邑ハ往時内郷街道ノ線路ニ當リ即チ酒田北口ヨリ小湊川ヲ渡リ外野村ニ出テ下小松村ノ西北ニ沿ヒ一里塚ヲ經營村ニ入り月光川ヲ渡リ下野澤村ノ東ヨリ北目川ノ上流ヲ渡リ銀積寺下ヨリ升川落伏ヲ過キ吹浦東口ニ出テシナリ

二之瀧神社 遊佐村地方字懷之内ニアリ鳥海山中鳥海湖ヨリ流下スル瀑布ヲ神靈トシテ之レヲ祭ル舊修驗瀧口某ノ家傳ニ寛政三年先人照覺二ノ瀧ヲ開キ同十二年拜殿ヲ建立シ不動明王ヲ安置セリト云フ然レモ拜殿ヲ創始セシハ享和四年即チ文化元年以後ニ係レルモノナラン石辻村阿部氏記録ニ長床ノ建立ノ募疏アリ左ノ如シ

抑々二の瀧と申ハ鳳岳山上ニ鳥の海といへるあつて其流數仞を傳ヘ于爰漲り落つ故に水勢滔々として巖に響き霹靂として雷の坤軸に轟くに異ならず瀧壺に望んとすれば水烟咫尺をわかつたず潺湲たる碧水疊々として動もすれハ蛟龍の濤を出るかと疑ふ實にや唐土廬山の瀧ともいふならんかゝる靈場なりといへども枳棘塞かり險阻にして歩行のおよびかたきを患ること多年時なる哉樵夫の案内をもとめ雲を踏み梢を架り千辛萬苦して稍々租することを得たり參詣の群集道をよきるにいとまあらず其靈驗恰も鏡の影を照らし響の音に應するか如し是全く靈山の流を戴き近ハ千町萬頃のたなつものを養ふも畢竟此靈瀧の恩澤ならんや崇ひ信せずんハあるへからずしかるに一字を建て詣での勞れを息ハんと志願ありといへども不肖短迫にして自力に及かたく願くハ多少ニかはらす勸善寄附あつかる其姓名を書記

し子孫繁榮七難即滅の執法可抽丹誠者也

干時享和四稔孟春

願主 來運坊

是れより二の瀧に道を開き貴賤參詣日々に繁榮しぬ
序記ハ今野氏述作なり

大 之レニ據レハ來運坊ナルモノ靈區ノ徒ラニ荆棘ニ阻テラレ世人ノ知ルナキヲ憂ヒ百方辛苦初メテ道路ヲ開キ文化元年有志ニ勸財シ長床ヲ創立セラレシモノナリ爾後漸次隆盛ニ赴キ終ニ本郡ノ一勝境トナレリ神佛分離ノ際不動明王ヲ撤シ更ニ瀨織津姫神ヲ祭リ二ノ瀧神社ト稱ス明治初年村社ニ列ス

大 楯 八日町ノ東ニアリ八日町十日町六日町ハ蓋大楯ノ城市ナリ風土略記ニ遊佐殿ノ居館ナリト云フ遊佐氏ノ事詳カナラスト雖モ殊ニ之レヲ大楯ト稱スレバ當年ノ規模尋常ナラサリシモノ、如ク覺ユルモ文献ノ徵スヘキナシ」石黑家記ニ「ゆさの庄ハ湯澤殿あつかい知行三百貫……嘉禎三年めよりゆさ殿斷絶其年ハ大寶寺へゆさの庄とられ候」トアリテ來迎寺年代記ニ遊佐氏ノ事所見ナシサレ

バ同氏ハ嘉禎三年大寶寺ノ大泉氏ニ滅サレタルモノナルヘシ

因ニ云庄内物語引ニ文正中遊佐太郎繁元なるもの酒田城を今の地に移せりト之レニ據レバ先代遊佐氏斷絶ノ後チ繁元ナルモノ非常ノ勢力アリテ川北ヲ席卷シ東禪寺城ヲ占有セシコトアリシカ果シテ然ラハ本郡ノ別名ヲ遊佐郡ト稱スルハ之レニ關係ヲ有セルモノ、如ク見ユレトモ未タ憑證トシテ之レヲ徵スヘキモノナシ姑ク記シテ後考ヲ俟ツ

又云羽源記ニ遊佐郷楯筒井隆慶齋子息隆信トアリ同記ニ載スル所ニ據レハ筒井父子ハ天正十六年千安ノ戰後朝日山ニ楯籠リシ彼東海林兄弟ニ與カシ酒田上之山柵ニ據リ數々武勇ヲ振ヒ東禪寺城ナル越後勢ヲ惱マセシモノナリサレト此書ハ稗史ニ屬シ人名事歴等假構セシモノ頗ル多ク容易ク信スヘカラサレハ今之レヲ取ラス

大楯 遊佐殿ノ居館ト稱スル大楯已廢ノ後チ村名ニナレリト云フ明曆二年ノ現

高貳百拾五石壹斗三升五合同年檢後チ二百廿一石壹斗八升四勺免四ツ九分貳厘タリ

大楯新田 明曆二年ノ現高拾壹石五斗六升六合同年檢貞享ノ初メ七石余ニ減シ後チ

七石九斗九升九合三勺免四ツ三分七厘トナル

(貞享村組付)大楯新田高七石七斗壹升壹合三勺家壹軒御役下下長橋より北東へ上ル

平津新田 寛永十一年菅原次右衛門石川作右衛門胥議リ由利仙北ヘノ流民ヲシテ

開發セシメシ所ナリ下野澤、楸嶋ノ明曆二年ノ現高四拾七石八斗九升六合六勺同年檢毛帳

帳後チ六拾九石七升四合三勺免五ツ四分厘タリ

漆曾根 明曆二年ノ現高三百四十石壹斗三升七合四勺同年檢後チ三百五十壹石四升

七合三勺免五ツ二分厘タリ

岡田 明曆二年ノ現高七十四石貳升五合同年檢後チ七十三石九斗三合壹勺免五ツ五分七厘

タリ

尻引 明曆二年ノ現高百五拾八石貳斗七升四合同年檢後チ百五十九石九斗三升九

合免五ツ五分七厘トナル

京田 明曆二年ノ現高貳百五十壹石九斗四升壹合七勺同年檢ニシテ其新田ハ慶安

五年即承應元年下野澤菅原五郎左衛門ヨリ大肝煎高橋兵右衛門ニ係ル訴狀ニ據ルニ

月不詳同人ノ開墾創立スル所ニシテ當時戸數十ヲ有セリト云フ全文外野ノ下ニ引用ス而モ明

曆二年檢毛帳貞享村組付ニ新田所見ナシ事由詳カナラス後チ本高貳百五拾四石

三斗三升九合三勺免四ツ五分貳厘新田三拾三石四斗七升貳合七勺免三ツ七分六厘トナル

吉出 上吉出、下吉出、釋迦田、奥野ヲ惣稱ス當邑佐々木家傳ニ據ルニ應安三

年佐々木石見守綱利ノ創始スル所ナリ事歴下ニ詳カナリ明曆二年ノ現高九百四

石三斗三合八勺同年檢毛帳後チ八百九十石貳斗貳升四勺免四ツ三分貳厘新田廿一石七斗壹升

三合三勺免三ツ八分六厘タリ

佐々木氏 近江國蒲生郡佐々木莊佐々木源三秀義ノ支流石見守綱利ナルモノ延文

五年法華僧日陣ガ弘法ノ爲メ羽黒山ニ下向ノ際俗縁ニ因ミ之レニ隨ヒ來リ鳥海

山麓字七堂字金保ニアリニ住居ス綱利地宜ヲ相シ草萊ヲ芟リ田畝ヲ拓キ應安三年徙リ住

シ後チ民戸ノ來住スルモノ多ク終ニ一村里トナル即チ吉出村ノ創始ナリ同年八

月氏神八幡宮ヲ宅地内ニ勸請シ又菩提寺ヲ三保ニ創立シ日陣ヲ以テ開基トナ

ス是レ江地村玉龍寺ノ濫觴ナリ日陣亦佐々木氏ノ爲メ大乘妙典ヲ一石毎ニ一字

ヲ書シ之レニ與フ明應四年二月十五日綱利病歿ス九世ノ孫石見道利ニ至リ杉澤

村ト山境ヲ爭ヒ相戰ヒ討死セリ時ニ慶長八年五月ナリ是レヨリ先キ同族刑部左

衛門義綱江洲ヨリ來リ道利ノ家ニ寓セシガコ、ニ至リ八日町高橋党ノ助力ヲ以

テ道利ノ爲メニ仇ヲ報イ三股南ノ川前南峰ヨリ金股川ヲ以テ境界ト定ム乃チ

道利ノ女婿トナリ當家ヲ相續シ亦石見ト稱ス從來月光川ノ流派數條アリテ出水

毎ニ上野澤大楯地方ニ氾濫シ田畝ノ砂磧トナルモノ多カリキ義綱深ク之レヲ憂

ヒ水除堤塘ヲ築キ水路ヲ一條ニ集メ漸次廢田ヲ興復シ五拾余町ヲ得タリ寛永九

年七月廿一日歿ス子孫連綿トシテ今ニ至レリ家ニ數通ノ文書ヲ傳フ

因ニ云當家維新前ハ山親ト稱ス山親トハ即チ山肝煎ニシテ吉出山ヲ管理シ山年貢

ヲ收納スルモノナリ (家藏文書) 乍恐以書付申上候

一私先祖者佐々木源三秀綱之末子ニ而石見守綱利與申本國江州蒲生郡佐々木之庄

ニ罷在候處四百九十七年以前延文五子年日陣上人法花宗爲弘當國羽黒山ニ下向

之刻俗方同性之所縁ニ付附添罷下リ其後鳥海山麓七堂與申所ニ住居仕吉出村見

立開發仕應安三年村形出來引移代々居住仕候尤一村創業之家柄與申今以村番村

等御免仕來申候且日陣上人暫同居罷在候法花經之文一字一石ニ書寫于今顯然與

- 一九代目石見守儀慶長八年卯五月杉澤吉出山境論ニ付三ッ俣南之川代與申所ニ而
双方及打合石見守深入仕討死候ニ付其儘同性刑部左衛門與八日町當時文次郎家
之先祖高橋黨與申候助力仕敵杉澤村之者討留申候
- 一十代目刑部左衛門儀者佐々木源三秀義五代之後胤近江判官時信より十二代義綱
と申候慶長年中同性之由緒ニ而尋來同居罷在候處石見守討死ニ付智養子と相成
申候後ニ石見と改名仕候同人持參之足利義教公之御判物所持仕候寫左之通寫者
前ニ顯ス
- 一同時代吉出川者上野澤大楯双方へ川筋數口之處多年之心勞ヲ以太平山下ニ而水
止御普請築立川ヲ一筋ニ集メ成就仕候ニ付右川下等之荒地追々新田開發仕申候
其節御稱譽有之候而勝手次第開發仕候様被仰付候上野澤南町村々開發仕候分近
年惣八身帶不如意之砌他江讓渡候へとも今ニ八日町村分御田地者所持仕候
- 一同時代苅御水帳名石見守ト有之慶長十六年九月十九日最上家之臣進藤但馬守殿
之御判附之水帳所持仕候
- 一同時代吉出山御年貢之習濟狀最上家之御役人中より證文所持仕候
- 一同時代先祖より之書記相殘し申候
- 一十二代小兵衛寛文中吉出野山江松杉植付御林ニ仕立申候右御林外雜木御林ニ
仕立出精仕天明年中壹萬本余り茂り其後御拂ニ相成申候

- 一十三代惣四郎元祿十六年大組頭御役被仰付翌寶永元年申正月矢嶋領ニ鳥海山公
事出入ニ相成江戸江罷登リ六月中罷下り申候其節公義御役人中山境爲御見分御
下向ニ付爲御案内下筋迄罷下り申候右一件書付所持仕候
- 一十四代惣八飛鳥村御普請所千原川村ニ及爭論候節掛り役被仰付罷出候處御郡奉
行所御指圖ニテ双方取扱御普請首尾能成就仕御稱譽被下置候
- 一同時代享保六年御藥草御見立爲御用丹羽正伯様御下向壬七月二日鳥海山江御案
内之役相勤申候尤其節大風雨ニテ人夫之内下當村助次郎ニ申もの吹さらわれ行
衛相知不申候
- 一十五代惣四郎大組頭見習役被仰付候砌澤新田村御普請之節川北三組請拂役被仰
付首尾能相勤御褒美頂戴仕候
- 一同人義柳原左兵衛様布施藤五郎様久松孝右衛門様御巡見之節女鹿村名主代相勤
藤五郎様御用人今右衛門様より爲御褒美御狀并鳥目等態飛脚ヲ以被下置候間本
庄迄罷越御禮申上候
- 一私家代々吉出村山親ニテ古來山道三筋之處下モ之壹筋ハ石見江知行被下ニ申儀
古書物之内ニ有之候爲其元和年中迄ハ山御年貢拾六石六斗八升三合宛上納仕候
其後
御入國以來右下置ノ分も寸志ニさし上夫より當時迄五拾貳俵貳斗余ッ、上納仕

候尤山親役給與として五俵貳斗ツ、山御年貢之内より代々被下置候
右者安永三年午三月御尋ニ付書上申候得共猶又相改書上申候 以上

嘉永四年亥

吉出村

山親 直次郎

今度兩度之上京一身之以覺悟 帝都守護忠儀拔群ニ付江州任國事不可有相違者也

永享七年七月十五日

義 教

佐々木左京亮殿

宇多天王ノ後胤

江州大守佐々木右衛門督義弼

佐々木源三秀義始近江國ヲ領ス曾孫近江守氏信京都京極ニ住セシヨリ京極氏ト號
ス氏信兄壹岐守泰綱嫡子近江國判官時信京極六角ニ住ス是ヨリ代々嫡家ヲ六角氏
ト號ス六角時信ヨリ七代後胤近江守氏綱其子六角左京義實幼少成故氏綱之舍弟同
國箕作ノ城主彈正忠定賴後見シテ義實ト同近江國觀音寺城ニ住ス義實成人ノ後文
武ノ才世ニカクレナシ其子義秀又幼少成故定賴ノ嫡子左京大夫義賢又後見ス弘治
三年ヨリ永祿四年迄六ケ年義秀成人ノ後
將軍足利義輝公輔佐ス義秀ハ織田信長ノムコ也此時三好義輝公ヲ打故義秀信長ト
同シテ三好ヲ誅伐セント催ス此時左京大夫義賢其子右衛門督義弼三好ニ一味シテ

終ニ信長義秀ノタメニ江州没落ス跡ニ甲州ニ逃下信長ヲ頼テ佐々木治郎ト名ヲ改
ル箕作城八幡城トモ號

○此文書年號ヲ記セサルモ用紙書体ヲ檢スルニ下掲ノ文書ヨリ頗ル古キヲ覺ユ
蓋義綱ノ裔ヲシ來レルモノニシテ義賢義弼父子ノ系統ヲ筆記スルモノナリ

日陣師尊父者出雲國之領主佐々木鹽谷判官高貞山名伊豆守時氏爲ニ在京落本國出
雲ニ下曆應三庚辰四月十六日薨ス後日證尊號尊母者洛陽西陣止ル後佐々木三郎信
胤北國ニ送越後國ニ御誕生

慶長九年辰八月

小次郎

義 綱

飯

宇多源氏

先祖佐々木源三秀義始テ近江國ヲ領

曾孫壹岐守泰綱

嫡子 近江判官時賴 六角號

舍弟 近江守氏信 京極氏號

時信より七代後胤

近江守氏綱

舍弟 彈正忠定賴ノ嫡子

左京大夫義賢

長子 左衛門督義弼

後佐々木治郎改父子兄弟此時近江國沈落ス

義賢三男 佐々木四郎左衛門尉義宗

義宗嫡子 左京亮義清 甲斐國ニ住ス

義清弟 刑部左衛門尉義綱某

出羽國鳥海山麓ニ同苗石見守テ同居後養子ト成

右石見守者佐々木源三秀綱ノ末子延文年中日陣師羽黑山下向之節當國ニ下ル其後鳥海山麓ニ住居養父石見守迄九代也

寛永九歲壬申正月五日

義綱 花押

佐々木小四郎との

正八幡宮當家代々之氏神本國江州ノ城ヲ八幡山之城號

應安三戌八月十五日始神事放生會執行江州八幡山之祭禮者毎年四月卯ノ日也

六角 京極 黒田 宮城 龜井ノ家名佐々木氏也

宇多天皇九代後胤 佐々木四郎高綱十七世孫

義綱 花押

定納 吉出山手御年貢事

合拾貳石六斗八升六合者下山内山共ニ

此内四斗者炭竈貳箇役

右皆濟狀仍如件

元和七年辛酉極月廿八日

中山治郎右衛門判 齋藤 筑 後判

山肝煎石見とのへ

佐々木氏系譜序

一家血胤永續無疆授之者天也、替之者神也、保之者人也、非天授之、則血胤中絶、非神替之、則無福、無福亦中絶、又非其人、則雖有福、不能保之、出羽國飽海郡佐々木氏血胤相承、既暨五百年、系出于宇多源氏、始祖曰佐々木石見守源綱利、々々宇多帝之皇子敦實親王七世之孫、佐々木源三源秀義之後裔也、秀義保元平治間、屢顯戰功、人之所知也、綱利本近江國蒲生郡佐々木莊之人也、篤信法華、且與日蓮貫主日陣有族縁、延文五庚子年、日陣求弘其宗派、擁錫遠來羽黒山、綱利以族縁之故、衛徙而同來、鳥海山麓上、有平地、曰七堂、綱利初居於此、後相地良處、薙茅研榛、墾辟畝瓏、結構居室、應安三庚戌年、舉家徙焉、人民亦從、詳聚、居然成一邑矣、其名曰吉出村、淡海國蒲生郡所建之八幡宮、爲佐々木氏祈願之神、乃營其祠宇于宅地、虔祭不怠、又啓立雞園于上江地村、曰玉龍寺、以爲子孫受冥福之場、日陣亦禱佐

々木氏永昌大乗妙典之經文每石書一字以石數千與其家此三者皆今尙存矣當時領主以啓辟田地之故使佐々木氏司其邑山林土俗謂之山親從綱利及今之直次郎篤敬既至十七世世々家於吉出其間雖職不一皆爲邑吏且司其山林中有功勞而受褒賞者亦爲不尠是以至今免邑之徒役直次郎幼穉時家道大衰鬻土田賣什器猶尙哺啜不給室如懸磬直次郎年稍長及知世務慷慨不已夙與夜寐專務恭儉禮拜神佛唯祈家之興復一日與起發憤自謂力業克敏疾窮鬼不能追於是暑則首戴茅蒲雨則身衣襪襖深耕疾耨除田擊稿鞠躬盡瘁身力及者无所不爲暨至中年誠衷努力之應驗現露家道漸復買土田備什器作園倉二三至老年生產益富殆倍祖宗之世於是奉賽覲於神佛以謝其靈應又多植樹木干山林且獻金米若干於候家以報國恩是以一族尊之稱中與祖侯家亦嘗褒賞其志直次郎齒過耳順懼耄倦失事辭謝吏職獨司山林悠悠自以養老此豈不天授之神贊之與直次郎之精誠努力相待而後獲然者乎嗚呼爲子孫者克有續父祖之志乃與天神無疆之德諸佛無滅之法俱共永昌乎哉今茲甲寅其子直三敬義作家系譜並述乃翁之切德以欲永傳後裔直三眞島義教之女婿也義教馨亡兄之女婿也以故頃義教遠寄書千余懇丐一序乃叙其概以贈之云嘉永七甲寅仲夏下泮

酒田

鳳山藤馨子德撰

宇多天皇之皇子敦實親王七世之孫

源 秀 義

佐々木源三十三歲之時源爲義養子トナル保元平治ノ時ハ義朝ニ從テ武勇ノ軍功ヲ顯ハス壽永三年七月十九日於伊賀國山田郡平田城軍功ヲ勵ミ或ハ退治スト雖トモ依老屈其身痛手ヲ負テ死ス于時年七十三則自關東被定第一勳功御感ノ余預役後ノ賞也

定 綱

佐々木太郎檢非違使左衛門尉從五位下京都諸司代久勤入道ス賴朝郷伊豆ニ在國ノ時ヨリ隨從シ武功度々ニ及フ元久二年四月九日卒ス

信 綱

佐々木四郎左衛門將監建曆三年八月八日左衛門尉承久三年四月十六日使宣嘉祿三年十一月十一日轉左衛門尉貞應元年十月十六日從五位下如故安貞二年十二月廿六日近江守從五位上天福二年正月九日被加評定衆同年七月廿六日承家本佛又改假虛佛承久逆亂ニ宇治川ノ一番乘高名武藏守泰時妹婿仁治三年三月六日卒六十二才

三男 泰 綱

佐々木壹岐守 信綱ノ嫡家トナル母ハ川崎五郎平爲重女嘉貞二年十一月廿二日使宣同三年正月廿九日從五位下使如元同年二月廿四日從五位上石清水行事有賞同年十二月廿五日兼壹岐守應元元年八月辭兼

國仁治二年十二月廿日辭使弘長□□十一月廿二日出家法名生西建治二年五月十七日卒行年六十四

三男

綱

佐々木三郎從五位下備中守法名崇西
延慶三年十二月廿四日卒行年六十七才

六男

信

佐々木六角三郎判官嫡家トナル法名玄流德治元年生正和三年十二月十四日元服元德元年使宣同二年從五位下同八月春日行幸從五位上貞和二年八月廿六日卒ス年四十一才

時信七世孫

綱

近江守
江州觀音寺城主

義

實

自永正十五年至弘治三年號屋形義實幼少ノ時伯父定頼後見ス生長ノ後義實文武ノ才隠レナシ弘治三年己十一月二十日五十一才ニテ卒ス將軍家ヨリ御哀傷ノ余御自筆ヲ染ラル 近州の大守佐々木廿一世の家嫡北陸道の管領源義實朝臣ハ予か慈父の如し此人世にありしほどハ天下の後見として武威の高かりし事などお

もひいつるについておしともかなしともいかに云ふへきわさおろかなる一首を追善の爲につゝりおくもなり
たうちねとおもひおきてしその人ものになき身とさくそかなしき

義

秀

自弘治三年至天正十年屋形ト號ス幼少故自弘治三年永祿四年迄六ヶ年義賢後見ス義秀生長ノ後 將軍義輝公ヲ輔佐ス天正十年五月廿四日卒ス此時三好笑岸叛義輝公義賢義弼三好ニ一味ス義秀ハ信長ト心ヲ合セ三好ヲ制ス

義

頼

和田山城主

義

郷

自天正十年至元和九年屋形ト號ス天正十年六月四日明智光秀本能寺ニテ信長郷ヲ討ツ其時觀音寺城中京都出勢ニテ空虛ノ處ヘ光秀勢打入燒亡ス時ニ佐々之重器不殘燒失ス
元和九年七月九日卒ス

龍武御曹子

元和七年誕生三才ニテ
家督幼少故不號屋形

氏綱舎弟 定頼 彈正忠江州箕作之城主 屋形義實定頼幼少ナル故後見シテ觀音寺城ニ居

義賢 左京大夫入道承禎箕作之城主弘治三年ニ屋形義秀幼少ナル故爲後見觀音寺城ニ移住預管領職

義弼 右衛門督箕作城主永祿より天正之間義賢義弼父子三好ニ一味シテ將軍家ニ叛キ敗北シテ江州ヲ没落後甲州ニ下リ武田ヲ頼ム

義宗 三男 佐々木四郎左衛門尉天正中依戰功感狀アリ云々

義清 左京亮 甲斐國住

義綱 刑部左衛門尉慶長中ニ出羽國鳥海山麓へ同苗石見守道利居住ヲ尋來同居後慶長八年ニ道利ノ養子トナル此間自泰綱義綱迄書載ル

氏信 從五位下對馬守近江守號桐谷母者川崎五郎平爲重女弘安七年四月四日出家號道喜永仁三年五月三日卒七十六才號清龍寺佐々木京極田中

等之祖先也

滿二男 京極三郎 左衛門尉從五位下土佐守 京極三郎左衛門尉從五位下 慶長元年出家賢觀

高三男 氏 佐々木京極四郎左衛門尉佐渡判官從五位下入道々譽 建武ノ比より尊氏將軍ニ從フ威勢萬人ニ越タリ號勝樂寺

秀綱 始源三後京極近江守從五位下文和二年六月十三日 主上遷幸濃州之砌於江州野心之山徒ト合戰討死

綱五男 利 石見守 京極家ノ庶流也始メ近江國蒲生郡佐々木庄ニ住ス延文五子

年法華宗爲弘日陣父ハ佐々木鹽谷判官高貞出羽々黑山下向ノ刻俗方同性ノ所縁ニ因ミテ綱利モ供奉シテ下向其後鳥海山麓七堂ト云所ニ同居吉出村開發應安三年村形成就引移日陣師ハ大乘妙典之經文ヲ一字一石ニ書寫シ永世不朽ノ多場ヲ綱利ノ家ニ殘ス又近江國蒲生郡ニ鎮坐アリシ佐々木守護之正八幡宮ヲ勸請シ經堂ニ相殿尊崇ス佐々木八幡宮之縁起者別記ス綱利明德四年酉四月十五日卒ス

常 利 石見守

嘉吉二年戊二月十六日

春・石見守

嘉吉二戊二月十六日卒

光 利 石見守

文明十六年辰七月一日

賢 利 石見守

永正十年酉九月廿八日卒

縫殿助 分家當時惣助

義 利 石見守

天正十年癸未十月十二日卒

義 定 石見守

天文十三年寅三月十三日卒

利 定 石見守

天正十癸未十月十二日卒

山三郎 分家

道 利

石見守 吉出村山杉澤山地境論ノ時數百人ノ敵ヲ引受ケ深入シテ討死ス干時慶長八年卯五月廿一日也即刻養子義綱遊佐之町高橋党ノ先祖ヲカタラヒ敵杉澤村ノ者ヲ討取因之双方討死之墓南ノ川前澤ヲ境ニシテ双方ニ碑石ヲ建置後世ニ殘ス

源三 助太郎 分家

義綱

刑部左衛門尉後號石見守實者佐々木義清之舍弟同性之由緒ニ而尋來同居之後道利之義子ト成妻者道利女也義綱足利義教郷之判物其外祖先之書記等持參殘置此時最上家之官吏進藤但馬守より之水帳有干今所持ス義綱寛永九年七月廿一日卒

女 子

小四郎

忠 利 寛文五年己巳十二月十四日卒

惣十郎 分家

半四郎 分家

天保年中家絶ル半四郎分家長松在リ

男 子

女 子

女 子

女 子

與三右衛門 分家	忠清 後惣四郎ト改 分家	彌太郎 分家	角右衛門 分家	男 早殺	女 子	孝利 惣八 明和三年丙戌七月 朔日卒七十四才 妻鶉渡川原大淵與右衛門女 酒田下小路粕谷清右衛門妻 玉龍寺弟子	出 家	平 六 分家
利 惣四郎享保九年甲辰 六月十五日卒ス 妻大井村真嶋氏女	忠 八郎左衛門	善 彦兵衛	吉 下野澤村ニ分家					

(以下當主ニ至ル世次ヲ略ス)

下野澤 寛永二年ノ現高貳百七拾八石四斗余ニ對シ 稅率四ツ七厘五毛ノ定免ヲ定

メラル

(菅原氏文書)

當年より致定納度旨訴訟申候ニ付相定事

高貳百七拾八石四斗壹升三合

田四ツ壹分
畠三ツ

下野澤村

取米百拾三石三斗壹升四合者ならし四ツ七輪七毛

右相究候定納百姓前より仕出候手形之通毎年霜月中急度皆濟可申候百姓中致談合
無高下申乞候上ハ少茂御無沙汰申間敷候若違背之輩者可爲曲事候日損水損於有之
者以檢見可令指引候此旨聊不可有相違者也

寛永二年 丑乙 九月十四日

甚 十 郎 印

武 右 衛 門 印

平 右 衛 門 印

但 馬 守 印

下野澤村

惣百姓中

明曆二年ニ至リ貳百七十四石壹升壹合壹勺同年檢後チ本高貳百七十四石貳斗七升九勺免四ツ貳分貳厘横道新田拾石三斗貳合免三ツ七分佐平治新田拾壹石九斗四升免壹ツ三分トナレ

リ

菅原氏 先祖某左馬介ト稱ス出自ヲ詳カニセズ往古桑ノ森ノ通路ヲ塞キ三崎山ヲ開キ由利仙北ノ土寇及庄内ヨリノ流亡ヲ押ヘシモ尙舊道ヲ出入スルモノ多カリシヲ以テ其線路ニ當ル上中下三道ノ内上中ノ二道ハ下野澤村ニ於テ左馬介、下ノ一道ハ吉出村ニ於テ佐々木石見ヲシテ之レヲ監セシム左馬介因テ三千苧ヲ給セラレ子孫相承ケ傳ヘテ左馬介政次ニ至ル政次武藤上杉最上ニ歷事シ毎ニ功勞アリ慶長十四年四月將ニ退隱セントスルニ臨ミ自己ノ經歷ヲ詳記シ嫡子次右衛門政廣ニ與フ其書ハ親シク見聞セシ事項ヲ筆記シ後出ノモノトハ痛ク其趣ヲ異ニシ先輩ノ憑據トスル所ナレハ左ニ全文ヲ掲ク

(菅原家文書)

當家ノ文書ハ近年火災ニ罹リ悉ク烏有ニ屬セリ今、萬書集抄ニ收ムルモノヲ掲載セリ以下倣之

山之仕置之書物之事

一大銅元年迄東禪寺之城者今ノ所より壹町程東方ニ御座候只今ハ河ニ罷成候其時分之北國海道ハ山本ニ付而升川村を通申候今ノ村より三里程奥ニ御座候桑之森ト申所を海道ニ仕候其時分ハ人馬晝夜共ニ自由仕候故關之しまり無御座候故庄内之百姓由利ヘコヘ申候而も無相違自由仕候故人をころし牛馬をぬすみ候而も夜の内に由利ヘ越し候ヘハさたなしニ罷成候扱又由利の百姓も其仕かたニ御座候ヘバ庄内之屋形様由利之御城所へ被遊御相談庄内由理之人歩を以桑ノ森道を切ふさき大銅貳年ニ三崎山海道に切ひらき升川村之百姓半分越候而則女鹿村をたて關を睨申候其以來升川も今の在所ヘさがり候て田地をひらき其上山本通の惣百姓男女共ニあつまり候て烏海山羽黒山日本之大小神及筆程ハ起請文を書立自今以後北ヘ向テ天地有内者牛馬を通申間敷ト申かため起請文をハ上火ニ而やき山本通之惣百姓男女共ニ五臟へ納申候故代々牛馬通不申候跡々より義氏様御代迄下ノ方ヘハ下塔村升川村尾落臥村是三ヶ村上ノ方ヘハ上野澤村吉出村杉澤村三ヶ村その中に下野澤村御座候間此村にて山の仕置致候而可然と被仰出候て菅原左馬介ニ三千苧代々被下候其隱無御座候事

一義氏様御切腹者天正十五年癸未(干支矛盾セリ癸未ハ天正十一年ニ當ル)三月十三日ニ御座候其後ハ屋形様之こしうとニ而被成御座候義興様やかたに御なをり被成候其時も右ニ相替不申候其已後天正十九年丁亥(コレモ干支矛盾セリ)八月廿七日干安ちやすなくれニ最上ヘ御さかり被

成候て以後ハ越後本城重永公切取御持候事

一天正廿二年(十九年ノ)庚子七月朔日ニ景勝公御内衆七手組之衆御越候て庄内之城共ニ城番被成御檢見惡敷被成候故庄内中之百姓共いつきおこし打はたし申候追付其年之内ニ景勝公御入馬被爲成候事ハ小田原陣納り候而御仕置ニ關東より中仙道を秋田まで御下向被成候則同年九月廿四日ニ小砂川村へ御著被成候庄内之百姓共集三崎山ニ御馬を五日かへ置候へハ三崎山より外ニ庄内への道なきかと御尋被成候へハ由利の百姓共申上候様ハ山の内ニ古道御座候へ共御馬ハ不罷成候と申上候何とて馬ハ通らぬぞと御尋候へハ其時百姓共申上候様ハ大銅元年ニ日本之佛神を起請文ニ書入かため申す故それより以來馬ハ通不申と申上候へバ被聞召分御乗物ニ而御通被成候由利之百姓御先立仕候へハ金銀を被下候同廿八日ニ御馬入被爲成候御馬共ハ三崎山を御通被成候則其としより景勝様御代ニ罷成候是ハ天下之證據可爲候其後越後之御代の間ニ付而少しも相違無御座候酒田東禪寺ハ甘糟備後守殿被爲持候其時之長名者同式部殿郷奉行ハ登坂佐馬介殿被成候事

一慶長元年丙申川村彦左衛門殿酒田を御持被成候同三年戊戌より信田様御持被成候其後之長名齋藤玄蕃殿申候事

一慶長四年己亥ノ年迄下野澤村より三里程山ノ方ニ大畑村と申候而家數拾八間御

座候ていつれもゆるしく居候を右の桑の森大銅貳年迄本の海道ニ御座候故其上景勝様御人數三千計ニ而御通候へハ七ヶ年之間其道ニつき仁賀保上濱通又ハ庄内女鹿瀧浦鳥崎吹浦升川此村々の者共道御座候故桑の森ニ而木を切申候へハ山もつき候て右之海道之様ニ御座候ニ付而仙北之夜盜共六拾余人參候て大畑村をやふり鎌刀を持候ほどの者を夜討ニ仕候て殘る者共ニハなわをさしつれてにけ申處を菅原左馬介先立申上野澤下塔升川南目鷺町北目此村々の肝煎百姓助合桑の森迄十一度きりむすび庄内之もの共廿壹人うたれ申候仙北之者ハ六拾人うちとり申候其證據ニいまた鷺町村ニ討取脇指貳尺壹寸ニ而御座候其時分信田様へ御披露申上候へハ御藏表五百五拾表被下候菅原左馬介ハ五人討取候へハ右之三千疋ニ指添知行百石被下候事其隱無御座候是ハ慶長四己亥三月十八日而御座候同五年より弓矢出申候信田様ハ最上陣ニ被爲立候ハ九月十一日御陣を被爲引候ハ同閏十月四日ニ而御座候大浦下殿者最上へ御心替被成候信田様ハ川之口も六十里も海道ハ不罷成候故櫛引大鳥のきりとをしを御歸被成候菅原左馬介ハぢた山本の者ニ而御座候へハ切通の御先立仕御奉公申上候へハ加増百石被下候事加様ニ御忠進申候其後慶長六年辛丑四月二日ニ鮭延典前殿先馬ニ而下口より菅野城を御せめ被成候へ共菅野ハ落不申候同十一日ニ菅野砂越の人數ハ東禪寺へかさなり申候て同月廿四日ニ信田様御出被成候而永井ハ御越候事

一慶長六年辛丑四月廿四日より末ハ最上より義光様切取御持被成候同七年迄城番
 二而同八年癸卯三月東禪寺ハ龜ヶ崎大寶寺ハ鶴ヶ岡大浦ハ大山と加様ニ官途被
 爲成候龜ヶ崎者志村伊豆守殿御持被成候慶長十四年己酉三月七日ニ御死去被成
 候其次を志村九郎兵衛殿御持被成候御奉行者進藤但馬介高橋伊賀齋藤筑後此衆
 ニ而御座候同年九月より劔積寺薬師堂ノ御造立企被成十月廿八日ニ成就仕候事
 一菅原左馬介子孫ニ申渡候者鳥海山どりのうみの水しるひのさわと申澤の邊にひ
 め□□立申候信田様御代ニ御門の道具ニ被爲切頓而弓矢出申候故山の内にてし
 たり申候又伊豆守様御代ニも被爲切則さかたへ御出し被成候而ほとなく伊豆守
 様御死去にてしたり申候此末々ニも被切可被成與被仰出候者如此之段具ニ申上
 御意ニ隨候へと慥ニ申候其上我等之義者山ニ付而御知行くたされ候と存候へバ
 桑の森へ參り木をきり候かど存一年ニ二度宛參見申候其方も左様ニ心得可申與
 申置候
 一大銅元年より當年迄八百年ニ及候迄山ニ付而少も相違無御座候又我等十六のと
 しより谷地館弓矢にてかうめう仕候事又ハ十九ニ而藤島より横山と一せんの時
 日の内ニ二度かうめう仕候へバ横山御重代之押切と申御かたな被下候事無其隱
 候是ニかさらず度々かうめう仕候へ共無何事罷在候左様ニ心得可申候當年より
 御公儀内證共ニ次右衛門ニ渡申候事仍如件

慶長拾四年酉四月吉日

菅原左馬介

政次

同次右衛門方へ渡ス

次右衛門家督ヲ繼キ最上家ニ屬シ同家改易ノ際自ラ其職ヲ失ヒシガ會々寛永九
 年二月遊佐荒瀨等ノ百姓相率キテ由利仙北ニ亡命スルヤ郡代家老柴谷武右衛門
 加藤甚十郎以テ大肝煎池田高橋ノ措置宜シキヲ失フノ致ス所トナシ其職ヲ解キ
 同年十一月川北代官堀兵助ヲシテ旨ヲ次右衛門及ヒ石川作右衛門ニ諭シ由利仙
 北ニ遣ハシ流民ヲ引還サシム二人彼領主ニ交渉シ翌十年二月流民ヲ拉へ歸リ其
 功勞ヲ以テ遊佐荒瀨ノ大肝煎ニ命セラレ各祿五十石ヲ賜ハレリ

(大庄屋例帳) 寛永九年申遊佐郷荒瀨郷御百姓三拾軒余男女貳百廿八人秋田筋江欠
 落仕候ニ付右之欠落之者共菅原次右衛門才覺仕引替候様被仰付同年罷下右之者共
 仙北之内罷在候段承届翌酉年二月男女共不殘引返召連申候其節鎗鉢箱爲持罷越申
 候右ニ付同酉二月高五拾石定四ツ物成新知被下置候遊佐荒瀨兩組大庄屋被仰付候

(菅原家文書)

其方才覺者ニ付川北遊佐郷荒瀬郷大肝煎之内ニ申付候依之高五拾石之所被下置候
條村々百姓御田地あらし不申候様ニ萬事情を入可申者也

(寛永十年)

西二月五日

甚 十 印
武 右 印
平 右 印
喜 兵 印

遊佐郡下野澤村

次右衛門とのへ

同年六月旱魃酒田城附近ノ田地挿秧スル能ハス有司次右衛門作右衛門ニ命シ郷
内ノ百姓ヲ率キ之レヲ助成セシム

(同上)酒田御城廻リ不作之由承候ニ付郡奉行衆被參候間荒瀬遊佐ニケ郷其方達肝
煎下之村々人足不殘出し苗少しつゝ爲持召列きりおこし五三日之内仕付候様才覺
可有之候扶持方之義者人足出次第郡奉行衆手形を以請取渡可申候 以上

六月九日

武 右 印
甚 十 印

次右衛門殿
作右衛門殿

同十一年次右衛門石川ト議リ流民ヲシテ荒地ヲ開發シ新田ヲ創立ス上下野澤新
田、北目新田、大井新田、平津新田、天神新田、草津新田ハ實ニ此時ヲ以テ成
レリ 事下項ニ載スル
文書ニ詳カナリ 同年十一月前大肝煎高橋兄弟潜ニ江戸ニ赴キ十余條ノ目安ヲ
松平信綱同正久ニ上リ柴谷等ノ不法ヲ訴フルニ及ヒ兩松平之レヲ調停シ酒井忠
勝侯ヲシテ越訴ノ罪ヲ問ハズ再ヒ舊役ニ補セシム此時次右衛門石川ト共ニ川北
横目兼大川通穀止奉行ニ轉ゼシメラル 俸祿故
ノ如シ 同十二年事ニ依リ遊佐大肝煎高橋兵
右衛門ト爭論アリ之レニ係ル事跡ハ南遊佐村高橋氏ノ下ニ詳カナリ
同十八年二月大宮田丸子ノ百姓亡命ス有司次右衛門ノ才幹アリテ且其經歷ニ富
メルヲ以テ由利地方ニ遣ハシ之レヲ引還サシム

(同上)二月廿八日之晩大宮田丸子兩郷より百姓七人かけ落申候太儀ニ候へ共遊佐
之内組頭壹人兩郷之内之肝煎壹人荒瀬之内郷口留壹人三人召連矢嶋仙北迄も相尋
引かへし申様ニ其方才覺可申由御家老中被仰我々共より可申越旨ニ候間早々支度

被申百姓尋ニ下へ可被越候路銀等何も横山五左へ申渡候定て下口へ欠落可申候間
其元ニて相談可有之候爲其如斯ニ候 恐惶謹言
(寛永十九年)

三月朔日

水野市兵衛

常世勘右衛門

今野佐次兵衛

渡邊新兵衛

菅原治右衛門殿

今度欠落百姓衆尋申所ハ

仁賀保之儀ハ不及申野山ノ通り尋申候へ共みへ不申候ニ付て我等儀ハ平澤ニ上
下三人にて

一吹浦村彌吉と申者京田村ノ彌右衛門と申者ゆり中身類者五人つれ三月四日九子
村ノ四間ノ百姓おさへ申候是ハ瀧澤山にて御座候

一女鹿村の彌三同與右衛門彼ノ者共ほんちやうのねんころ之者三人たのみつれ候
て大宮田村三間之百姓仙北へ通り申候を五日之晩夜待を仕候てどうまい山にて

おさい申候事

一向宮田村貳間ノ百姓衆右ノ彌吉同彌左衛門彼之者共あい川山にて五日之晩おさ

へ申候事

我等ハ上下三人にて平澤ニ罷有り閑様ニみてニわけ指引仕村々の代官衆ニも肝
煎衆ニもさうどうに音信仕□仍而過分ニ夫かゝり申候 以上

巳ノ三月八日

覺

菅原治右衛門

一ほんちやうにて上もんめん合貳束を金子壹兩ニ買候てそこそこへ遣申候事

一どうまい村の御番所通り申候ニ壹歩夫申候事

一錢壹くわん百文何れニ爲持申候

一壹歩ハ平澤ニ而拙者夫申候

一壹歩ハせき村にて夫申候

一三刃ハ酒壹樽取候てせき村にてゆい仕候

金銀錢合貳兩三刃貳百文閑様ニ人數拾五人之夫ニ罷成候間爲其如此ニ候 以上

己ノ三月八日

下野澤村

菅原治右衛門

京田村

彌右衛門

吹浦村

彌吉

女鹿村

彌三

横山五左衛門殿

與右衛門

態令啓上候然者此中貴様御情被入御老中御奉行衆へ具ニ申上候へハ治右衛門大手柄仕候此段我等も可申由被仰遣候扱又治右衛門義ハ是より御左右次第ニ罷登可被申由申來候多分貴様御仕合能有御座候間我等迄満足申候長谷川權右衛門殿于今油ハ湯誤より御歸不被成候此十五日ニ御歸被成候由被仰遣候其節御寄合被成御褒美可被下と存候左様ニ御心得可被成候

一今度欠落申内々にて賣人おそなわり候ハ後々ハおきて有之間敷候間一兩日も過候ハ早々被遣尤ニ候 恐惶謹言

三月十一日

横山五左衛門 花押

菅原五郎左衛門様

同 治右衛門 様

態飛脚を以申入候然者貴様此中之御ほね折之段具ニ申上候然者欠落之九人之御百姓被召連今十六日ニハ此方へ可被參候由御奉行所より被仰付候間被召連御登可有之少も悪敷事ニハ御座有間敷候間九人之者とも此段被仰聞品々早カ九人之欠落申御百姓被召連御登可有之様子御尋可被成候由ニ候間少も氣遣不申候様ニ可被仰渡候明

日掛御目萬々可申入候

一女鹿村彌三同村與右衛門吹浦村彌吉京田村彌右衛門右四人之者共はたらきの様子具ニ申上候是も悪敷有之間敷と存候 恐惶謹言

三月十五日

横山五左衛門

菅原治右衛門殿

正保元年次右衛門退隱セントスルニ臨ミ亦一代ノ經歷ヲ記シ嫡子新十郎ニ與ヘ訓誡スル所アリキ

(同上)

一慶長拾七年龜ヶ崎御奉行所へ惣百姓共御佗言申上候者山年貢の外ニ五斗入百表納可申候間馬そりを下塔山へ入申様ニ被成被下度與訴申候へハ同十七年正月十四日ニ百五十余人そりにて押し申朝ハ下塔村之者共方々へ被參居相不申候老人共十人斗出向候へハ打たをし山ニ入申候晩ハ山本通のもの共寄合そり木を押し置申候へハ龜ヶ崎より山本通之肝煎百姓共被召寄候ニ付次右衛門先立申候ていづれも罷出候へハ御奉行所より被仰出候ハ川北之義者田島野山海川迄も九郎兵衛様之御知行被成候所を何とてそり木を留置候と被仰出候肝煎百姓申上候様ハ

奥山つき候へハ庄内ノ百姓ノしまり無御座候と段々申上候へハ其段被聞召分肝煎百姓共御歸被成候重而殿様へ御披露被成可被仰付との儀ニ候間同年の八月ニ札を被爲持候而平藤仙右衛門殿竹井五左衛門殿御兩人を被遣右之そり木をハ塔野と申處ニ打置候其上ニ札を被爲立置候へハ今程ハふたはしらと申候則前代の山之仕置爲相替申間敷ために下野澤より北に塚を七つつき置候是より北へハ馬を通申間敷と被仰付候塚の内の石ニ慶長十七年八月十五日と書付可有御座候末代之證據ニて御座候事

一志村九郎兵衛殿慶長十九壬丑六月朔日ニ御切服被成候其以來するが様源五郎様御代迄御藏入ニ而龜ヶ崎ニハ寺内近江殿城番被成候御奉行ハ高橋伊賀殿齋藤筑後殿御横目ハ中山次郎右衛門殿此衆之御仕置にて御座候事

一元和八年壬戌八月ニ酒井宮内様御入部被遊候御家老ハ高力但馬殿石原主馬殿郷奉行者加藤甚十郎殿柴谷武右衛門殿次ノ年の御代官ハ高橋忠右衛門殿坂一郎右衛門殿御兩人にて遊佐を御あつかひ被成候其時惣御百姓共當山年貢の外ニ米百表納可申候間下塔村へ馬を入申様ニ被仰付被下度由訴申候兩御代官衆ハ江地村介右衛門所ニ御座候而次右衛門を被召寄候間參候へハ右之様子御尋被成候間前代之品々委申上候へハ其時御代官衆被仰候ハ殿様御徳之儀を無用とも不被申又前代之仕方をやふることもいかゞにて候間則次右衛門と下塔村之きも入升川村

きも入三人鶴ヶ岡へ罷登候へと被仰付候間任其意參候へハ坂一郎右衛門殿被仰候ハ御奉行所之御意ニハ最上殿之御代之通可申付與被仰出候間左様ニ心得罷歸との義ニ候間罷下候其後但馬殿死去被成候事

一宮内様御代ニ罷成戌ノ年○元和八年より申ノとし○寛永九年迄十ヶ年ニ余り申まで管原次右衛門ハ御知行も不被下候而罷有候處ニ申ノ年荒瀬遊佐兩郡より百姓三拾間ほど桑の森をかゝり仙北へ欠落仕候寛永九年申之十月廿七日ニ御奉行所より次右衛門召御狀被下候間罷登候其時之御奉行高力喜兵衛殿與石原平右衛門殿被成候加藤甚十郎殿柴谷武右衛門殿御兩人御尋被成候ハ次右衛門ハ跡々小知行をも取候様ニ及聞候當御代ニハ何とて其由不申上候と被仰候拙者申上候ハせかれハ若輩ニ御座候故所之肝煎さへおいにるゝものにしたさせ百姓ニ罷成候へハ御披露も不申上と申上候へバ殿様へ御披露被成高五拾石知行ニ被下候間前代のごとく御奉公可仕與御意ニ御座候ニ付而同年霜月十五日ニ金子五兩被下候而仙北へ欠落仕候百姓三拾壹間人數貳百八拾人仙乏にて御代官衆へ御理りをも不申上右之百姓男女ともに引つれ罷歸候へハつき之酉之二月五日に遊佐荒瀬の大肝煎石川作右門と拙者被仰付候其後太郎左衛門長四郎江戸へ罷登候ていか様ニ申上候哉覽我等共戌の十月より被召替候其已來ハ酒田大川はたの口留同川北中の横目に被仰付候事

下野澤村へ御越被成候秋田仙北へ欠落仕候御百姓衆ヲ才覺致歸し候様ニ被仰付候間御意ニ隨而親成者霜月十日仙北へ罷下申ニ付而路銀五兩被下候則仙北ニ而何れも御百姓衆ニほひ申候而次ノ酉二月御百姓衆百五十間人數七百八男女共ニ召連罷登申候へハ右御百姓ニ御知行被成下候就夫高五十石頂戴仕候并遊佐荒瀬兩郡之大肝煎之御判形被下候間扱々大慶ニ奉存候而于今御奉公仕候事則其年酉六月江戸御横目衆御下被遊六月二日ニハ酒田迄同三日ニハ吹浦三崎山ヲ御無事御通被遊候御事則御奉行ニ而も御感ニ思召被遊候事

一 戌之年遊佐荒瀬兩郡ニ新田ヲ立置下野澤新田上野澤新田北目新田大飯新田平津新田天神新田黒川新田合七ヶ村立置申御百姓衆仕付奉公申上候事

一 亥ノ年福升村丸子村兩村ハ御百姓九間欠落仕候間拙者口跡をおのかけ矢嶋さくい山之内ニて何れも百姓衆をどらへ申候而人數男女共ニ三十人余引爲登申候へハ右之ことく御百姓被成置候事

一 己ノ年貳月廿八日同廿九日之晚大宮田村向宮田村丸子村三ヶ村ハ御百姓九間欠落仕候就夫ニ奉行所へ御書付を以御代官横山五左衛門殿三月二日ニ下野澤村へ被遣候拙者ニ罷下欠落之者共召歸し申様こと御意ニ御座候間御意ニ隨而同三日ニ油利へ罷下則仙北ニ而御百姓衆たつね出同月之八日ニ人數五十人余男女共召爲登申候へハ右之御百姓ニ被成置候事

(御郡奉行)

新兵衛殿御代ニ御座候事

一 申ノ年八月十五日ニ大風吹申候而稻殊之外損事申ニ付而御奉行所ハ川北大肝煎衆御用御座候と御切紙御廻被成候拙者にも罷出申様ニと御座候間八月廿五日ニ罷登申候へハ御意ニハ大風ニ付稻殊之外損事申ニ付而何れも御百姓衆うつたい申候へハ相心得可申と御意ニ御座候間畏入候と申罷歸り候折節破損多ニ付而村々ニ氣遣成百姓衆とも御座候とも不被存候間無心元者に目をかけ力を付候へ共自然五間も三間も欠落仕候へハ御意御請申上跡ヲ玄たひ拙者一人山之内ヲ通若ほい不申候者たどへハ油利仙北へ成共おるりけ申候而尋相歸し可申と存候而野ニ臥山ニ伏無油斷居申候へハ壹人も走不申候是ハ拙者ために満足ニ奉存候事

一 御年貢之儀り又ハ何に不寄是ハ能事も年に仍而御座候へ共御披露仕候而も自然まいさん成儀と思召被遊候儀不被存候ま、只今迄延引仕候事

右之趣武兵衛様へ掛御目申上度奉存候間御一覽被遊被下次ニ御小姓衆奉頼存候

以上

(慶安元年)

子ノ三月九日

菅原次右衛門

新十郎家督ノ後次右衛門ト改名ス事慶安三年ニ係レリ嫡子佐平次嗣キ亦治右衛門ト稱ス當

家ハ川北郷目附タリシモ藩主へ謁見ノ節ハ各大肝煎ト共ニ出覲スルノ格例ニ與
レリ蓋是レ政次以來ノ功勞ニ因リテナリ

(同上) 以村繼申達候兼々奉願候通リ名相改治右衛門ニ罷成候様ニと今日被仰付候
間天氣見合一兩日中ニ爲御禮可被罷登爲其如斯ニ候以上

(貞享元年)

十二月十四日

菅原左平次殿

關 甚大夫

元祿二年五月先代次右衛門即新十郎病死年八十一、治右衛門ノ爲メニ其勤書ヲ上ル

(元祿二年万御用留帳原書表題ニハ政
府万留書トアリ)

菅原次右衛門八十一ニ而病死元祿二年己五月此もの勤之覺

一五十八年己前寛永九申ノ年遊佐荒瀬兩組ハ御百姓三拾軒余男女貳百十八人欠落
仕候就夫從御奉行所祖父菅原次右衛門處へ召御狀參リ候ニ付罷登候へハ今度欠
落百姓ノ元を以引返し候様被仰付候則罷下仙北之内ニ而在所承届明酉之二年男
女共ニ不殘引返し申候事

一同酉之二月五日ニ高五十石御知行拜領仕遊佐荒瀬大肝煎御役被仰付候事

一同戌之暮高橋長四郎大肝煎役被仰付候得バ次右衛門之御役御赦免川北郷中御横

目酒田大川通穀止ニ手代差置候様ニ被仰付相勤申候事

一五十五年以前亥ノ年九子村南福升村御百姓七軒男女ともニ三十七人欠落仕候ニ
付親新十郎矢嶋へ罷越右之御百姓男女共ニ不殘引返し申候事

一四十四年己前慶安三年寅ノ正月親新十郎名を改治右衛門ニ罷成候事下

元祿四年十二月治右衛門郷目付ヨリ荒瀬郷大肝煎ノ内ニ召出サレ大島田村ニ移
住シ九組ノ内新田目組勝龍寺組星川組福山組ノ觸元ヲ掌リ古川ノ池田喜太郎ト
共ニ郷内ヲ支配セリ之レニ係ル文書ハ東平田村朝日山城ノ下ニ掲載ス宜シク參
照スヘシ

寶永五年治右衛門病死嫡子五左衛門相續享保十年病死嫡子助右衛門繼キ寶曆六
年病死嫡子勤之助繼キ寛政七年病死嫡子助右衛門相續シ拾石ヲ加増セラレ高六
十石トナリシガ天保七年嫡子次右衛門ノ事ニ坐シ父子改易ニ處セラレ其孫御組
外トナレリ此一節御郡中大
庄屋記ニ據ル維新後子孫藏岡村ニ移住シ今尙在リ家ニ多クノ文書ヲ傳へ
シモ惜哉近年火災ニ罹リ悉ク烏有二畝セリ

下野澤新田 寛永十一年菅原次右衛門石川作右衛門相議リ開發セシムル所ナリ事
上ニ詳カナリ

(下野澤菅原家文書)

下野澤新田島高之事

一 下島 <small>九間</small>	壹畝六步	與右衛門
一 下島 <small>十一間</small>	壹畝十四步	甚 助
一 下島 <small>十六間</small>	貳畝步	與右衛門
一 下島 <small>十五間</small>	壹反步	甚 助

下島合壹反四畝廿步 分米八斗八升

右是ハ北目村分ニ御座候か成ノ年○寛永十二年ひらき申候て开ノ年常世勘右衛門殿小出角兵衛殿御兩衆ノ御奉行にて御さわ御入被成候丑ノ年々々ノ御免相次第御年貢御藏へ納申候何時成共御たつねニ御座候者此通り可申上候爲後日仍如件

(寛永十六年)

卯ノ十二月十六日

新田村きも入 與 助印
 御百姓 仁 藏印
 同 喜三郎印
 同 甚五郎印
 同 源右衛門印

菅原五右衛門殿

同 助三郎印
 同 七 藏印

明曆二年ノ現高六十六石七斗五升七夕同年檢毛帳タリシヲ貞享ノ初メ六十七石貳斗貳

合壹夕貞享村組付トナリ爾後異同ナシ但免四ツ六步四厘

上野澤 小右衛門新田ノ小名アリ明曆二年ノ現高六百七拾貳石九合八夕同年檢毛帳貞

享ノ初メ六百七十六石五斗四升三合七夕貞享村組付タリシヲ後チ六百八十一石八斗七

升七夕免四ツ壹分貳厘トナレリ

齋藤氏 舊江地組高七千八百貳石余ノ大庄屋タリ七大夫ハ本ト納方手代ナリ文

化十二年御組外トナリ文政元年横山組大庄屋ニ召出サレ同十年四十石役料拾石

ヲ賜ハル子良作早世シ孫源右衛門嫡子トナリ御郡中大庄屋之記年當組ニ移サレ子孫

相承ケ維新後ニ至レリ

上野澤新田 開發ノ事歷下野澤新田ニ同ジ明曆二年ノ現高拾參石八斗八升七合三

夕同年檢毛帳タリシヲ貞享村組付ニ上野澤新田高十六石七斗五升四合壹夕吉出ヨリ具、下野澤ヨリ東ト見

エ後チ廿五石九升八合壹夕免三ツ九分九厘トナル但高ノミヲ有シ民居ナシ

御嶽神社 上野澤字水上ニアリ少彦名命ヲ祭ル

建物 社殿一四 元文四年九月ノ造立ニ係ル山崎高橋善四郎家代記 元文以前ハ拜殿モアリシガ焼失

後再建ナシ天保十一年書上

境内 千八百九十坪余 ○舊社家佐藤重並ノ元文年間書留ニ云ク龍澤社地堺ハ北者由良之澤南ハ拂川東ハ拂川之川上ヲ大澤ト云フヲ限リ也亦東ト北之間ニ山田有リ此山田之並之地ツ、キハ社地ハ廣野迄七十間余程之處澤も川もなく廣野へツ、キ境目無之候只今一之坂ハ山田エ通ル道筋ニ境塚四ツ御座候此家ハ古來之事にて御座候只今ハ殊之外ひきく罷成候故境塚有とも無とも思知るなし然とも社家之事ハ代々聞傳置申候只今氣ヲ付テ見申候得バ家ハ四ツ御座候則家之上ヲ只今道ニ致し通申候此家ハ龜ヶ崎之城主志村伊豆守殿之御家老進藤但馬殿御扱之頃御水帳御改メ迄御座候砌○下野澤村菅原政廣記參照スヘシ 社地境モ相立申候哉と奉存候トアリテ當社ノ境内ハ頗ル廣潤ナリシヲ以テ古來其區域面積分明ナラサリシモノ、如シ故ニ天保十一年舊社家佐藤山城カ領主ヘノ書上ニモ「社地間數之儀手廣ニ付早速相改兼申候文政十一年子三月御糺之節繪圖面差上置申候」ト以テ證スヘシ維新後現境内ノ外悉ク上地トナレリ

祭日 三月十三日 往古五月八日ニ流鏑馬神事アリシヲ永祿十年兵亂後絶エ其遺物トシテ五本骨ノ扇的ニヲ傳ヘ馬ハ館主ノ臣白旗氏ヨリ出シ馬場ハ高屋敷邊ヨ

リ百間余ノ處ニ小石ヲ築堅メタル地形遺レリト龍澤館傳記ニ云ヘリ

本ト龍澤山玉椿寺藏王權現ト稱ス延寶九年庄内寺社領記 大和國吉野郡金嶽神社ヨリ勸請スト天保十一年書上云フモ年代事由文書ノ徵スヘキナシ

參照 (龍澤社地境内由來記)永承九年亥春黑澤五郎正任館を築始めしより産神攝社末社の勸請あり

○龍澤山玉椿寺ハ本地佛ニ係レル山号寺名ニシテ別ニ玉椿寺ナル佛刹アルニアラス猶龜ヶ崎八幡宮ヲ大淨山東禪寺ト稱スルカ如シ

慶長十七年六月四日最上義光ヨリ灯明供物料トシテ拾壹石壹斗壹升ヲ寄附セラ

ル爾後ノ沿革詳カナラズ明治 年 月郷社ニ列ス

舊社家 佐藤氏ハ本ト天池氏ナリ永祿十年八月龍澤館主葛名五郎左衛門由利仁賀保氏ノ爲メニ陥ラレ伯父黒川館主阿曾大學ノ許ニ投シ元龜元年四月病歿ス其妻落飾シ妙護院ト號シ庵ヲ吉出村ニ結ヒ亡夫ノ冥助ヲ祈リ後チコ、ニ終フ葛名ノ嫡子早世シ孫寅松祖母妙護院ニ養育セラレ成長ノ後チ天池氏ノ掣トナリ佐藤兵部ト稱ス即チ佐藤家ノ先人ナリ兵部ノ後チニ肥後大夫玉伊大夫專養大夫アリ

慶長十七年山形ニ登リ最上家ノ黒印ヲ受領セラレシハ此專養大夫ナリト社家先

祖代々記ニ云ヘリ今ノ佐藤氏ハ果シテ葛名ノ血統ヲ相承セシヤ否ヲ知ラズ

備考 (寶永七年三月廿七日) 吉出組大組頭佐々木村々改書上吉出佐々木氏所藏

上野澤村

- 一 玉龍山 但家數ノ内ニ御座候
- 一 眞言宗 巖岡鳥海派
- 一 眞言宗 下當村 劔積寺
- 一 眞言宗 但神領高拾壹石壹斗壹升
- 一 眞言宗 升川村 地福院弟子
- 禪宗
- 安養寺
- 明學院
- 社人
- 重大夫
- 御役下
- 御役下
- 水のみ
- 大專坊

安養寺 上野澤字久稱添ニアリ龍澤山ト號ス曹洞宗海晏寺末ニシテ釋迦牟尼如來ヲ本尊トナス創始詳カナラズ本ト龍澤山ニアリテ寶林庵ト稱セシヲ後チ安養寺ト改ムト云フ

(當寺所藏雲版銘)

寶林禪庵雲版

住持比丘源永等

大旦那……廣成寄進

時嘉吉三季口林鐘廿六日

中コロ衰微ニ屬シ海晏寺第八世祖天之レヲ興復ス依テ當寺中興ノ開山ト稱ス天明八年本末廿代御改指上帳第五世靈松ニ至リ龍澤山ヨリ現境内ニ移轉スト寺ニ古扣壹冊ヲ藏ス紙質書体正シク寛永年間ノモノニ係レリ左ニ抄出シテ參考ニ供ス

一天正拾八年庚丑七月朔日景勝公關東々中仙道秋田迄御下向被成候同九月廿四日小砂川村御着廿五日吹浦御著其時神社御尋ニ付被遊候

出羽九神秋田三ヶ所庄内六ヶ所

- 一 大物忌神社 兩所山神宮寺
- 一 劔龍山波字志別神社 劔積寺
- 一 劔龍山同 永泉寺
- 一 劔龍山同 常恩寺
- 一 龍澤山 安養寺
- 名乘來候

(中略)

一 寛永九年戊八月安井瀨兵衛殿彦坂奎彌殿小宮佐平太殿御三人相廻リ御私領社領御改被成候

境内寺中六拾間ニ百三拾間

野澤館 上野澤龍澤山中ニアリ藤名氏コレニ住ス分内東西百二十間東北八拾間余ナリシト云フ壘壁ノ形跡今尙存セリ

〔龍澤社家佐藤重並元文中書留瀧澤之城間數改見申候ニ東西百三拾間南北八十間
余御座候上野澤之内白はた久保岡島之前田中久津江そりはしといふ小字あり御伊
勢之宮之前寺の大門崎迄をむかし馬場といふ此事當村澁谷金四郎といふ人元文
五年の比七十才余罷成候人有此人之はなしむかし城家中有之節ハ馬場にて御座候
故道のそこハ皆ざく石にて堅メ道成ト云事度々はなしに仕候を承及候只今モ藏人
小路を馬場小路と云傳なり

龍澤館傳記ニ據ルニ永承二年黒澤五郎正任館ヲコ、ニ築キシモ水利不便ノ爲メ
更ニ松岳山ニ經營シテ移住シ當館ヲハ其臣葛井某ニ附シ之レヲ守ラシメシムト

○黒澤五郎正任何人ナルヲ知ラス阿部頼時ノ子ニ黒澤尻四郎正任アリ同人カ然レ彼
レハ前九年ノ役ニ黒澤尻柵ニ據リ康平五年九月官軍ノ爲メニ陥ラレ逃レテ出羽ニ來
リ大鳥山ノ太郎頼遠ノ許ニ投セシカ家兄貞任死シ宗任降ルト聞キ出テ降人トナリ後
チ配流ニ處セラレシモノナリ永承二年ハ康平五年ヨリ十二年以前ニシテ貞任ノ死ヲ
陸奥話記ニ據リ三十四才トスレハ永承二年ノ此ハ其年齡二十二才ニシテ正任ハ僅ニ
二十才未滿ニ屬セリ良シ又同人トスルモ正任ノ出羽ニ來投セシ間ハ二ケ月ニ過キサ
レハ斯ル短月日ヲ以テ當館ヲ創始スルノミナラス松岳山ヲモ經營スト云フハ事實上
許サ、ル所ナルヘシ姑ク疑ヲ存シ後
考ヲ待ツ

其後貞和二年藤名左衛門ナルモノ京師ヨリ來リ當館ニ住シ子孫相承ケ五郎左衛
門ニ至ル家臣ニ白旗葛井大久保山門金澤岡等アリ天文以後由利ノ土寇鳥海山桑
之森ヨリ庄内ヲ犯シ數々戰爭アリシガ永祿十年八月下旬仁賀保氏大軍ヲ率キ當
館ヲ襲フ館主利ヲ失ヒ終ニ没落セリ

〔由利十二頭移替聞書寛永五年三月筆記〕永祿十年丁卯八月下旬仁賀保ハ庄内川北野澤の城を
攻城中弱して終に落城す彼領方皆仁賀保ニ屬ス

○右ハ由利郡ノ記録ニシテ即チ敵方ノ筆ニ成レルモノナリ没落ノ年月龍澤館傳記ト吻合セリ

此時五郎左衛門逃レテ伯父ナル黒川館阿曾大學ノ許ニ投シ元龜元年四月病死ス
年七十余其妻落飾シ庵ヲ吉出村ニ結ヒ妙護院ト號シ亡夫一門ノ冥福ヲ祈リ遺臣
岡九右衛門亦剃髮シ之レニ從フ五郎左衛門ノ嫡子早世シ孫寅松妙護院ニ養育セ
ラレ成長ノ後チ龍澤社家天池氏ノ養子トナリ佐藤兵部ト稱ス即チ佐藤氏ノ先人
ナリ事同家ノ記録ニ詳カナリ

龍澤館傳記并社家先祖代々記

龍澤之館ハ永承二年丁亥春黒澤五郎正任館を築始し雨池に假屋を立池水之末を築
止メ水を湛え館之北門より忍路を作り晝夜水を取便オキとす用水又丹生井之水を汲事

を禁す是館中の水少故也雨水之内東方より僅築出したるハ水神を祭社ノ跡也館之内井戸數丈堀しかとも水少しなり龍澤の館未だ出來ざるに松岳山を繩ばりす正任后ニ松岳山ニ移リ跡ハ正任の臣葛井勤十郎龍澤に住す
 貞和二丙戌年藤名左衛門といふ御人京都より御下り被成候已後都殿様と唱申候由其子孫代々永祿年中迄相續永祿十年仁賀保と戰て敗北す
 永祿十年丁卯八月仁賀保大將加茂嘉茂惣數百人を引卒して桑野森を越馬立にて人馬を揃大はた小はたを立下遠見山の北峙に人馬を向しかとも難所にして越難し東に廻り上の水汲水戸ミツケミツウダ下の水汲水戸邊に陣張して汲水を止しかば龍澤の大將白旗外記葛井若狹淺井八九郎士卒を隨ひ切て出て仁賀保の備を切破仁賀保の大將加茂惣も陣を引ける龍澤の大將迺を追旗引澤にて合戰す白旗淺井兩人討死す葛井若狹死を極め加茂惣を追かけ小石澤にて戰ふ其時に双方手負大將加茂惣も此處にて死す
 館主五郎左衛門七十余才軍敗北之後黒川村館主伯父阿曾大學方へ遁去元龜元庚午年四月此處にて終り給ふと也其奥様ハ尼となり妙護院と號す吉出村ニ庵を立て此處にて終り岡九右衛門妙護院ニ隨身して剃髮し一鎮と號す
 藤名五郎左衛門七十余才 若殿ハ若死
 孫寅松七才妙護院にて養育し妙護院終らせ給ふ後此家の寄子となり成人して此家の聲となり藤名の姓を隠して佐藤兵部と改め又龍澤境内社地に改と云々

館主合戰敗北後七十余才よて伯父阿曾大學所ニ引越其子若死其子七才妙護院よて養育し後此家の聲とあり童名寅松後此家を繼天池の姓を藤名といふ其後亦姓を隠し佐藤兵部といふ夫々代々兵部といへり其子孫肥後大夫々々々の後亦兵部といふ其子玉伊大夫其子の三男專養大夫也

此社家昔ハ天池に住居して天池を苗字にしたりとなり

專養大夫慶長十七壬子年十八才最上山形え登り少將出羽守義光公より御寄附御黒印

表頂戴仕候

龍澤之諸侍永祿十丁卯年浪人して渡世あくして大旗澤小旗澤金澤の邊へうり家を作り澤々の水を用田地を興し佃を興し家業をして所々におれり山門長左衛門あとといふ浪人も山門邊の田畑を開くあり金澤權八加賀國浪人にて後に藤名の家に奉公して永祿十一年亦々浪人して金澤民部といふ此人心あし澤の水をたより其邊にかり屋を作り用水を上ケ新田を切開とみふ此所に屋敷跡田畑の古荒用水上ケ口御坐候心あし澤を金澤民部水を上げしより金澤といふ山門長左衛門弓の上手よて後に菅野館ニかけ込忰ハ百姓とあり此子孫久敷ありしと也後又立歸り山門長藏といへり百姓とある大久保下總ハ軍敗北之後剃髮して雲見とある子孫後百姓とあり代々上總といふ

今の山ノ田の笹佛是あり雲見といふ梵字あるとかや今ノ寺屋敷開くありと云々

昔し大久保下總今久保といふ所に住居せとかや其時の氏神若宮八幡とて今ニ其所に残れり岡九右衛門ハ今岡といふ所に昔し住居せとかや葛井若狭ハ今葛井小路といふ所に昔住居せとかや白旗外記ハ□□□東に住居せと云々五月八日流鏑馬神事あり永祿十年丁卯八月亂に絶えたり其時の的ありとて二ツあり五本骨の扇の的に模様あり馬ハ白旗氏ハこれを出せ馬場ハ高屋邊ハ百間余の所小石よて築堅メたる所猶殘れり元龜元年庚午夏遊佐郡仁賀保ハ女取山越よて參り候事其大將石橋大學と申者古今ぶさうの大力あり此時金澤權八大學を追かけ下取上ケ澤邊よてにちひくみ合もみゆふ所に跡ハ金澤村者共追かけ大學を生とり石ごつめよして末世の印にとて高石冢をつきをくどあり其後度々夜盜あり天正十六年子三月十八日仁賀保仙北ハ夜盜者共五六十人余參り候テ働キ程の者打殘者をバ繩にさし諸道具を取罷歸候処下野澤村菅原氏金澤氏山門氏の者共五六人よて追かけ申候へバ近郷の肝煎百姓追々助合桑の森まで拾壹貳度切結五六人討止め申候

参照

(下野澤菅原家文書)

上永龜三年かのとノ午年五月十日ニ仙北ハ夜盜八十人余打こへ下野澤村ハ三里

ほと山の方に大畑村と申在所ニ家數十五間御座候處よろしく罷在候處ニようちに仕男之分ハ皆々うたれ女共子共の分一々召連山へのほり申候時分拙者おや、おや○祖先に菅原左馬助同親類共をめしつれおつかけ彼山の内ニから澤と申川上御座候此所ニ而彼者ともおつつめ達而はたらき申處ニ鳥海山の御守にて御座候哉左馬助よたう共不殘打ころし申候就天其以來左様成儀無御座候いまに波川前ニされほね共數多御座候以上

未ノ五月十二日

菅原次右衛門

○右ハ元祿四年巡見使下向ノ爲メ有司ニ差出セシモノナリ

廣野新田 一二山新田ト云フ往古大畑小畑ニ民居アリシト云フモ何人ノ開發ナルヲ詳カニセス茲ニ下野澤村ニ左平次ナルモノアリ廣野開墾ヲ企テ貞享二年春ヨリ着手シ翌三月ニ及ヒ高六石余ノ新田ヲ得、民家八戸ヲ見ルニ至レリ實ニ是レ佐平次新田ノ創始ナリ爾後年々作毛熟ラス住民生計ヲ爲シ能ハス漸次退轉シ田畝荒廢ニ屬セシヲ以テ六石余ノ高數ハ更ニ下野澤附近ニ替地ヲ命セラル同村高ノ内所謂佐平次新田拾壹石余ハ即チ其處ナリ

(上野澤村舊社家佐藤氏書留) 大畑小畑村共其處上野澤下野澤山さかいニ有て先年右大畑小畑ニ田畑切開家も立さかり候事と相知れ近年大畑小畑之地よりまんぐわ

のこなご堀出し候事有然處貞享年中ニ下野澤山新田と申處切開殊の外さかり申候へとも其後悪作ニ及び新田あれ申候而近年ハ屋敷田形計相見へ候右下野澤山新田ハ左平次新田とも申下野澤村百姓左平次と申人見立切開申候

既ニシテ寶曆七年ニ至リ鶴岡ノ人村上文七郎稟請シ左平次新田ノ荒地及ヒ附近ノ土宜ヲ相シ開發ヲ計畫シ同八年先ツ柚取小屋ヲ設ケ平田中野侯喜右衛門海ケ澤村專五郎ノ二人ヲ召致シ之レニ住セシメ同九年春民戸ノ移住スルモノ十三、著々開發植付ニ從事セシガ是レヨリ先キ文七郎ノ企業スルヤ山子水ヤマコミツシタ下百姓ノ利害ヲ異ニスルモノ不服ヲ唱へ終ニ五十二ヶ村連署シテ大庄屋ニ陳情スル所アリ

(佐平次新田切開書) 遊佐郷下野澤村廣野之内左平次新田開發之始者貞享二年丑之春寅ノ閏三月迄家數八軒出申候夫々段々さかり申候處度々不作仕十四年目不殘にげ申候

然處又寶曆七丑年村上文七郎殿と申人御下右左平次新田御見立被成寶曆八寅秋小屋一軒相立申候其節ほうげ五十本ハ御手傳仕候此小屋ハ山取共を被遣置候積にて御座候而御立被成候

一上野澤村松御林之内一ノ坂之下道の南の方松之木并下シタ山道之下にて木數八百本余文七郎殿へ被仰付被下置候是ハ右小屋材木ニ御願被申候と承申候

一右寶曆八年の參候小屋守者

平田郷中野侯村喜右衛門同郷海ケ澤村專五郎此兩人にて御座候

一寶曆九年卯之春引越被申候人々之覺

遊佐郷外野村丹右衛門此人ハ湯殿山注連寺
たやにて御座候同郷平津村三郎兵衛同郷村儀兵衛同郷鷺野

町村喜兵衛同郷宮田村利吉同郷上野澤村左吉平田郷遠戸村源七同郷郡山村半七

同郷村甚四郎松山領もち山村惣十郎川南猪子村權十郎肝煎相
勤申候同村太郎左衛門平田

郷中侯村いしや宗齋寶曆九年の春引越自分ニ田畑おこし心
見候處いか、相心得候や其秋にげ申候

一田畑ハ寶曆九年卯之春おこし始申候

乍恐以書付奉願候

今度吉出山野澤山廣野之内新田開發被仰付又者漆楮之木御植付地形支配之村々御百姓之御救助被成置候様御取計可被下之旨村上文七郎殿被仰聞候故前々新田願申立候者共之趣意とは格別之事故幾重にも相談仕可申上旨被仰渡委細奉得其意山子村々度々相寄沙汰仕候地元之村々御救開發植付等可被成下との御事一統難有仕合奉存候へ共右廣野之儀者古來ハ數十ヶ村之肥草馬草葉薪物刈場ニ御座候得者新田開發仕候而者山子村々甚難儀仕候事ニ御座候其上開發場處え澤水懸り用水ニ相用候儀御座候へ共古田用水之指障相成申事故何れも新田開發と申も山子水下數十ヶ村之難澁之筋ニ御座候間御免被成下置度奉存候乍去下野澤山之内左平次新田七十四

年以前開發被仰付六石三斗余之御高敷相成十三ヶ年之間植付見申候へ共作毛年毎ニ不熟仕十四年目を植付兼申候其以後奉願下當村雜木御林地形之内地替被仰付被下置候右左平次新田跡之内少々も切興し御心見等被成下候事ハ格別之御儀奉存候へ共是以古來相用申候ひのた澤水山新田へ取上申候儀ニ而此澤水用申儀者難相成候尤たり舟と申少々之澤水御座候へハ廿枚歟卅枚歟之御田地面へ相用候様成事ハ罷成可申候右地形之内御心見之儀者強而指障も申上間敷候且又漆楮御植付可被成場處ハ谷合窪地等間々可有之候哉與奉存候彌々御植付被仰付地元之村々之御救ニ被成下候儀之事御座候得者場處之義者委相定追而可申上候困窮爲御救厚御沙汰之趣文七郎殿茂直ニ被仰聞別而難有仕合ニ奉存候右申上候通ニ御座候間宜様ニ被仰上被下置度奉存候爲其山子水下之村々連判以書付申上候以上

寶曆八年寅

五十二ヶ村肝煎百姓連判

石山平内殿

阿部源五兵衛殿

爾後百姓動搖シ大組頭肝煎等爲メニ奔走シ寶曆十年二月文七郎村役人ト共ニ開發植付場所ヲ實檢シ境界ノ標識ヲ立テラレタリ

(同上) 寶曆十年辰之二月三日文七郎殿鶴ヶ岡を御下リ三日之晚中吉出村大組頭佐々木惣四郎殿へ御泊リ四日之晚左平次新田權四郎所御泊リ五日之晚同斷

右四日ニハ吉出を御立直ニ廣野へ御出處々御覽被成候上野澤村も爲御案内肝煎伊三郎長人百姓仁兵衛罷出候五日ニハ植付場處御覽根小屋澤をおはた澤まで楮御植付場處御見立夫を立石ニ而一場處御見立被成則境御立被成候同六日立石ニ而居屋敷御見立さかい御立被成候夫を直ニ御歸被成候伊三郎一人御先立

一吉出山エも六日ニ野澤山を直ニ御出被成候吉出出へハ十日町肝煎喜會兵衛吉出大組頭惣四郎殿長人百姓深山坂之邊罷出候然處村上文七郎殿上野澤を直にかくれ瀧之當りへ御出被成惣四郎殿へ人を以被仰候ハとかく此方々相究植付場處境立テ申由被申越候處惣四郎殿御あひさつには其方へ罷越候義難成趣使ニ御返事被成候と承り然處ニ伊三郎と參候へハ右之趣被申候故以之外なるあいさつに御座候一夫を段々植付場處御覽被成候處かあひらあかれへ御出被成候此場處可然由兼而惣四郎殿へ申合置候故境相立可申趣村上文七郎殿被仰候得者惣四郎殿挨拶ニハ是ハ拙者心得違ニ御座候此場處者草がい第一之場處ニ御座候故替地を以相渡可申候とて埒もなき所へ御先立申候處惡しとて御請取不被成候殊ニふとごころの内なご申所者植付ニ宜敷場處なご、申上候故中吉出村長人百姓八右衛門伴傳三郎御先立仕夫をふとごころの内へ御出御覽被成候處岩原ニ而中々植付難成所ニ御座候其内少し能處御座候故此場處ハいか、と被仰候へば傳三郎申候ニハこれハそりおとし道にて御座候故植付難成場處と申上候由文七郎殿被仰候ハとかく御郡奉行御下リ之

節右場處聞違之趣可申上候と被仰夫々御歸被成候

右植付場處境ハ廣野繪圖御持參被成候夫々印を申付被成候

一下野澤村山上野澤村山さかいハたはた澤をいたし申候

一吉出村上野澤村山との境ハ深澤と申上候昔々如是境立來候趣申上候へバ則右之繪圖ニ御印付被成候

一御植付之場所上野澤廣野之内ニ而六十間四方之處廿五ヶ處境御立被成候積ニ

御座候處ねこや澤とたはた澤との間遙ニ廣御座候故此處ニ立石之處ニ而壹ヶ

處合而二ヶ處御境御立廿五ヶ處之積ニ御取被成候

同年三月文七郎村役人百姓ト立會ノ上再ヒ實地ヲ踏查シ更ニ區域ヲ改メラレシ

モ百姓等尙不服ヲ唱へテ止マズ大庄屋大組頭其覺書ヲ携へ出鶴シ事情ヲ開陳シ

有志爲メニ調停セラレシモ亦要領ヲ得サリキ

(同上) 寶曆十年庚辰三月廿日晝夜大庄屋阿部源五兵衛石山平内殿御兩人ハ肝煎伊

三郎所へ御詰被成候植付御役人村上文七郎殿善九郎所へ御詰被成候

大與頭鹿野澤村利助中吉出村惣四郎平津村與七郎宮内村源八大井村傳次郎北目村

長右衛門八十郎所宿其外五十二ヶ村之肝煎長人百姓吉十郎仁兵衛方へ詰られ候

一廿一日廣野御見分有之候十七ヶ村之御百姓共諸役人共不殘相詰申候御百姓共悉

惡口仕候由承候

一廿二日植付場處境相立申候其節ハ大庄屋石山平内殿大與組惣四郎肝煎伊三郎上

野澤御百姓不殘罷出申候文七郎殿御出被成候則立石澤之内巾五十間長六十間之

場處境相立御渡申候文七郎殿ハ廿二日八ッ時ハ山ハ直ニ御歸被成候

一大庄屋衆ハ廿三日御歸リ被成候翌廿四日石山平内殿惣四郎利助覺書を以鶴ヶ岡

え御登被成候廿九日酒田迄御下リ被成候覺書左ニ寫置申候

覺

廣野之内漆楮植付可被仰付趣兼而一通奉承知候此度植付場御極可被成候ニ付山

子村々之者共罷出境等相立候様被仰付候故惣山子役人御百姓共罷出見分仕候處

甚差障之場處又ハ間違之義共御座候ニ付段々申上候次第左之通ニ御座候

吉出村山之内かなひらと申場處山子村々之内少々存念も御座候へ共彼是沙汰仕

彌々植付場相對仕候乍去家居等ハ不仕尤楮斗植候而漆者植不申候筈ニ仕候

一かくれ瀧之下并經冢下此兩所之義ハ全吉出山子村々專一之草苅場ニ御座候へ共

少々之植付等被仰付候而も數十ヶ村之山子村村必死與迷惑仕候植付場ニ仕候義

會以難相成奉存候様々被仰聞候へとも御百姓一圓得心不仕候ニ付其旨申上候

一上野澤村新松御林外レ窪地五六十間程之處兼而植付場ニ相對仕置候處山居住之

者共間違候哉其場處へハ植付不申夫々余ほど相隔南之方手前へ場廣ニ植付仕其

上家も壹軒其所へ作申候此義以之外間違差當リ上野澤村中至而難儀仕山子村々

共迷惑仕候ニ付其段一同に申上彌右家植付共ニ御林外ニ窪地へ相對之場所へ御引取せ被下候筈仕境も相立申候

一ねこや澤植付場之義澤くぼち之内斗植付被仰付候様去々年中相對申上候處是又山住居之者共心得違候哉右澤之北上前草苧專一之處へ畑を起し植付仕家も四軒作申候甚以山子村者共一同迷惑仕候ニ付其段申上候彌々澤窪地へ之所へ植付家共ニ引取せ候様被仰付被下度麥當一作者格別苧取候跡前々之通草苧場ニ可仕旨申上候

一左平次新田跡切起ニ付住居小家之義者右新田跡地形之内ハ格別外之地形へ小屋等御座候而者以之外下野澤山子山々迷惑仕候ニ付大石澤々西北之方地形ニ御座候小屋三軒麥苧取候時節迄に御引取せ被仰下置度旨申上候其上大石澤々西北之方草苧場へ當春中心得違以之外植付等仕候是又早速相止植替候様ニ可被仰付之旨申上候

右之通御座候間此上山子村々御百姓共難澁不仕候様ニ被成下度奉存候爲其惣山子村々連判以覺書申上候以上

寶曆十年辰十月

石山阿部宛

五十二ヶ連判

右之覺書廿四日鶴岡へ登著之足ニ而直ニ御代官所へ差上候處御代官所山中彌右衛門石井新三郎御郡

奉行所山中權之助御思召ニハ文七郎をひしと潰すことも難有成勿論百姓共も及難儀候事ハ難成筋ニ相聞候故廣野と申ハ廣漠之原と相聞申候故窪地何かの場處見立少々も爲植候様ニ可申候由勿論家もほこさせ候事はいか敷候故とかく居屋敷ハくれ候て重て植不申候様ニ境相立置候趣御百姓共へ得と相吞込候様ニ申聞候様御三人様被仰付則三月廿九日酒田迄御歸リ四月二日ニ御歸四日ニ山子村々肝煎長人百姓御召呼被成平内殿宅ニ而右之趣被仰聞候處御百姓一圓承知不仕罷歸候

寶曆十年辰三月がつから石へ家壹軒作候處同月立石澤之内替地相渡同五月家とりほごし立石澤へ作せ申候勿論がつから石へ楮漆植付候處これもこがせ立石澤へうへさせ申候
斯クテ同年八月十三日文七郎植付場ニ來り山子百姓ト種々交渉ノ結果字ねこや澤かなひら澤ひるけ淵がらいらいしノ四ヶ處ヲ以テ植付區域ト定メ十一月ニ至リ双方ニ裏書繪圖面ヲ交付シ以テ他日ノ左券タラシム是ニ至テ年來ノ葛籐初メテ解ケタリト雖氏文七郎ガ豫定ノ區域ハ多ク變更セラレタリ

〔同上〕寶曆十年辰十月十一日村上丈七郎殿御下リ伊三郎所へ御泊リ同十三日植付場所境目御極メ被成候上野澤山ねこや澤長二百間巾三十五間吉出山かなひら六百間下野澤山ひかけふちおき上ヶひら共右之場所差上申候云々

遊佐郷廣野之内別紙繪圖之通植付場御用地四ヶ所差止申所相違無御座候依之山
御年貢之内御引可被下旨被仰渡難有仕合奉存候併寸志ニ指上候地形之義ニ御座
候間御年貢御引被下置候ニ及不申候前々之通上納可仕候以上

寶曆十年辰

實曆十辰年廣野圖御裏書寫

定

一左平次新田跡開發之場處上者ひの澤用水上ケ口下ハ西北大石澤限リ東ハ大は
た澤境ニ相究右境之外ハ田畑ひらき申間敷候事

一右開墾場并植付場之内ニ有之奥山道惣通ひ道共幅三間ツ、相極兩脇ニ小せき相
立道筋ニ水押流不申様ニいたし馬除等迄文七郎方ニ而可被申付候事

一用水之義ハ先達而相對之上未書を以相談置候證文之通末々違亂仕間敷候事

一廣野之内植付場四ヶ所境之外ハ壹本たりとも諸木植ひろけ申間敷候右四ヶ所之
内金平之外三ヶ所ハ壹ヶ所ニ小屋壹軒ツ、相建其余之家居ハ佐平次新田地形之
内ニ相立住居爲致可申候且又金平長根ハ楮ハ格別漆ハ植付不申等之事

一境家之内ニ有之植木勿論作物等迄少茂障リ申間敷候事

一右新田并植付地形之分草刈場不足ニ相成候ニ付山御年貢御引可被下旨申渡候ハ

共困究御救新田之義植付場ハ寸志指上之事故御引被下候ニハ及不申旨山子村々
ハ申出候ニ付御引不被下候間前々之通山御年貢上納可致候事

右者遊佐郷廣野之内左平次新田跡開發之場處今度村上文七郎ニ山子ハ相渡植付御
用地四ヶ所者山子ハ指上候是又文七郎ニ相渡候ニ付大庄屋御郡手代山子村々役人
共立會境相立表繪圖面裏書定ケ條相載双方相渡置候條此末違亂有之間敷候仍如件

寶曆十年辰月日
御郡奉行
御代官

實曆十一年己三月十六日植付場四ヶ所坪勘定覺書之寫

一四千二百十七坪 日かけ淵 一七千八百廿九坪 子小屋澤

一四千四百廿坪 がら石澤 一壹萬三百廿坪 金坪長根

一貳萬六千七百八十六坪

四年間苦心經營ノ事業モ之レガ爲メニ頓挫シ成績良カラズ當初十三ノ民戸ヲ有
セシモ漸次減少シ明和六年ノ比ハ纔ニ二三戸ノミナリシト云フ爾後荒廢シ終ニ
亡所トナリヌ

(明和六年川北繪圖貼紙) 此佐平次新田先年六石余ノ御高式開發被仰付其砌村立御
百姓家數も六七軒御座候處作毛年々不熟ニ付住居成兼不殘引退キ申候右六石余ノ

高下野澤村近所ニ替地御竿入被仰付候故其以後村立無御座候近年村上文七・右佐平次新田跡申立少々御田地切開申候間二三軒家數相見申候へとも指而村立と申程之義ハ無御座候依之附紙仕御斷申上候

寛政十二年御郡代白井矢大夫上野新田開發ノ際廣野新田ヲモ再興セラレシ事普ク知ル所ニシテ白井氏ノ功勞ハ人口ニ嘖々タルモ左平次文七郎ノ事跡ハ寂々聞ユルナシ故ニ之レニ係ル經歷ヲ叙シ以テ之レヲ表出ス

上野新田 一ニ白井新田トモ云フ寛政十二年御郡代白井矢大夫ノ創意開發セシムル所ニシテ享和二年上野新田ト命名セララル

(遊佐郷村々御舊記調書上帳) 上野新田村開發之儀ハ白井矢大夫殿御發端ニ而大庄屋今野喜七エ掛被仰付寛政十二申年御目立地ニ罷成善三郎與申者自分物入を以同年之内右地エ引越歛頭ニ被仰付右新田草肥を以仕付試作仕候様被仰付同年直ニ試候處地柄惡敷稻尺短く實のり兼候体ニ付別段御評議之上指肥作被仰付候處至而相應之作ニ而夫々追々盛に相成享和二成年村銘被仰付候上地元村々與地境之義も地元三分新田方七分之割合を以分檢惣繪圖御渡ニ相成申候

藤井新田 開發上野新田ニ同ジ然レ成績良カラズ文化三年マテ成功セサリシガ同年平田郷古荒新田ノ藤井伊兵衛ナルモノ之レヲ引請ケ私資ヲ以テ從事セシモ亦

成ラスシテ止ム是ニ於テ下當村肝煎菅原伊七ヲシテ之ヲ繼續セシメシニ措置宜キヲ得成功スルニ至レリ乃チ藤井ノ粉骨ヲ追欽シ藤井新田ト命名セラレタリ

(同上) 藤井新田村開發之義ハ上野新田同様相始候へ共文化三寅年迄成就ニ至兼同年平田郷古荒新田村藤井伊兵衛與申者右田地を申請自分物入を以御田地開發ニ取掛候得共熟田ニ相成兼其後右之地エ米千俵相添差上地ニいたし右地をはなれ候ハ下當村肝煎伊七エ被仰付大庄屋今野喜七エ小野伊助掛被仰付御仕入行届熟田ニ相成其後村名被仰付候節ハ藤井伊兵衛粉骨を盡し候所縁を以則藤井新田與村銘被仰付

藤井新田ノ開發成功ハ藤井伊兵衛氏ノ盡力右ニテ明カナレド尙梵照等ノ住僧魯道ノ撰セシ碑文アリ左ニ掲ゲン以テ其概要ヲ知ルベシ但シ撰文ハ故アリテ今ニ石ニ刻セズト云フ

藤井新田屬羽州飽海郡遊佐郷其地嘗爲荆棘草莽之野焉平田郷富豪藤井知足通稱伊兵衛者爲人惠而有膽略相此地宜懇關私有開田利民之志文化三年丙寅歲屢請政府遂得允焉於是大捐家貲勉從事既三年而不成功蓋以地瀕海趾嶽屢有颶風澗水之害也知足戚然歎慨然奮曰業已創損己利人之事豈可中道而輟哉乃更出米千石以給其用或穿巖石以通溝洫或成九曲以緩澗水之冷又買近林雜薪之地悉剷除之更栽杉松萬餘株

以禦颶風之暴苦辛尤勗矣府感其精勵欲令濟其志廼命黨正今野喜七齋藤隼之介及縣令下吏某々前後相代監督之皆示有勤勞矣文化十四年始竣事得田若干頃府乃定租六百步而僅二斗八升民大利之徙居耕者二十餘家籍爲一村落難有群吏監督之力創闢之績職知足之由因名藤井新田邨云今也民宇簇々田疇井々吁嗟物換星移知足及其子子寬亦逝矣其孫惟篤恐歷世之久祖德之湮村民亦欲建石勤其偉績以永無忘惠澤乃相謀乞銘於余余與惟篤父子寬有舊不可以辭序其槩而銘之銘曰

北山之陽藪澤荒茫與通溝洫大闢田疆群氓來邑勗斯耕桑森々松杉或々稻梁嗟哉永世誰貽斯祥藤叟假載利澤浩洋天嘉其績報以餘慶藤田年熟藤氏日昌

豈天保十年己亥仲秋穀旦

沙門魯道撰並書篆
藤井惟篤及村民等建之

蕨岡村

豐岡石辻三川上下大内目水上

上蕨岡杉澤大蕨岡大淵

鹿野澤鹿野澤天神新田

平津小田原内

上下小松

上下長橋ヲ管ス

石

辻 四ツ興屋船橋ノ小字アリ明曆二年ノ現高三百八十五石七斗壹合八夕與

頭奥目壹石貳斗九升八合同年檢毛帳後チ本高三百六十三石四斗貳升三合七夕免六ツ三分貳厘同新

田貳石四斗九升七合貳夕免四ツ三分組頭奥目三石貳斗八升四合免貳ツ七分トナレリ

阿部氏 舊石辻組高六千九百七十六石八斗貳升余ノ大庄屋ニシテ本ト石辻組ノ

大組頭タリ是レヨリ先キ承應元年遊佐郷大肝煎高橋兵右衛門事ニ坐シ退職セシ

メラレシヨリ郷内ノ大組頭三人ツ、遞番ニ大肝煎代トシテ之レヲ支配セシメラ

レシガ寛文五年ニ至リ石辻村大組頭阿部彌七郎江地村大組頭石山治郎左衛門ト

共ニ大肝煎ニ召出サル即チ遊佐ニ二人ノ大肝煎ヲ置カレシ始メナリ事南遊佐村高橋氏ノ下ニ詳カナリ

彌七郎給米貳拾五表ヲ賜ハリ寛文九年病死嫡子五兵衛繼キ天和三年病死子彌五

右衛門相續シ寶永三年五十石ヲ賜ハル享保十九年病死嫡子傳太郎繼キ五兵衛ト

改メ後チ源五兵衛ト改ム天明四年病死嫡子源五兵衛相續寛政五年休役ヲ命セラ

レ嫡子善太夫ニ跡式ヲ賜ハリ下余目組ニ移サレ伊藤惠作之レニ代ル同九年善大

夫故組ニ復セラレ文化四年病死嫡子政吉繼キ同十三年御組外ニ移サル後チ當村ニ京歸住セリ

田組ノ齋藤金藏當組ニ命セラレ天保九年休役トナリ後チ宮ノ内組ニ命セラレ今野茂兵衛之レニ

代リ三川村ニ住シ當組ヲ支配セリ彌七郎以下コ、ニ至ルマテ御郡中大庄屋之記ニ據ル

八幡神社 石辻ノ松野窪ニアリ譽田別尊ヲ祭ル創祀沿革詳カナラス明治九年二月

廿四日郷社ニ列セラレ

三 川 すくみ三川、岡三川ノ小字アリ明曆二年ノ現高貳百四十三石壹斗三合貳

夕同年檢後チ二百五十九石六斗壹升四夕免六ツ武トナル歩七厘

今野氏 茂兵衛ノ祖ハ最上家ノ士ナリ主家改易ノ後チ庄内ニ來リ藤島村ニ住ス
後孫半七享保四年御郡代手代ヲ命セラル茂兵衛ハ實ニ其曾孫ナリ文化十二年御
組外トナリ天保九年石辻組大庄屋ニ召出サレ當村ニ住シ子孫相承ケ維新後ニ及

ヘリ御郡中大
庄屋之記

大内野目 上下アリ明曆二年檢毛帳ニ大内目ニ作ル朝日山城主池田氏ノ家傳ニ文
治元年平家ノ遺臣池田秀盛兄弟五人庄内ニ逃レ來リ一人ハ大内目ニ分居スト云
フモ之レニ係ル消息詳カナラズ明曆二年ノ現高上大内目ハ五百拾石五斗六升七
合四夕ニシテ下大内野目ハ四百貳石三斗壹升九合六夕ナリ同年檢後チ上大内野目
五百廿六石七斗三升八合四夕免五ツ武下大内野目四百貳石四斗八升八合壹夕免五ツ五
分七厘

同新田拾三石六斗九升九合免三ツ九
分四厘トナル

大 淵 明曆二年ノ現高二百四十九石貳斗貳升五合同年檢後チ二百四十五石三斗

六升九夕免五ツ
七厘トナル

蕨 岡 明曆二年檢毛帳ニ上寺トアリテ高百四十四石壹斗六升七合壹夕ト見え

後チ新田拾八石四斗五升三合ヲ加ヘ百六十二石六斗貳升壹夕トナレリ但本田ハ免六ツ
五分七厘ニシテ

新田ハ四ツ四
分四厘ナリ

大物忌神社蕨岡口之宮 字松岳山ノ頂ニアリ大物忌神ヲ祭ル當社ハ國幣中社大物
忌神社ノ口之宮タルヲ以テ由緒及ヒ建物寶物等ハ明細帳ノアルアリテ記シ得テ
詳カナリ宜ク本帳ニ就テ之レヲ見ルヘシ本誌ハ之レニ洩レタルモノ若クハ重要
ノ事歴ノミヲ掲載セリ讀者之レヲ諒セヨ

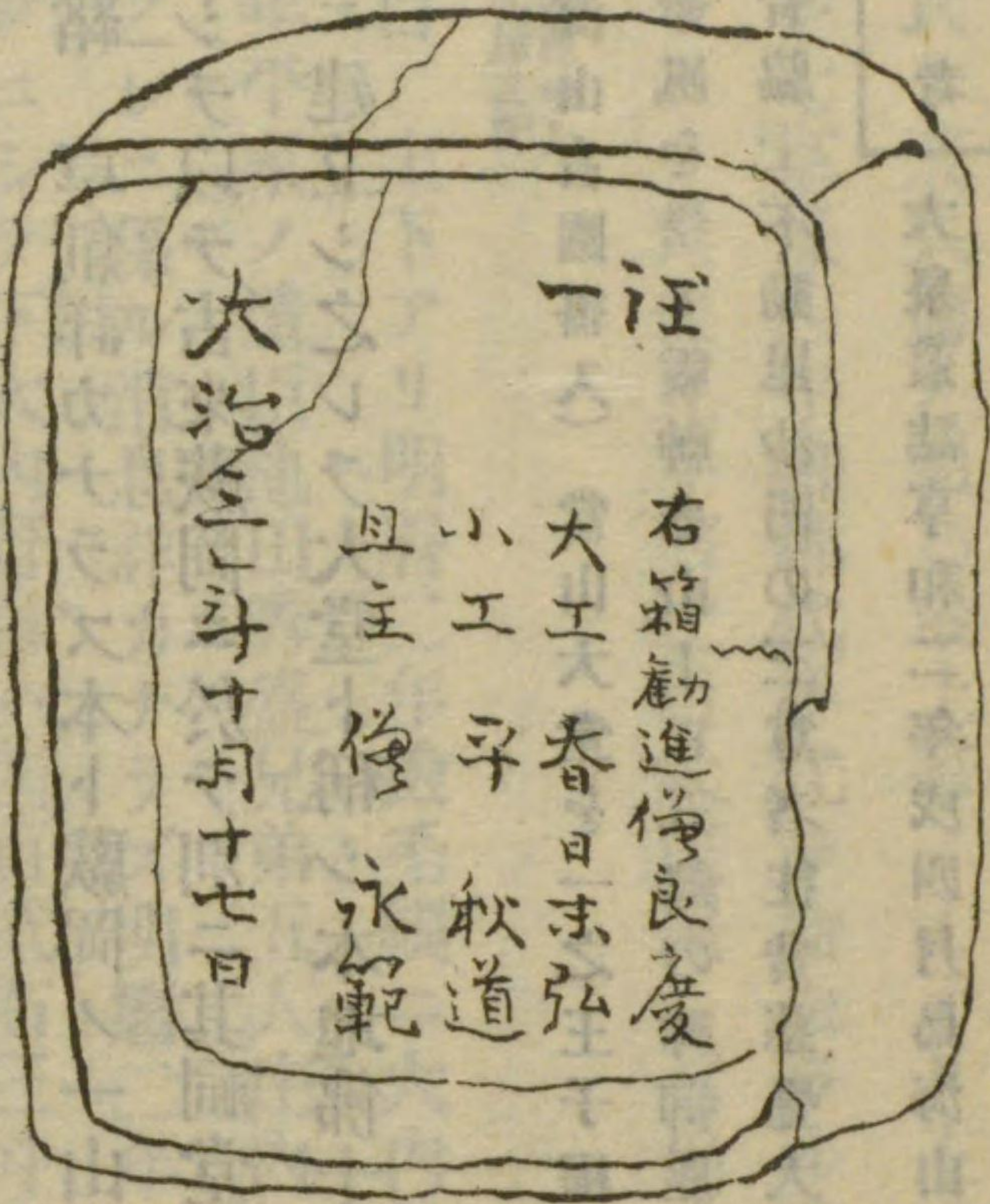
由 緒 草創詳カナラズ本ト蕨岡ノ一山ハ鳥海山大物忌神ノ本地佛藥師如來ニ
屬セシヲ以テ古來蕨岡ニ於テ別ニ其祠堂ヲ設ケズ鳥海山一之王子堂ヲ松岳山ノ
半腹ニ建立シ之レヲ大堂ト稱シ本地佛十一面觀音ヲ安置シ衆徒勤行ノ道場トナ
セリ

(鳥海山古圖書入) 當山大堂を一之王子權現堂と號し奉リ祭神ハ級長戸邊命級長津
彦命風を祭る靈神也山上に五穀の神御座ます故に風神を祭るの謂也御本地十一面
觀音脇士不動毘沙門の三尊者往昔慈覺大師の御自作にて御長五尺五寸の靈像也

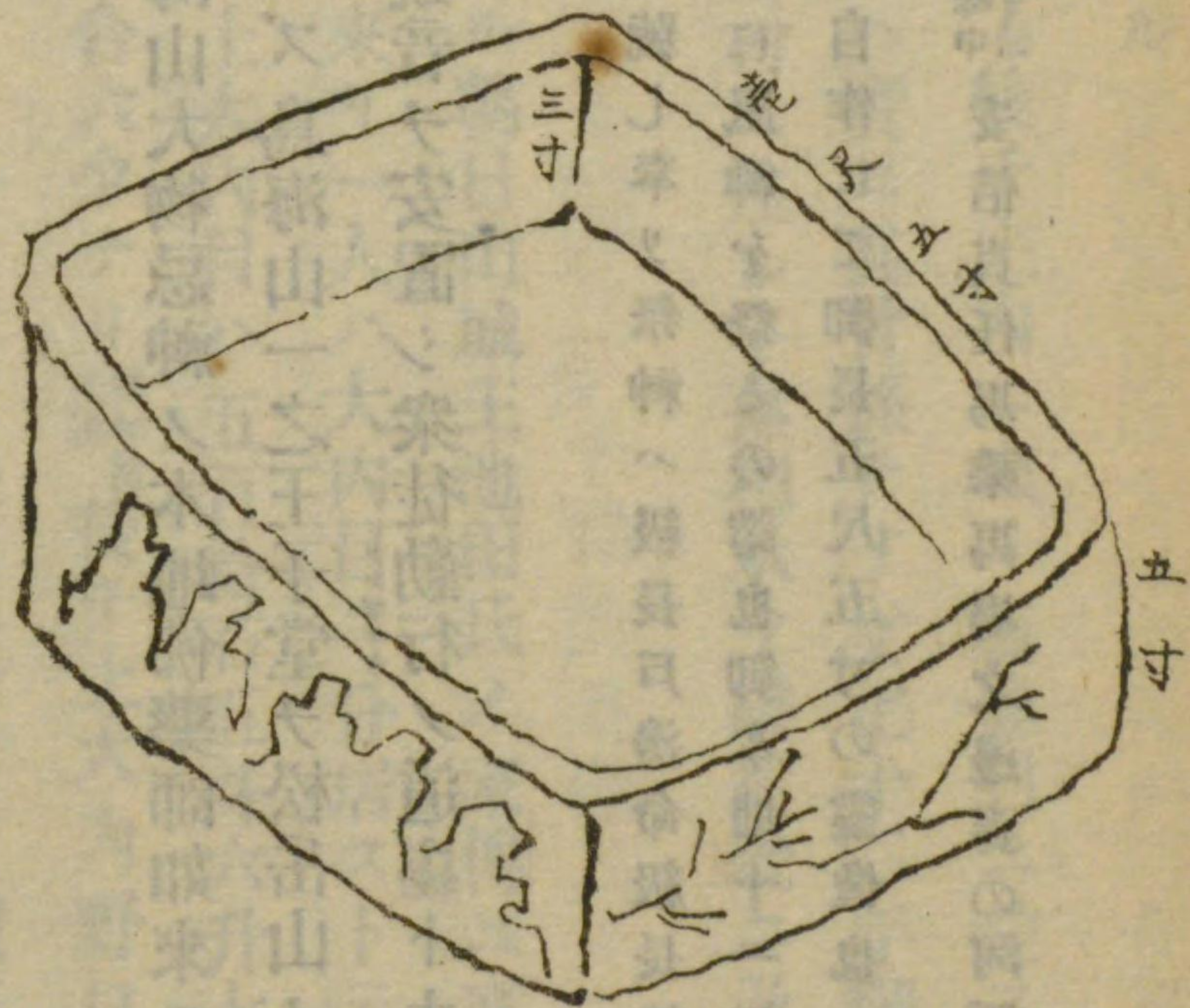
備考 大泉叢誌享和二年戊四月鳥海山中堂○峰中
堂ヲ云安倍貞任馬乘馬場之邊賽の河原

といふ所々山僧某夢の告ありて掘出す

石函

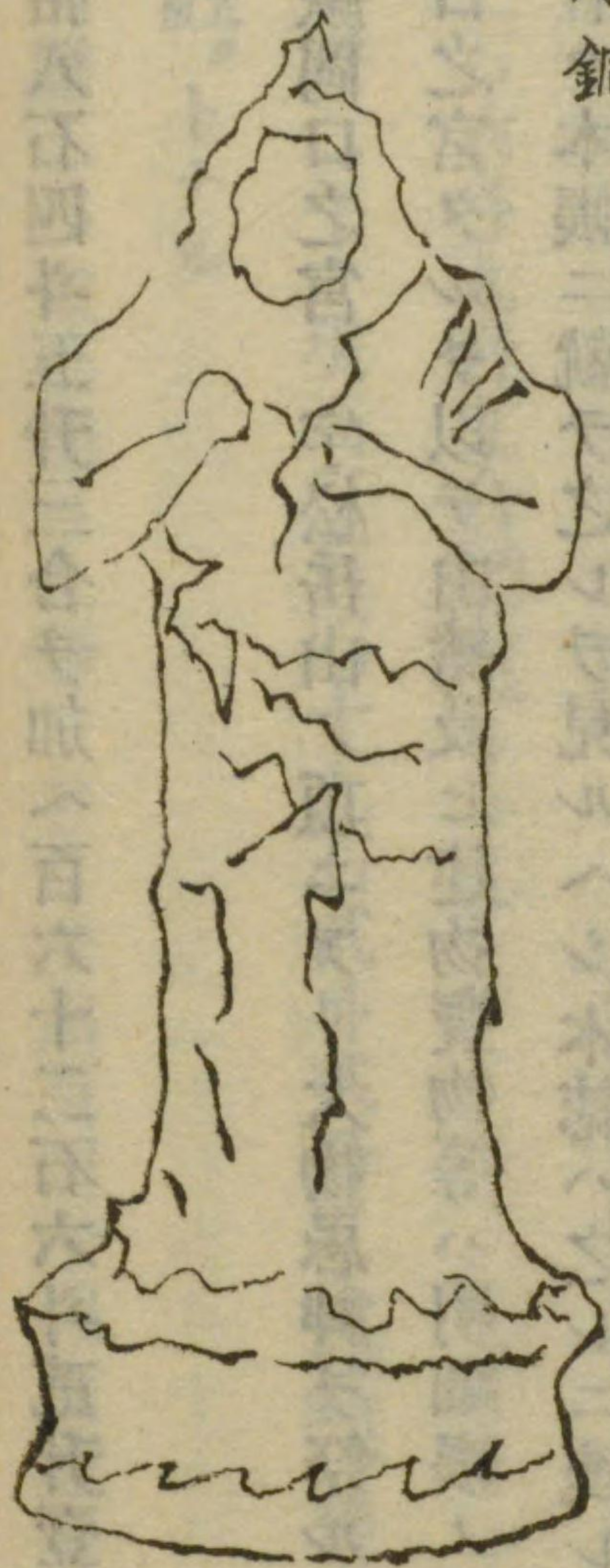


蓋銘 年号大治と天治と 相分不得



五寸

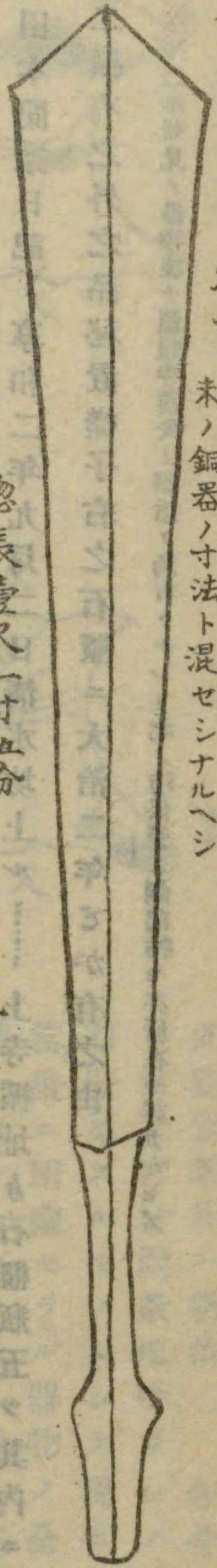
佛像銅



丈ヶ巻寸四分

イ二分

劔



九寸

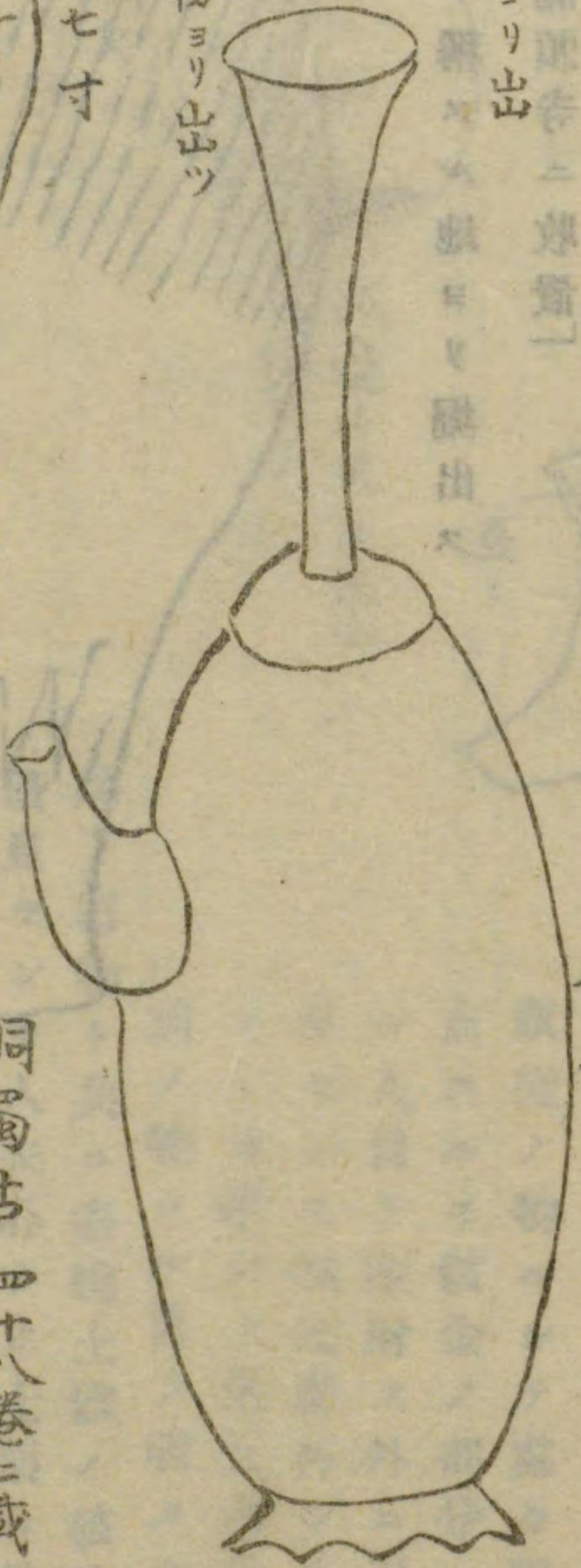
本各ノマ、此寸法何寸ノ、カ不相分 未ノ銅器ノ寸法ト混セシナルヘシ

惣長壹尺一寸五分

九寸

銅器

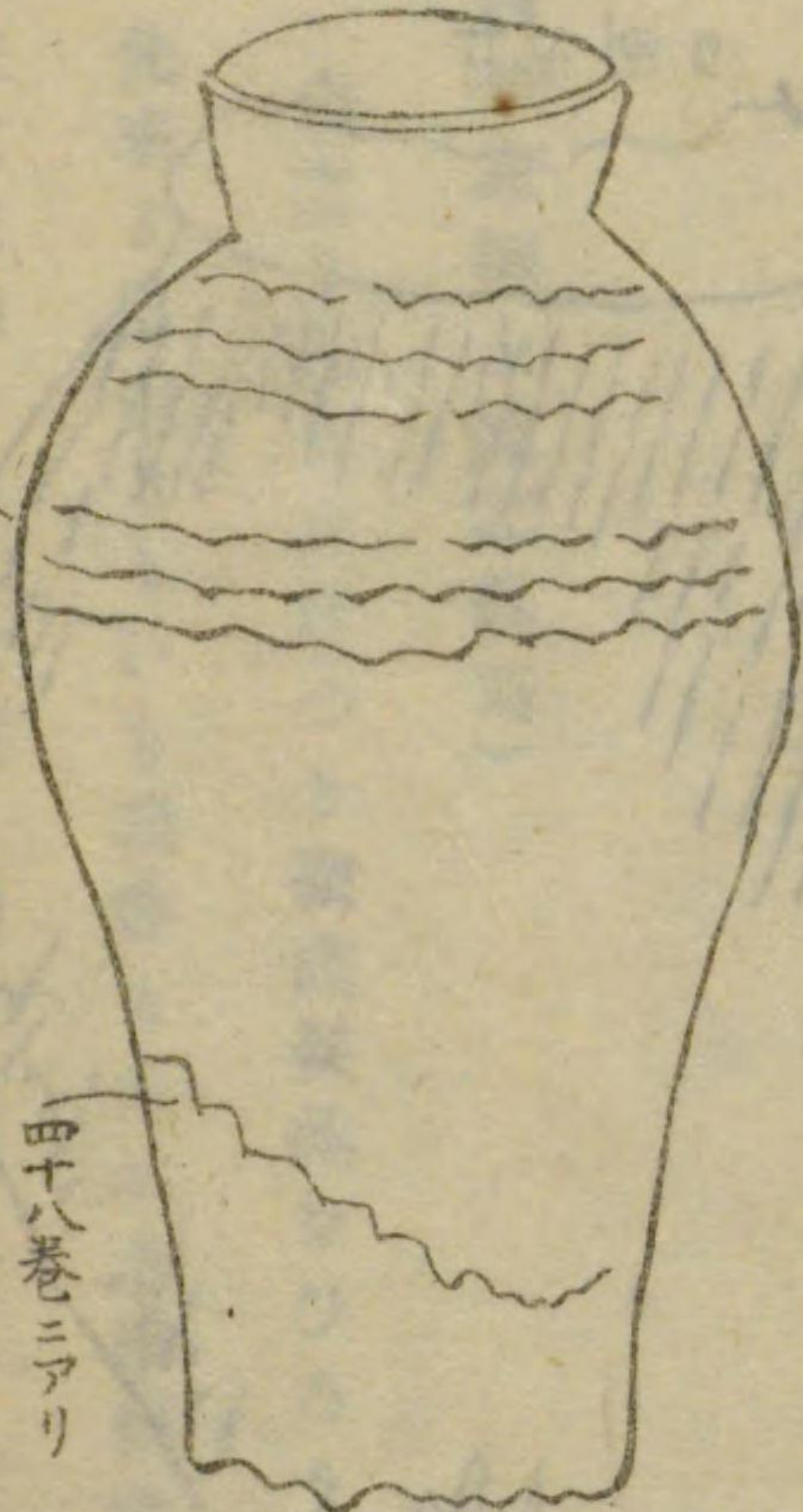
右石函の傍ヨリ出ツ



高七寸

銅獨鈷 四十八卷ニ載

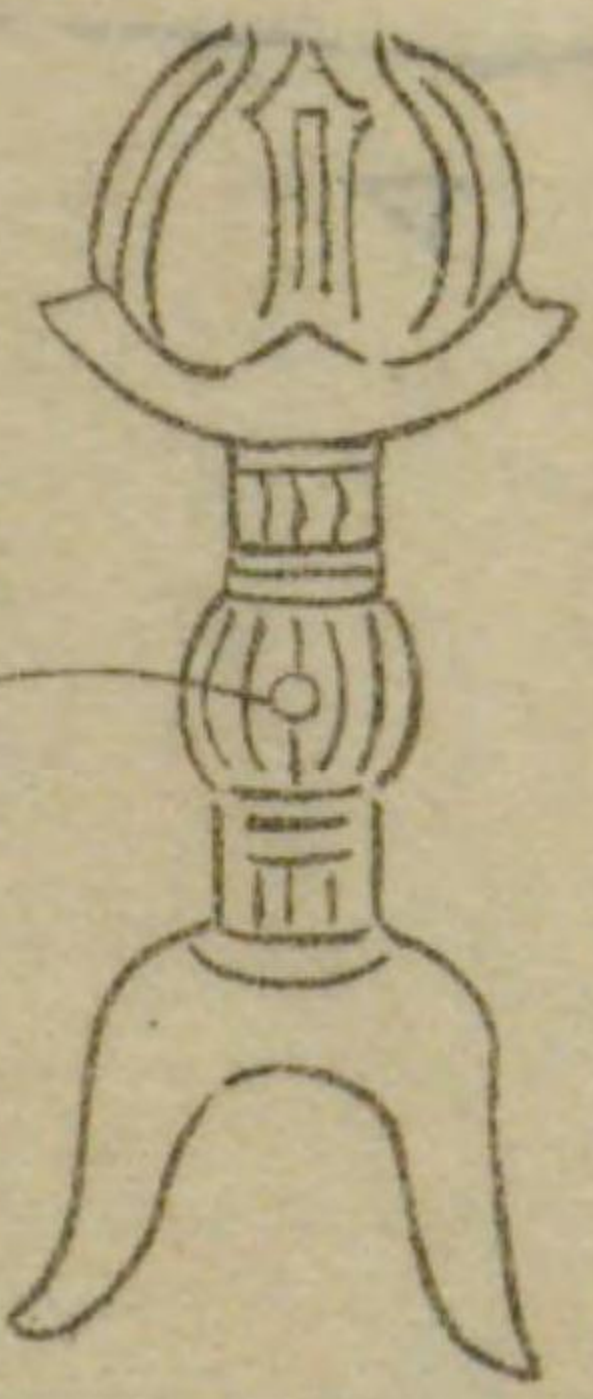
川中水女



川中水女

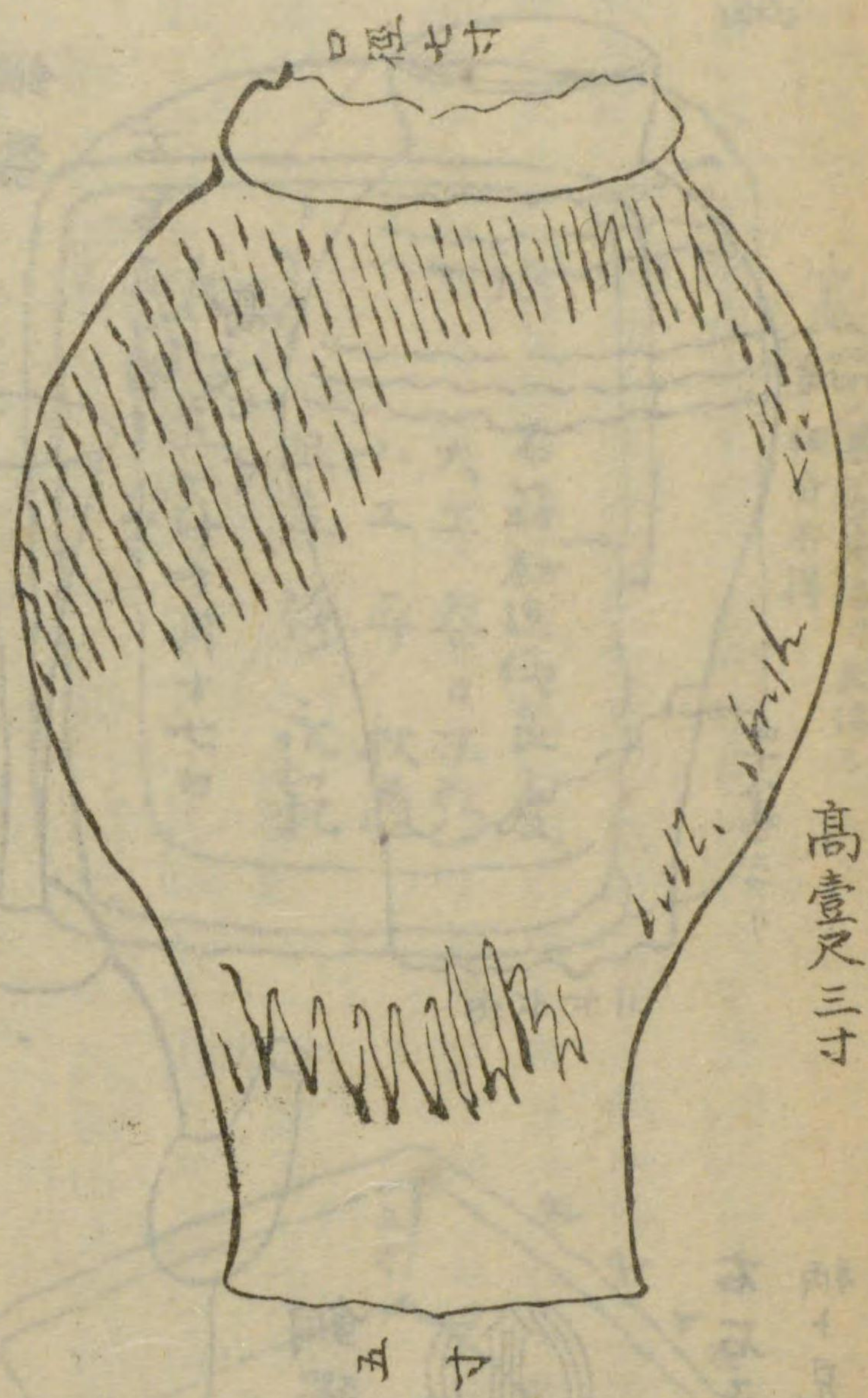
四十八卷ニ此模様ナシ

四十八卷ニアリ



目釘穴

右石函ノ中ヨリ出ル劔ノ 柄ト見エル物ナリ此之坊ニ収置



此二瓶石壘ト稱スル地ヨリ掘出ス

以上六種學頭龍頭寺ニ收置

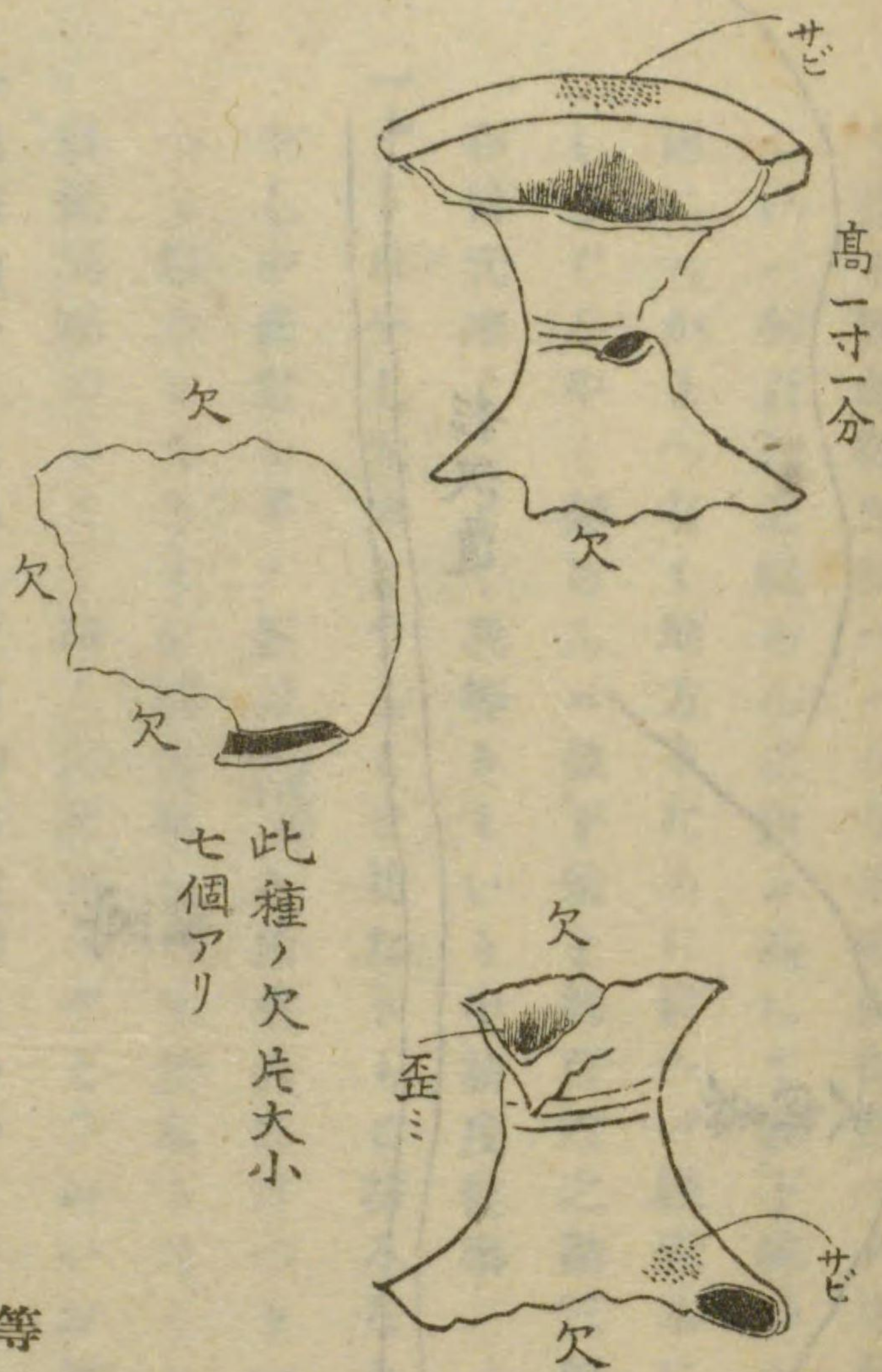
(酒田本間家日記)

享和二年九月二日清水坊上ル……上寺楯址石櫃瓶五ツ其内ニ

劍二振有之外之品秘置様子右之石櫃ニ大治二年とか有之由

○享和二年發見ノ器物後チ龍頭寺焼失ノ際悉ク烏有トナレリ北ノ坊保管ノ銅獨話モ亦所在ヲ詳カニセズ

(當社所藏銅器破片圖)



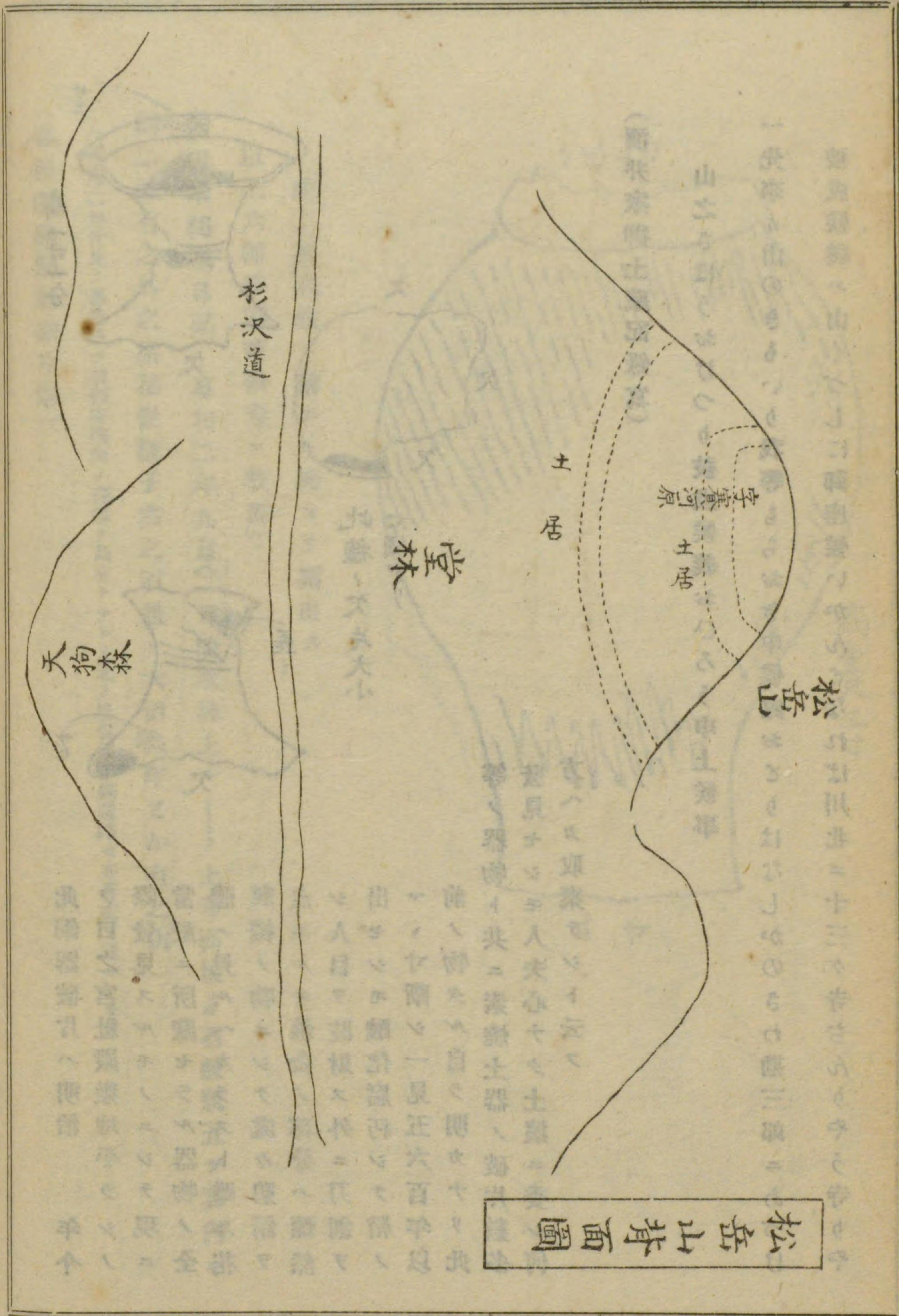
此種ノ欠片大小七個アリ

此銅器破片ハ明治 年今
ノ口之宮社殿敷地平ラシノ
際發見スルモノニシテ現ニ
當社ニ所藏セラル器物ノ全
體ハ見ルヘカラスト雖花
瓶様ノ物ニシテ處々碧錆ヲ
点スルモ鍍金ノ部分ハ燦然
シ人目ヲ眩財ス外ニ刀劍ヲ
出セシモ酸化腐朽シテ鞘ノ
マ、寸斷シ一見五六百年以
前ノ物タル自ラ明カナリ此
等ノ器物ト共ニ素焼土器ノ破片數多
發見セシモ人夫心ナク土壤ニ委シ何
方ヘカ取棄テシト云フ

(酒井家御土藏記錄寫)

山之さほうおけつり被成候義おひろう申上候事

一先來々山のきもいり我等もちおき申候處おとりはなしかのさわ勘三郎ニあづけ
被成候義ハ山くづしに御座候いかんとなれば川北二十三ヶ寺ぢんりやう寺りや



う被下候處御座候へハみな半物成御藏へ入申分ハ入木入くさしよぐんやく仕候
 これハ御百姓之帳めん之内ハ高にて被下候ゆへニ御座候我等の山ハ御百姓之帳
 面にかまへなく地方さために候へバ帳壹本にて我等に被下候ゆへ入木入くさ
 しよぐんやく御めんニ被下候を御百姓之勘三郎ニあつけ被成候儀ハめいわくニ
 存候元來ノことク我等きもいり申請度候事

一ごうはやし元來ハやまもと坊たきもと坊みなみの坊來前坊是四人ノ山使にては
 やし申候處お子ノ正月○慶安元年ハ此者共たけつり一日ニ三人つゝふたおもたせ三荷
 つゝ當年まできらせ被成候へハ木壹本もなくきりつくし申候此義めいわくニ存
 候間元來のことク四人ノ者共ニやまつかいお被仰付被下度候事

一鳥海山ハうらみち二口御座候而なつ中どうしや時ハせんだつなき者又はかけこ
 し之者をはつどうニ山中ニばんおおき人あうため元來ハいたし申候お子ノ年ハ
 ばん無用と被仰候間かけこしもぢやうに仕候義ハ其かくれなくこれハ御國之た
 めニ御座候間元來ノことク御意お以ばんおさしおき被下度候事

右之條々少もいつわり無之候條きこしめしわけられ被下度候爲其御ひろう申上候

(慶安三年)

とらノ卯月四日

鳥海山別當西ノ坊印

以上

文政造替ノ大堂ハ安政二年十二月八日炎上シ纔ニ本尊ノミ火中ヨリ出スヲ得爾後一山建築ヲ計畫シ有志寄附金ヲ募集シツ、アリシカ會々明治維新神佛分離トナリ本地佛ヲ撤シテ舊學頭龍頭寺ニ下シ更ニ大物忌神社ト稱ス明治十四年國幣中社大物忌神社ノ本殿ヲ鳥海山上ニ定メ後來ノ建物ヲ口ノ宮ト稱セラル、ニ及ヒ其設計ヲ變更シ地ヲ松岳山上ニトシ一大土功ヲ起シ明治廿九年五月十二日竣功シ同日遷宮式ヲ舉行セリ尙本項ニ係ル事歴ハ第二卷鳥海山ノ下ニ詳カナリ

舊社領 高百八十八石六斗五升貳合ハ鳥海山神領ニ屬スルヲ以テ第二卷同山ノ下ニ掲載スルハコ、ニ省略ス

舊社僧 學頭一院衆徒卅三坊ヲ以テ一山ヲ組織シ總ヘテ之レヲ鳥海山龍頭寺ト稱ス學頭龍頭寺光岩院ハ醍醐三寶院ニ屬シ衆徒ハ當山派修驗ニシテ順峯ノ法式ヲ修行セリ

因ニ云フ法式ノ順逆ハ即チ修驗道流派ノ由テ岐ル、所ナリ巖岡一山ハ既ニ順峰ノ法式ヲ修ムレバ勿論本山派ニシテ所謂熊野派ニ屬スヘキモノナリ杉澤村ナル鳥海山ニ之王子熊野堂ハ全ク流派ノ關係ヨリ勸請セラレタルモノ、如シサレバ本ト本山派ナリシヲ寛文九年八月杉澤別當坊之記ニ峰法之流ハ聖寶尊師東寺流ト申也ト

アリテ此頃ヨリ漸ク當山派ヲモ交ヘ修メシモノト思ハルサレト未ダ公ノ手續ヲナサス何レノ所屬ヲフコトモナク無本寺ニテアリシヲ貞享元年宗派ノ檢覈アリシヨリ全ク當山派ニ屬セリ

(當社文書) 出羽國鳥海山龍頭寺順峰修行法式如往古當山之法流令相續可勤之旨三寶院御門跡御下知可相守候也

貞享元年甲子十一月十日

三寶院御門跡御名代

品川寺中性院

花押

羽州鳥海山巖岡滿山衆徒中

而モ役小角ノ法式ヲ修メ本山派ニ屬スヘキ順峰ノ修驗ニシテ逆峰修行ノ當山派ニ屬スルハ法式ト所屬トノ撞着ヲ免レ難シ故ニ後チニハ當山本山兩宗兼學ト稱シ其矛盾ヲ避ケシモ法式ハ舊ニ仍リ順峰ヲ修メタリキ

(舊衆徒志田氏北ノ坊所藏文書)

享和二年江戸鳳閣寺ヨリ幕府寺社奉行ニ差出セシモノ

當山宗門座階級次第

眞言○當山派修驗○本山兩宗兼學出羽國鳥海山順峰先立龍頭寺并同山逆峰矢嶋元弘寺

例 祭 五月三日 現今蕨岡口之宮ニ於ケル祭式ハ所謂先途講セントコロ一ニ出世ニ峯中チウカケイ駈入ニ出成ナリノ作法ヲ根據トシテ維新後之レヲ神式ニ應用セラレタルモノナレバ先ツ其大綱ヲ述ヘ然ル後チ細目ニ及ハントス但神事次第書正徳元卯年十月ノ奥書アリノ原文ヲ主トシテ之レニ大神事奉行手鏡、神事手鏡及ヒ二峰相應法則記大永五年役阿吸ノ筆記ニシテ安永元年九月清水坊邑源吉野大寶ニ於テ謄寫齋ヲシテ來リシモノナリ鳥海山順峰法則ニ據ル

總ヘテ大先達位ダイセンタツノ補任ハ三歳ヨリ法役ヲ勤メ規定ノ階級ニ依リ峯中アチウゴンキヤウ勤行ノ後チニアラサレバ決シテ之レヲ享クル能ハズ故ニ衆徒ノ惣領タルモノハ三歳ヨリ神事ノ際舞臺ニ於ケル作法アリ之レヲ懷兒ダキチヨト云フ七歳ヨリ十五歳〇年〇齡〇次〇第〇マ〇テ〇法〇坐〇ニ着キ又兒舞ヲ演ズ之レヲ「連法坐」ト稱セリ

十六歳ニシテ剃髮シ卿名ヲ授ケラレ例如ヘバ式部卿民部卿等ナリ初メテ峯中堂ニ入ル之レヲ初入峯又新客シシヤクト稱ス十七歳ニテ阿闍アカノ法役ヲ了ハ「阿闍アサノ先達」トナリ十八歳ニテ小木コギノ法役ヲ修メ「小木コギノ先達」トナル以上三度ノ修行ヲ「峰之役」ト云フ即チ峯中ノ法役ナリ

廿二歳ニシテ俱舍クシヤヲ舞ヒ今之レヲ演セズ廿三歳ニ太平樂ヲ演シ廿五歳ヨリ振舞エンブ陵王レイウ、田樂テンガクニ入ル以上ヲ「庭之役」ト云フ即チ一之王子堂庭上ニ於ケル法役ナリ

此等ノ法式ヲ卒ヘ藹次ニ依リ先途講式ヲ勤メコ、ニ始メテ「大先達位」トナレリ駈入、出成、柴燈護摩ノ勤行アリ既ニ大先達ノ補任ヲ得タルモノハ三年間「三度サンド後衆」阿闍小木正先達三度ヲ云フト呼ハレ材器ニ依リ「大宿先達」大宿ハ即チ峰中堂トナルヲ得ヘシ而シテ來年

先途講ヲ勤ムヘキ度衆ヲ「行事」ト云ヒ其翌年行事トナルヘキモノヲ「若大將」ト云フ其他ハ「若大將」ト呼ヒ各服スヘキ職掌アリ

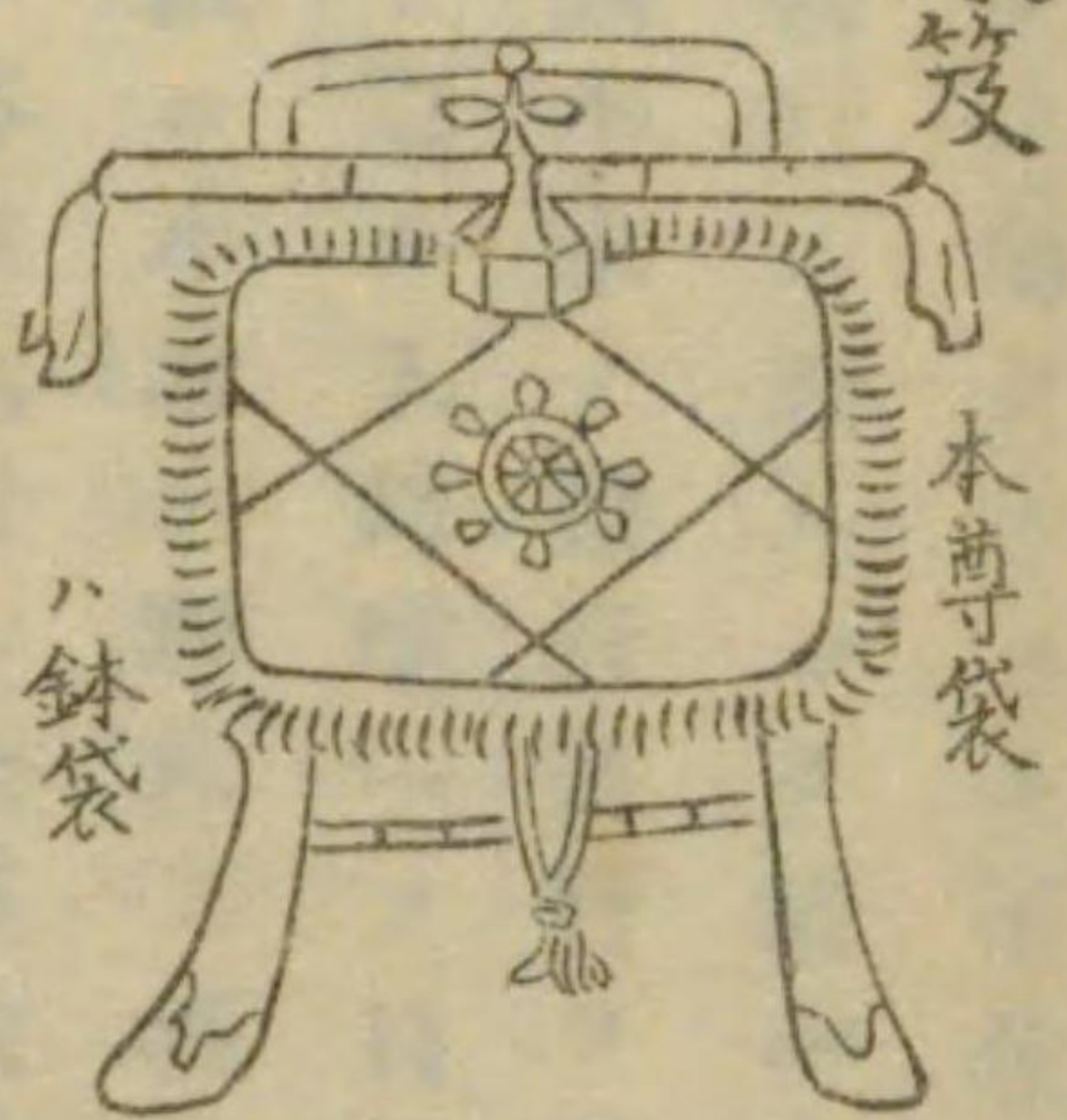
因ニ云フ修驗ノ唯一法式トスルモノハ入峰ニアリ其法式所作ハ何レモ高尚ナル理論ニ據リテ案出セラレ固ヨリ一朝一夕ノ能ク道フヘキ所ニアラス然ル當社ノ祭儀ハ其法式ニ根抵スルヲ以テ之レカ大要ヲ述ヘサレバ恐ラク搔靴ノ感アラシ故ニ前記ノ諸書ニ據リ入峰法式ノ由來ヲ概記シ參考ニ供ス

入峰ノ法式ニ三アリ一ヲ順峰ト云フ或ハ春峯即チ胎藏界ノ修行ニシテ因ヨリ果ニ至リ上菩提ヲ求ムルヲ主トナス二ヲ逆峰ト云ヒ或ハ秋峯金剛界ノ修行ニシテ果ヨリ因ニ向ヒ下衆生ヲ化スルヲ主トナス故ニ逆ト云ヘリ三ヲ中峰ト云ヒ或ハ夏峯金胎兩部

ノ兼行ニシテ因ニアラス果ニアラス自他一如ヲ以テ旨トナセリ其法式各々多少ノ異同ナキニアラスト雖凡歸スル所ハ阿闍ト護摩トニアリ
 阿闍ハ水ニシテ護摩ハ火ナリ火ハ木ヲ生シテ水トナリ水又火ニ依リテ木トナリ互ニ循環シテ終始止ムナク因果應報ノ理リヲ示シツ、アリ因ニシテ障得ナクンバ良果トナリ果ニシテ障得ナクンバ美因トナルヲ得ヘシ何ヲカ障得ト云フ即チ煩惱罪業是レナリ故ニ水モテ罪業ヲ洒ギ去リ火モテ煩惱ヲ燒キ盡サバ自ラ菩提涅槃ノ境ニ出入シ佛即チ覺トナレルモノナリサレバ佛ハ佛ニアラス我レハ我レニアラス苟クモ發心三昧ニシテ事理ノ修行事ノ修行ハ難行苦行ヲ云ヒテ忘ラサレバ我レ人共ニ佛トナリ得ヘキナリ

然凡濁レル水ニハ眞如ノ月宿ラズ争デカ煩惱ヲ洒キ去ルヲ得ン穢レタル火ハ瞋恚ノ炎トナリ易シ安ゾ罪業ヲ燒キ盡スヲ得ン釋尊ノ檀特山ニ入ルヤ阿仙人痛ク我ヲ挫キ朝タニハ木ヲ高嶺ニ採リ夕ヘニハ水ヲ深谷ニ汲マシメタリ生木ヲ折リ來レハ草木言ハスト雖凡何ゾ種子ヲ絶ヤスノ罪業ヲナスヤ枯木ヲ取り來レバ枯レタリト雖凡中ニ生虫アリ何ゾ殺生ヲ事トナスヤト共ニ却ケテ納レズ釋尊百方苦心不死不生ノ木ヲ採リテ之レヲ上リヌ又水ヲ汲マシムルニ方リ毫末ノ塵アレバ水ハ心ヨリ出ツルモノ濁ルハ汝ガ心ノ清カラザルナリ色アルハ汝ガ心ニ欲アルナリト亦之レヲ卻ケ管撻交、下ル釋尊具ニ艱難ヲ嘗メ無味無色ノ水ヲ得テ之レヲ捧ケタリ斯

縁笈

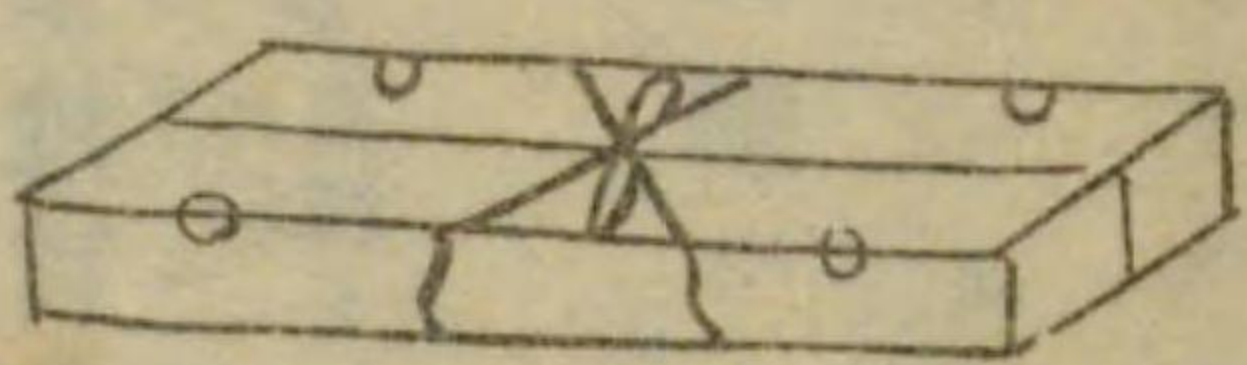


本尊袋
ハ鉢袋

正先達ノ用具ナリ
 笈ノ中ニ小不動金剛
 袋舍利前具乳木
 如意香炉等ヲ納

碑傳札

三峯相應法則ニ拠
 大小一ナラス

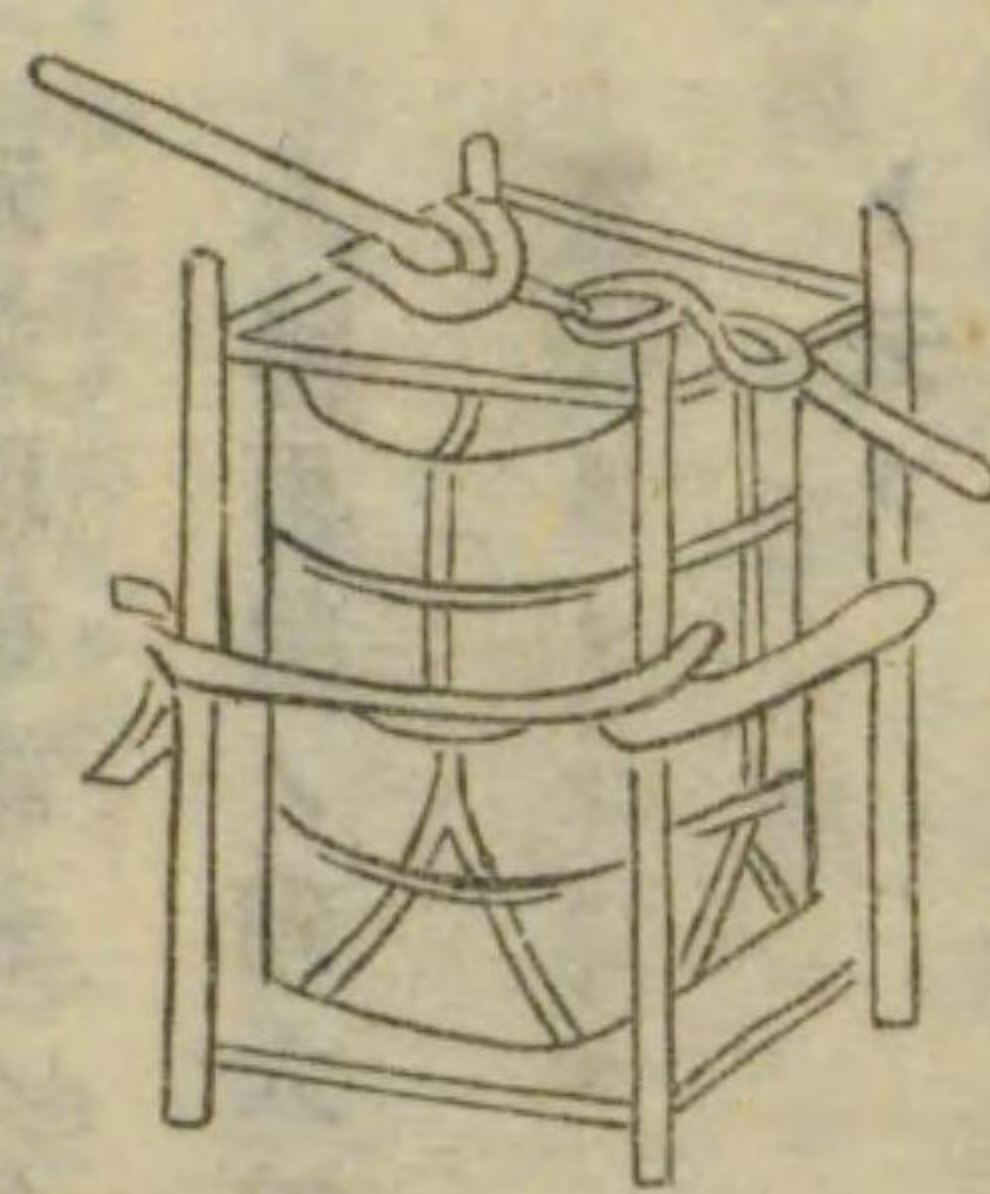
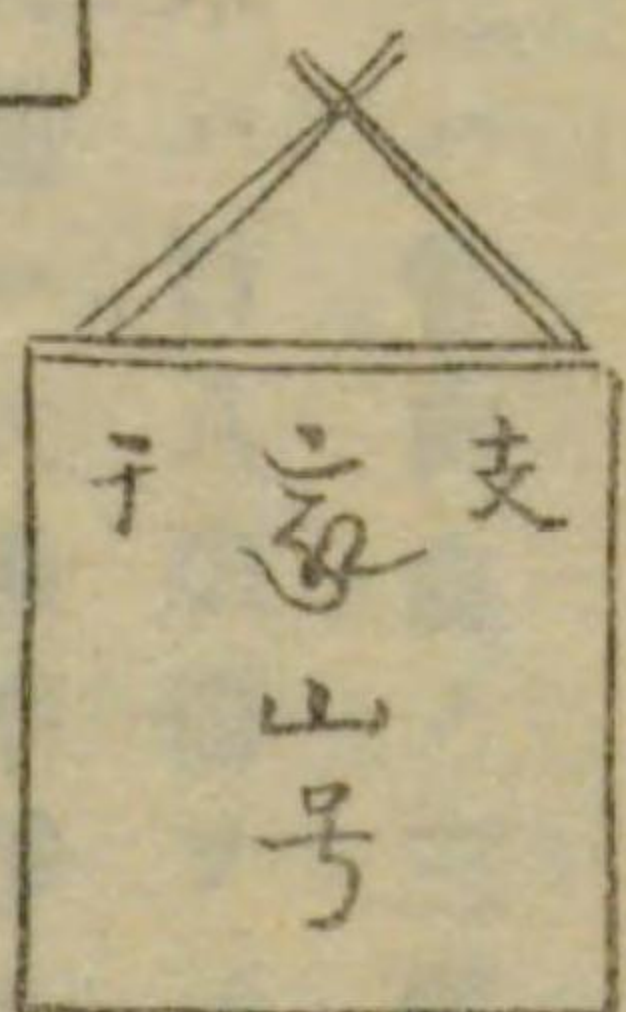


肩箱

用具ヲ納メ
 笈ノ肩ニ附ス

阿闍札

長一寸九分中九分
 上チ少シ長シ



阿闍桶

二個アリ檀木ヲ
 以テ之レヲ荷フ

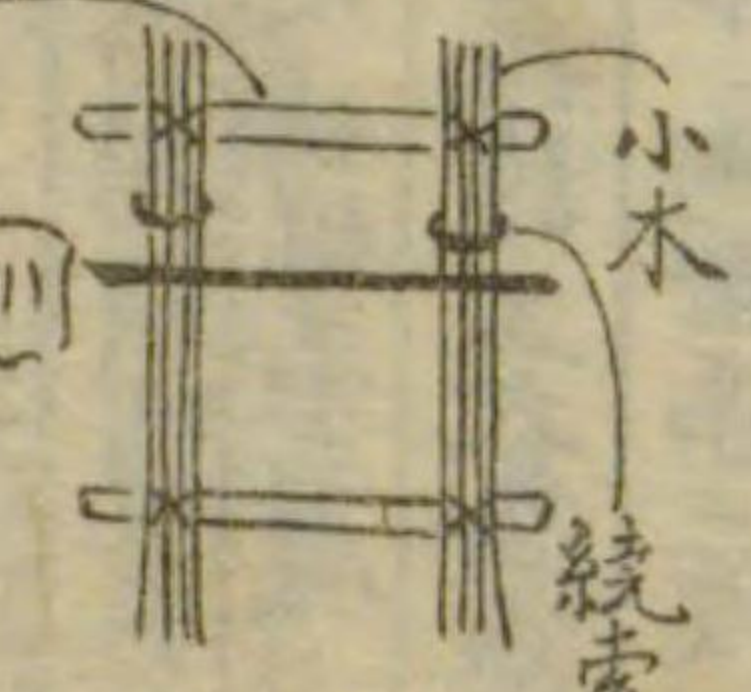
小柴

宿口、下口ニ立ツ



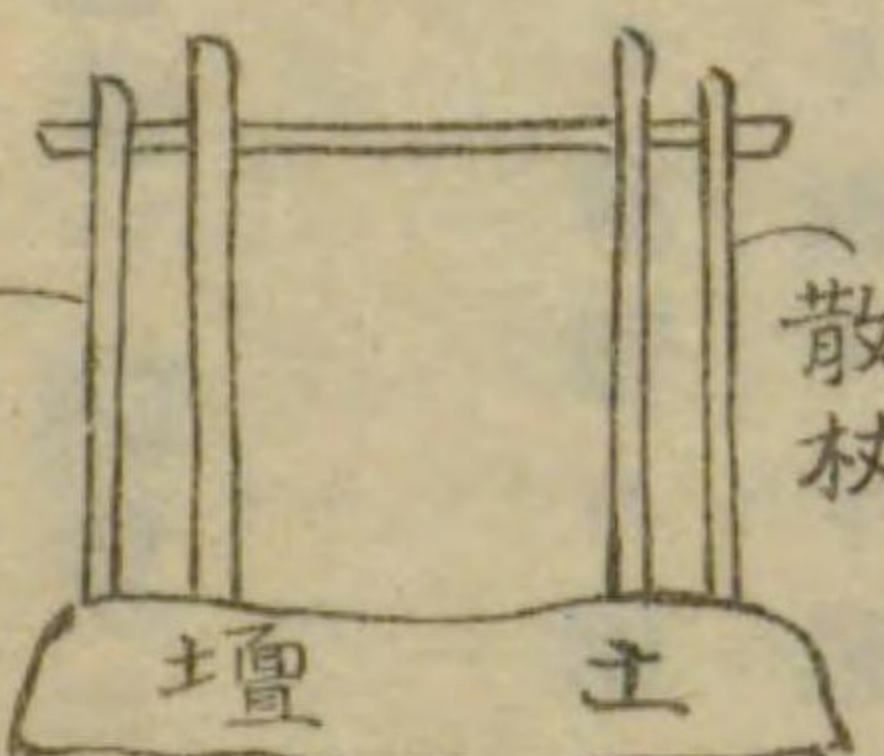
土壇或ハ石壇

小木檀木



二宿熊野堂ニ掛
 宿、片モ亦之レヲ
 立ツ

笈立



散杖ヲ立テタルヲ示ス

三所和光	一五七	度
當大權現(依在所)	一五七	度
當山年号	九十三	度
當山月日	九十三	度
大先達位無相	九十三	度
三密行者房定九度	九十三	度
宝滿大サ	六十四	度
八大尊	八	度

支于山号
 從因至果
 先達実名判形
 授與新客実名
 以下切リニ尽ク

巖岡入峰碑傳札 長一尺五寸巾四寸

日	白山妙理大宿先達 大阿闍梨何院某第五度 四天和合身骨肉及手足 何鄉某三度 何鄉某初度
月	勅宣正一位鳥海山當峰擁護正太先達阿闍梨何坊某四度 如新火滅皆共佛地 何鄉某二度 何鄉某初度 何上人小本先達東寺流 于時字号何年 連客敬白

元文以後維新ノ後迄此文例ヲ用ウ但三鱗形ハ當山派ノ祖理源大師ガ
大峰再興ノ砌大蛇ヲ退治セシ并得タル三枚鱗ニシテ現物ハ三寶院ノ
寶物タリシヲコ、ニ象トリ當山派峰中法脉ノ標識トナセルモノナリ
ト云フ

クノ如クニシテ不生不死ノ境ニ入り所謂覺即佛トナルヲ得タリ是皆發心三昧事理
修行ノ果ニシテ峰中修行ハ正ニ之レヲ祖述スルモノニシテ常ニ釋尊ノ意ヲ體シ阿
闍小木ノ難行苦行ヲ積ミ煩惱罪業ヲ燒盡シ因位ニ隨ツテ菩提涅槃ノ門ニ出入スル
ヲ以テ入峰唯一ノ目的トナセリ

故ニ小木ハ釋尊ノ採薪ニ因ミ上句打破中句九小木下句花開トノ三ハ骨肉血ノ三惱ニ象ト
リ各口六寸ハ六根六境六識ヲ表シ長各一尺八寸定數百八本ハ百八煩惱ヲ示シ晝夜
三荷ノ阿闍ヲ汲マシムルハ三業犯ヲ滅除スルノ謂ニシテ六桶ハ六根不淨ヲ洗ヒ去
ルノ義ナリ阿闍札ハ行者カ五輪地水火風空五體ヲ表スル卒都婆トニシテ即チ水木ノ血脉兼
テ從因至果逆峯ニテハ從果至ノ符トナシ碑傳札ハ入峰相承ノ表識ナリ法則ニ據ルニ石ニ記スレテ碑
ト云ヒ法ヲ續クヲ傳ト云フト
即チ法ヲ續ク書札ヲ碑ニ準ハ碑傳札ト稱スルナリ小柴ハ宿口ノ莊嚴ニシテ亦衆俗ノ漫リニ入ルヲ禁スル關門トナス
故ニ下馬トモ稱ス蓋大宿ハ秘密ノ道場タルニ依リ縁ナキ衆生ヲ謝絶スルヲ意味ス
ルナリ其他峰中ノ勤行數多アリト雖モ當時之レヲ秘密ニ附シ且其事本誌ニ要ナケ
レバ省略ス

○綯結之饗クワリユヒノキヤウ 正德神事次第曰八月廿八日綯結之饗先ツ御堂ニテ朝惣山懺法心經錫
杖陀羅尼各祈禱終テ來年ノ先途結袴取ル來年五月五日迄十日間結リ胎内修行ト
テ穢不淨着セズ丸寢シテ剛ギヤウキ行ナリ前後三日ノ御振舞前廿七日夕刻一山ニ「御

案内申明日先途ノ縷結御坐ルト案内ス若大衆先途屋ニ出仕シ尺餅ヲ搗ク饗應アリ以上原文以下コレニ倣ヘ

○當日早朝一山大堂ニ出仕シ神酒尺餅折肴魚類ニアラズヲ備ヘ導師金ヲ打チ大衆祈誦心經錫杖羅陀畢ヲ上臈ノ指示ニ依リ先途坊縷ヲ結ブ同日親戚ヲ請シ饗應アリ是レヨリ別室ニ忌籠リ翌年五月五日マテ着服ノマ、起臥シ身體ニ及物ヲ當テズ毎朝大堂ニ參拜ス是レヲ胎内修行ト稱ス意ロハ當日ヨリ胎内ニ入り五月ニ至リ出世スルノ義ナリ先途講ノ一名ヲ出世講ト云フモ亦コレニ起因スルナリ

○修正追儼午王開 同書曰正月七日心經會修正儼追 歲夜ヨリ八日マテ行者堂ニ籠リ心經會儼追修正午王開キトテ滿山祈禱アリ御堂大門崎ニ大綱ヲハへ同八日ヨリ且方へ午王引キ廻リ候

十二月晦日大衆大堂ニテ大般若轉讀アリ先途ハコ、ニ通夜ス元旦一山ヨリ神酒ヲ献ス二日大堂大門ニ注連綱ヲ緇即チ追儼ノ作法ナリヘ此夜不動堂ニ於テ修正ノ祈禱アリ三日ノ夜釋迦堂ニテ修正アリ七日大衆各午王ヲ大堂ニ備ヘ午王ヲ加持シ翌日且家ニ配附ス

○的射之饗 同書曰二月二日的射ノ饗 使者法衣ニテ案内申ス「明日二月三日ノ祭ガ御坐ル」ト申シテ通ル寺々ニテ「受給フ」ト答へ朝飯過テ出仕ス先神酒終テ右ノ若大衆印ス役々相定ル田樂ト申スハ大衆八人ニテ色々之花笠カムリ、

音樂調、一之編木ハ誰、二之鼓ハ誰レナド相定、舞ノ饗脇他房ヲ云フニテ相勤メ日夜

内學稽古ヲ云致事右之三月三日ノ饗青白餅一重ツ、引神酒度々終テ引論議ニ立退座ヲ云フ

其後若大衆御堂庭ニテ的射遊覽有リ及數刻
前日先途坊ニテ的の大小二個ヲ作リ裏ニ鬼ノ字ヲ書ク大的ヲ大堂ノ北鬼門ニ立テ小的ハ白山權現ニ立テ共ニ神酒ヲ供フ其夕使僧ヲシテ一山ニ案内セシムルコト本文ノ如シ當日朝先途坊ニ出仕神酒三献ノ後チ年齡ノ次第ニ依リ田樂ノ役割及ヒ舞饗ノ當番ヲ定メ之レヲ一和尚ニ捧ク古來相傳ノ文例左ノ如シ

定ム田樂日記之次第

定ム舞饗日記之次第

- 一ノ編木 誰 卿
- 二ノ編木 同
- 三ノ編木 同
- 關ノ編木 同
- 鼓之次第
- 一ノ鼓 誰 卿
- 二ノ鼓 同
- 三ノ鼓 同

右所定仍而如件

年號月日

先途

- 誰坊
- 行事
- 誰坊

關ノ鼓

同

右所定仍而如件

年號月日

先途

誰坊

行事

何坊

○舞童揃之饗

同書曰同月十日舞童揃之饗「舞童揃之御出仕」トノ使ヒ「受給フ」

ト答へ出仕ス式臺○會釋アリ御食過キ舞師高足行事ヨリ頼ム後段ニ餅アン入神酒

七献御吸物三度其後御堂ニテ兒大衆内學アリ十一日カ十二日迄兒内學、七歳ヨ

リ十五歳迄之内兒師ノ坊エ主講トテ勤メ有」

前晚行事ヨリ明日笈酒進メノ由ヲ案内セシム當日行事坊ニ參集ス饗應アリ此時行

事ニ父アルモノハ上臈ヨリ院號ヲ免許ス補任文例左ノ如シ

補任院號之事

授與何院

右任舊例彼職所令補任之狀仍而如件

年號月日

一ノ和尚

何院

○百和殿之饗

二ノ和尚

○百和殿之饗

三ノ和尚

○百和殿之饗

何院

○百和殿之饗

何院

○百和殿之饗

何院

○百和殿之饗

何院

○百和殿之饗

何院

○百和殿之饗

何院

○百和殿之饗

何院

○棚結之饗

同書曰同月十二日棚結之饗

先途ノ寺ヲ莊嚴シテ檀ヲカザリ棚ヲ結

イ十八劫口ヲ備イ

○三重六劫武臺ヲ合

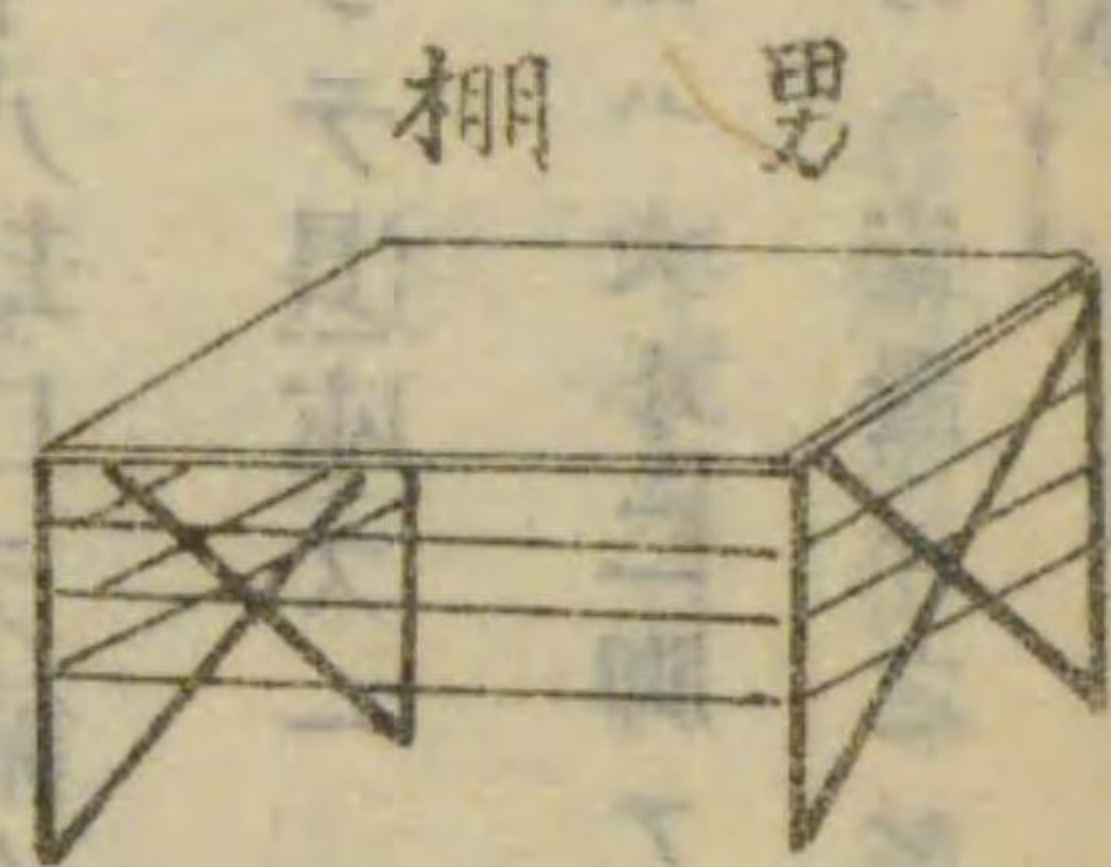
神幣ヲ立テ應例ノ式臺アリ其後饗應御神酒三献論

議シテ退座ス

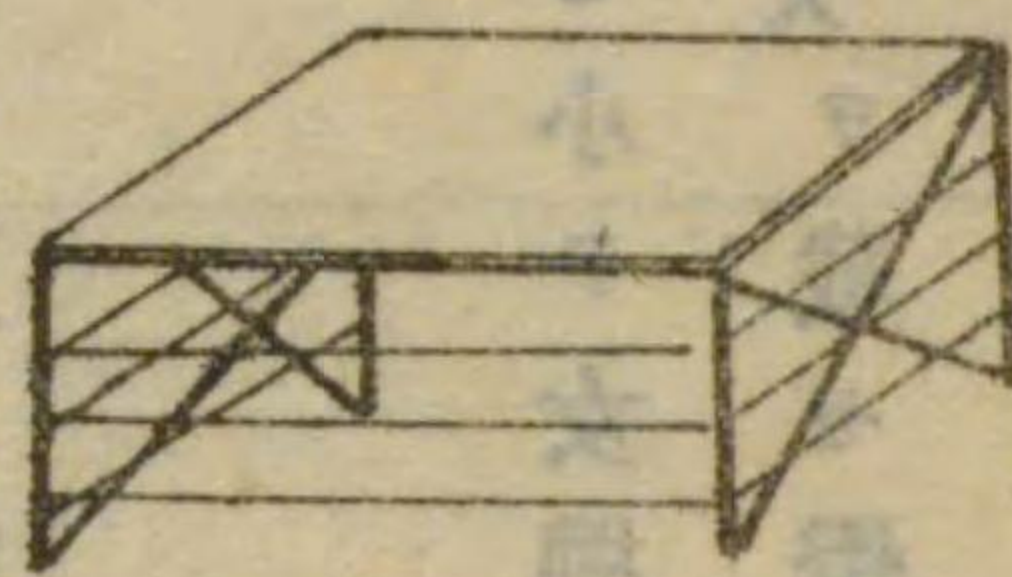
棚ハ大小二脚アリ大ヲ男棚ト云ヒ小ヲ女棚ト云フ結畢リ先ツ女棚ノミヲ檀上ノ後

方ニ安置シ之レニ三合供味○若布昆布大ヲ載セ燈明ヲ點ジ一和尚開眼加持ノ後チ饗應ア

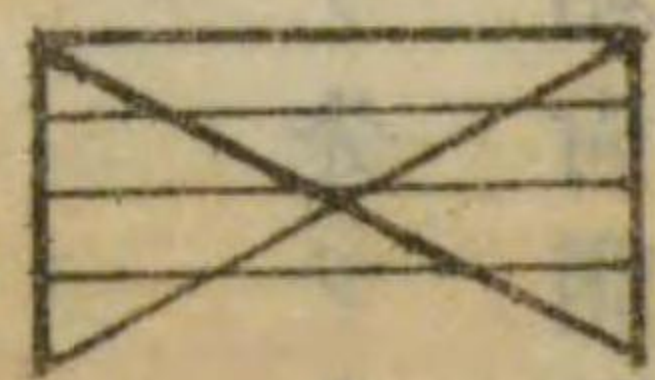
リ



高四尺七寸
長四尺七寸
四隅ニ椿ノ花
ヲ挿ス



高四尺三寸
長四尺三寸



兩棚トモ背部ノ
結構斯クノ如シ

棚ノ鏡板ニハ九曜臺トテ米ふうしヲ盛リタルモノニ臺ヲ載セ
又六却ニ神幣ヲ挿シタルモノ五臺ヲ載ス

三重六却供

重毎ニ煮タル黒豆ヲ盛ル



○菓子味之饗 同書曰同月十四日菓子味之饗 朝祈禱アリ御茶廻シ其後餅アン入
御吸物酒神幣ニテ退出ス

○百味揃之饗 同書同月十五日百味揃之饗 朝觀音心經錫杖尊勝陀羅尼過テ御食
神酒菓子折ニテ立

大衆先途坊ニ出仕シ神檀ヲ莊嚴シ供物ヲ供へ本文ノ如ク讀經アリ饗應ノ後チ若大
衆ハ殘リテニンヂユ餅ヲ調理ス是ニ至テ神檀ノ供物内盛チ悉ク備ハル故ニ百味揃ト
云フナリ

○内盛之饗 同書曰同月十六日内盛之饗 使僧案内申ス「明日先途ノ内盛へ御出
仕」答テ其朝大願成就皆令満足ト四方ニ盛リ先途ノ前ニ一ッ行事ノ前ニ一ッチク
先途行事罷出満坐へ式臺アリ競馬始リ○献酬ノ酒各初ノ杯ヲ取ル其後御食任往例
作法献立神酒十六献菓子七度引御茶後段餅取付ケ御吸物推洗○蕎麥粉ヲ極ノ雜煮白
煮○豆腐ヲ三角ニ切様々例儀アリ神幣、折、籠座リヤツノ引論議ニテ退坐ス同夜御堂ニテ舞
師高足兒大衆集會シテ粥如例御菓五ツヲキ、ヲリニテ立

早朝先途坊ニ出仕シ内盛ウツモリ堆盛ノ假字ナリ後チ「ニンヂユ盛」ト稱ス文字詳ヲ調理シ○内盛ノ畢リテ神檀ニ
備フ饗應アリ退座ノ後チ行事來リ神檀ヲ拜シ席ニ着キ先途ト對座ニテ饗應アリ行
事歸レハ御幣供物机ノマ、之ヲ贈ル折返シ行事坊ヨリ先途ヲ請シ饗應アリ畢リテ
供物ヲ贈ル前ノ如シ

斯クテ大衆ハ案内ニ應シテ先途坊ニ參集ス一和尚打磬心經ヲ誦ス若シ補免許ノ輩
アレハ豫メ補任袈裟ヲ整へ置キ此間ヲ以テ順次呼出シ先途之レヲ授與ス畢テ一和

尚以下大衆同音ニテ心經三卷佛眼咒兩部大日咒慈救咒ノ勤行アリ後チ神酒饗應中若大將左右ヨリ二人ツ、末席三衣ニテ進ミ出テ檀上ナル内盛并供物ヲ先途ノ前ニ齋ラシ備フ此間奏樂アリ先途暫ク念誦シ座ヲ立チ上座ヨリ左右ノ大衆ニ一禮シテ復席ス次

ニ之レヲ行事ノ前ニ移シ備フ念誦禮儀前ニ同ジ

行事綱ヲ結ヒ立チテ大瓶桶ニ向テ祈念加持シ左右ノ瓶子ヨリ桶中ニ酒ヲ注クコト

三度ニシテ内盛瓶子等ヲ神壇ニ復ス但ヒケリ折神幣實盡ハ行事ノ前ニ置ク饗應畢リテ退座

此夜行事舞師レウツ陵王役并若大衆大堂ニ出仕シ神酒三献引肴折ノ後チ舞師等ノ演技アリ

○刀立之饗 同書曰同月十七日刀立之饗 午之時出仕ス御幣裁チ先ツ竹ノ二本八

寸圓長一丈八尺、赤白木綿ニテ十二狀ノ紙、十二節ニ裁チ釵表裏ヲキ次第様々

アリ一和尚二和尚三和尚各念珠シテ御振舞如例同夜舞臺ニテ先連舞老翁レシテ先連舞老翁ヲ

銚ニテ左ヘ二ト、右ヘ一ト、亦右ヘ二ト、左ヘ一ト、中ヘ一トヲ振ル如是ナリ懷兒タキチ

出テ三度廻リ其後チ仍ニ兒出師ノガク次第第二舞フ、次ニ驅者ノ俱舍ノ假字 太平樂、老翁

ナリ○陵王田樂、年ニヨリ高下アリ八人音樂ニテ舞フ過キテ宿々ヘカヘル行事一人舞臺

ニ通夜シテ○此頃ハ舞臺ニ通夜セリ後チ大堂長床ニ於テス來團關○意義詳カカナラストハ已上ニ未タ開空劫ノ事力時々大鼓打

觀坐ス

先途坊ノ床上ニ御幣供物等ヲ飾リ燈ヲ點シ神酒初穗寶蓋臺肴ヲ備フ一和尚加持祈

禱シ自ラ刀ヲ執リ幣ヲ截チ始メ若大衆之ヲ切ル幣既ニ成レハ一和尚之レニ向ヒ作

法アリ之レヲ御即位之大事ト云フ御幣ハ堅護摩ノ法式ナリ先途坊之レヲ動行シ大先達即チ大日如來ノ覺位ヲ享ク故ニ御即位ト云フ

次ニ行事自ラ一山ニ案内ス左ノ如シ

初度御案内申ス上人ノ御飾二度案内申ス上人ノ御化粧三度案内申ス上人ノ御衣裳四度先途案内申ス御出仕

大衆參集一和尚打磬讀經心經一卷畢リテ神酒若シ補任ノ輩アレバ此間ヲ以テ之レヲ授與

ス一和尚以下大衆同音讀經作法内盛ニ於ケルカ如シ

此夕行事自ラ御出仕ト案内ス舞師舞役若大衆大堂ニ出仕シ神酒三献日餉供ノ後チ

舞臺ニ上ル先ツ銚ニテ四方堅ノ作法アリ即チ振舞ナリ次ニ懷兒、高足トウヤリトウホウタナ

イリ俱舍ニ太平樂陵王ノ舞曲アリ

此夜行事ハ獨リ大堂ノ長床ニ通夜觀座シ時々大鼓ヲ打ツ斯クテ曉前先途坊ヨリ七

度半ノ使ヲ得テ出仕スルナリ

○御幣立之饗 同書曰同月十八日 當本○先途坊ニテ寅ノ上刻ニ法螺ノカイ一羽立、

○御幣門前ニ立ツ辰之時ヨリ天地開ケタルカタチヲ云フ也若大衆一人案内ス「御幣立ノ御出仕」ト申シテ通ル答テ滿山出仕ス御幣ニ向テ念誦合掌シテ通ル金打各々念珠シテ懺法觀音經心經錫杖經尊勝陀羅尼天下太平御祈禱各終テ御食付干六場ニテ應例ノ通菓子神酒敬場神幣引論議ニテ退座ススクニ御堂ニ詣テ」

寅ノ上刻法螺ヲ立テ御幣ヲ先途坊前ニ立テ案内申ス御幣立ノ御出仕ト案内セシム大衆先ツ御幣ニ向テ念珠禮拜シテ入ル列座ノ後テ使ヲ行事ノ許ニ立ツルコト七度半行事音樂ニテ練リ來リ亦御幣ニ祈念拜禮シテ入り滿座ニ一禮シ着座ス鐘ヲ打チ滿座ヲ警メ導師頭座ヲ立チ左右ノ大衆ニ會釋シ神壇ニ進ミ打磬三禮懺法心經觀音經錫杖經尊勝陀羅尼大金剛輪一字金輪咒ヲ誦シ今上皇帝寶祚遠長天下泰平五穀成就領主武運長久ヲ祈願ス響應アリ時既ニ曉ニ至レハ法螺ヲ立テ御幣ノ日輪ノ方ヲ表ニ向ケシム

畢テ鐘ヲ打チ法螺ニテ退座直ニ大堂ニ參詣シ然ル後チ歸宿ス

○笈緘之饗オヒカラガキ 同書曰同日笈緘之饗 午ノ上刻行事「笈カラガキ」ノ使ニ度、ニ度ハ

「兒人ノ御髮」四度目ニ先途案内申ス御出仕ト言テ通ル「受ケ給フ」ト答テ出仕ス先餅アン入結リ御茶吸廻シ菓子味引役人アリ其後「ホウ飯」上チキ笈ヲ取ル先途

斷食堅メ次ニ長頭巾様々應例アリ具ニ難述其後御堂庭へ持出ス白裝束ニテ八人持ツ滿山不殘兒大衆行列シテ彼御幣庭ニテ九度振ル舞臺ニテ鉾ヲ振ル先途振終テ直ニ入峯送り三人前二年先達○即チ三度後乘ナリ先途ヲ送ル滿山大衆暫ク有テ○先途ノ入螺ノ宿ヲ俟ツカイ立宮回り終テ兒ノ舞懷兒其後役々何モ勤ム其日ヨリ先途斷食同廿五日迄」

早朝笈ヲ結束シ圖上ニ出ス床上ニ饒リ床ノ正面ニ役行者ノ畫像ヲ掛ケ右笈ニ懸衣ヲ裝フ順峯ハ帷子、逆峯ハ小袖ヲ用フ先途行事交々一山ニ案内ス作法アリ繁キニ依リ之レヲ略ス次第左ノ如シ

初度先途案内申笈緘ノ御出仕ニ度行事案内申ス上人ノ御髮三度行事案内申ス上人ノ御化粧四度行事案内申ス上人ノ御衣裳五度先途案内申ス御出仕

大衆參集御幣念誦例ノ如シ半鐘ヲ打ツ一和尚打磬心經大衆同音響應アリ其間老僧長頭巾ヲ案内ス長

頭巾紫磨金袈裟貝緒等ヲ一和尚ノ前ニ備フ一和尚先途ヲ呼ヒ之レヲ授ク先途左右ノ大衆ニ會釋シテ

復尋テ先途斷食堅メノ作法アリ三和尚奉行部屋ニ入り秘法ヲ修メ振鐸ヲ聞キ先途

モ亦之レニ入ル女棚ヲ撤シ男棚ヲ置上ニ安置スルノ作法アリ既ニシテ音樂起リ三和尚長頭巾ヲ先途ニ頂カシム

ル作法アリ是ニ至テ先途ハ大日覺位ノ寶冠ヲ頂キ初メテ大先達トナレルナリ

次ニ大衆芳飯ヲ乞フ時ニ獅子頭來リ御幣前ニ於テ十二段ヲ舞フ且御幣附ノ丁壯競

ヒ來リ力ヲ極メテ板敷ヲ踏鳴ラシ頗ル喧噪ナリ此事古手鑑ニ所見ナシ新手續文政元年ノ定書ニ三月十

アリ蓋其頃ヨリ起レルモノナルヘシ

大先達奉行部屋ヨリ出テ復席スレハ導師老僧各座ヲ起チ一献ヲ侑メ大先達返酬ノ作法アリ畢リテ駈入ノ行列ヲ整フ此間玄關ニ於テ笈取ノ式アリ若大將笈ヲ負ヒ大先達ヲシテ笈繩ニ繩ラセ若大衆擁護シテ大堂前ニ至ラシム既ニシテ御幣仁王門ニ至レハ劍先ノ月輪ヲ表ニスルノ作法アリ大衆ハ庭上ノ傍ニ齊列シ大先達ハ笈懸ニ凭ル

斯クテ御幣ヲ庭中ニ立テ振ルコト九度鈕先ハ先途坊ニ渡ス此時近隣ノ丁壯群集シ之レヲ取ラントシテ頗ル騒擾ヲ極ム御幣引去リタル後チ導師老僧其跡穴ニ進ミ大堂ニ向ヒ庭ノ贊喝ヲ誦シ修法アリ同時ニ行事舞臺ニ上リ舞樂ヲ演セシムルコト例ノ如シ此間ニ去年ノ先途坊若大將ヨリ笈ヲ請取リ之レヲト云フ作自ラ之ヲ負ヒ大先達ヲシテ其繩ニ繩ラセ三度衆若大將之レヲ擁護シ法螺三音ヲ立テ峰中堂ニ駈入ル是レヲ入成ト稱ス大衆亦之レニ應シ法螺ヲ立テ繞堂ノ儀式アリ

○附揃之饗 同書曰同月廿五日附揃入峰度衆新客 同日大宿先達小木先達阿闍先達新客各入峰付揃同廿六日ヨリ斷食晦日迄四月朔日ヨリ上旬中旬下旬法式具難述秘法ナリ

峰中ナル大先達ハ去ル十八日斷食堅メヨリ今廿五日マテ斷食ノ修行アリシヲ同日自坊ヨリ食物ヲ送ラレ始メテ食事ニ就ク

同日先途坊ニ於テ大宿先達度衆小木阿闍新客ヲ請ジ饗應アリ之レヲ附揃之饗ト云フ此夕新入峰ノ輩各自坊ニ於テ斷食堅メヲ了ヘ大宿先達ノ坊ニ集會饗應ヲ受ケ大宿先達以下大堂ニテ心經ヲ誦シ綱ヲ結ヒ附揃フテ大宿ニ向フ宿口ノ小柴圖上ニニ心經ヲ誦シ然ル後チ入り兩先達柱大宿ニ設ケテ禮拜シ各床ニ着ク但大宿ニ向フノ際「度衆式」ト稱シ新客ノ始ナルヘシ入峰ヨリ廿九日マテノ間大宿ニ於テ數多ノ修行法式アレトモ當時之レヲ秘密ニ附セラレ本誌亦其秘ヲ發キ之レヲ記スルノ必要ナケレハ省略ニ從ヘリ

○出峰柴燈護摩 同書曰五月朔日掛出々成庭柴燈、籬四門發心修行菩提丸於此

如是額打テ七度ノ使イ一和尚ヨリ若大衆ニ向イ「案内ノ使イニ急キ御立候ヘ」
「受玉フ々々々」ト答ヘ一人罷立、其時一和尚使イニ向イ「初夜ノ勤行終テ急キ御着候ヘト仰セ候ヘ」
「受玉フ々々々」ト三度答テ罷立、先途ニ打向イ右之旨ヲ言フ先途答テ「罷着フト仰候ヘ」ト申ス使イ受テ七度目ニ「御痛リノ笈」ト乞フ先途「左有ラバ遇身掛入參テテ」只給ハレト言、小木此間脱字シテ請取ル其後螺立テ宅所ニ歸ル先途屋ニ各出仕ス先神酒後段ニ雞卵有リ御吸物三下、雜煮白煮雞卵トハ一水是非ナキ所ナリ五ツヲキニテ退坐ス○正徳神事次第書コレニテ完了

五月朔日四ツ時衆徒學頭ニ集會ス入峰ノ者ハ早朝大宿ヨリ北下馬ト稱スオラヤドク下居堂ニ參着

菩提門ヨリ入り發心門ニ出テ笈ヲ設ケノ笈立ニ置ク
 此時柴燈場ニテ法螺ヲ立テ兩先達大先達大及ヒ連客度衆新客參向シ菩提門ニ至リ心經
 一卷讀誦大先達ハ菩提門ヨリ入り發心門ニ出テ修行門ヨリ入り大衆ニ一禮シテ着
 席大宿先達連客ハ菩提門ヨリ直チニ入り亦大衆ニ一禮シテ着席ス但門ノ出入ニ異同アリ姑
俟後チ護摩ノ修法アリ畢テ螺ヲ立テ一同涅槃門ヨリ出テ大堂ニ詣テ心經ヲ誦シ各
ツ々偶ヲ解キ自坊ニ歸ル
 同日大先達坊ニ於テ大衆ヲ饗應ス之レヲ「出峰之饗」ト云フ後チ連客ハ法衣ヲ着シ一
 山ニ廻禮ス同五日後チ三日笈道具并法則書ヲ點檢シ笈證文ヲ認メ行事ニ引渡ス饗應
 アリ之レヲ「笈渡シ之饗」ト云ヘリ是レニテ法式全ク了リタルモノトナス
 以上述フル所ハ古來相傳ノ法式ニシテ維新ノ際マテ嚴重ニ實行セラレタルモノ
 ナリ但田樂ノ編木花笠神佛分離シ衆徒社人トナリ神式ヲ以テ奉仕スルニ及ヒ舊式ヲ折
ハ中比ヨリ絶ユ中シ「偶結ノ饗」ハ「齋館開キ八月廿ト改メ更ニ「物忌籠」ナルモノヲ創始シ十一月朔卯
日ヨリ酉日「午王開」ハ神式ニ改メテ襲用シ「的射之饗」ハ「御弓神事」トシ舊曆三月「舞童揃棚
 結」ハ舊ニ仍リ「菓子味百味揃」ハ廢セラレ「内盛」ハ五月一日「刀立」ハ同月二日
 「御幣立之饗」ハ同日霄ヨリ曉ニ至リ翌三日ヲ以テ大例祭トナシ峯中入成ノ作法
 ナ神式ニ應用シ以テ當日ノ祭儀トナセリ

因ニ云フ巖岡祭儀中最モ重キヲ置キ且諸人ノ耳目ヲ惹クモノハ所謂御幣ナリ之レ
 ニ係ル傳説ハ一山ノ記録ニ逸シ又古老ノ傳誦モナシサレド大永年中ノ三峰相應法
 則記ヲ閱スルニ

入成衆會之事 於先達房上床懸行者尊像其前可立手碑傳右脇立笈左脇斧阿闍桶
 可置之次可立衆會之螺度衆新客等集會聞螺廼集會先途房以現參帳着列帳拱取左
 右如着長床長床ニ着座ノ位ノ如ク次九條錫杖一卷次行者童子寶號二十次先達度衆新客
 等同時可結貫左右度衆起床可結新客等結込次出房內於宿口先途房ノ錫杖一卷次
 可立宿出法螺

入成行列次第之事 一番斧右手持レ斧懸ニ右肩二番法螺右手衝ニ金剛杖三番手碑傳右手持ニ手碑
舒ニ左手四番緣笈右手衝ニ金剛杖五番正先達右手衝ニ槍杖六番關伽桶關伽桶結ニ付擔木ニ懸七番度
按レ腰衆等各右手衝ニ金剛杖八番新客可レ負ニ橫笈ニ右手衝ニ口傳曰右手衝金剛杖表修正塔婆也以
舒ニ左手左手按腰示本有塔婆深秘也

柱松作法之事 秘記曰於柱松有長短不同一云松心長量六尋也表六根繞索數三十
 六ヶ處也表互具六根最頂大幣一本可立之長量唯是莊嚴之儀也二云松心長量一
 丈八尺也表十八界此繞索數十八箇所也表示松大幣如前三云松心長量十二
 尺表十二入繞索數十二箇所也表示松心同也大幣如前師傳曰柱松昔豎柴燈也宜度

先達シキヤウ自行柴燈用之シテ之ハ豎差別之儀也ニ場柴燈者コト橫柴燈也ト新客等所役柴燈用之ニ橫柴燈ト平等之儀也ト次打柱松作法事任セ入成行列諸役等柱松三方順次可立ツ次錫杖并慈ニ救ヲ眞言ノ松山伏聞キ以清淨心ヲ段ヲ廻登柱松ニ可シ燧ツ火ヲ○羽黒山ハ燧ヲ以テ燒キテ了ル下柱松也ト次可立ニ駟出ヲ螺ヲ次可直柱松ニ入成行列如前ト

トアリ是レ峰中入成即チ駟出ナリノ正式ヲ示シタルモノニシテ所謂柱松ハ本トガテ豎護摩ト稱シ先途房自修柴燈トシテ房前ニ立ツル所ナリ新客ガ出峰ノ場柴燈ハ之ニ對シヨコ護摩ト云ヘリ而シテ先途房ノ將ニ大宿ニ入ラントスルニ臨ミ前記ノ行列ヲ以テ既定ノ場處ニ至リ柱松ヲ燒即チ入峰ノ護摩ナリキ然後チ再ヒ列ヲ立テ大宿ニ駟入ルヲ法式トナセルナリ○巖岡ノ御幣ナルモノモ亦豎護摩ノ料ナル柱松ヨリ○翻案潤色シタルコト自ラ明カナルノミナラズ酒田日枝神社ノ松明神事モ之レヨリ起因スルモノナリ

末社

風神社 級長津彦級長津姫ノ二神ヲ祭ル本ト鳥海山一之王子ト稱シ十一面觀世音ハ實ニ之レガ本地佛タリ安政二年十二月大堂炎上後本地佛ト共ニ假殿ニ安置セラレ神佛分離ノ際本地佛ヲ撤却シ更ニ大物忌神ヲ奉齋スルニ及ヒコ、ニ合祀セラレシガ明治廿九年五月大物忌神ハ新築ノ社殿ニ遷坐シ風神ハ舊ニ仍リ假殿ニ奉祀セラレ以テ今日ニ至レリ

磯前神社 本ト下居堂ト稱シ藥師佛ヲ安置シ衆徒松尾坊今ノ松本氏之レニ奉仕ス故ニ慶

長十六年鳥海山神領檢地帳ニハ松尾坊ヲ下居堂ト記セリ即チ下居堂坊ノ義ナリ神佛分離ノ際常陸ノ大洗磯前藥師ニ因ミ大己貴少彦名ノ二神ヲ祭り磯前神社ト改稱ス

因ミニ云フ諸社ニ下居宮アリ即チ山上ノ神靈籠ニ下居給フ處ト稱シ所謂御旅所カミヒシヨヲ意味ス近ク羽黒山ナルモノヲ以テ之レヲ例センニ三山雅集ニ

下居宮二王門より奥におりゐの宮とて小高き丘ニあり社記ニ毎年九月晦日三山權現下山十月朔旦神幸干出雲大社同晦日歸座スル至十一月九日下居玉ツ此堂云々この故ニ今ニ至るまで年々中冬九月湯の花を奉り一年の吉凶の神託あり思ふニ諸社の御旅所といふか如し

ト見ユ當下居堂モ之レト同一ノ緣由ヲ以テ創立セラレタルモノナレバ鳥海山ノ本地佛藥師如來ヲ安置シ古來五月朔日先途坊等大宿ヨリ出成ヲノ際コ、ニ參向シ勤行ノ後チ松尾坊ノ饗應ヲ受ケ柴燈場ニ出仕スルヲ例トナセリ是亦山上ノ神靈コ、ニ下居給フ處ナルヲ以テナリサレハ均シク藥師佛ヲ安置スト雖モ大洗磯前神トハ全然緣故ヲ異ニセリ宜ク大物忌神ヲ祭り下居神社ト稱スヘキナリ

白山神社 白山媛神ヲ祭ル勸請ノ年代事由詳カナラズ慶長十六年鳥海山神領檢地

帳ニ白山田アリテ白山坊之レヲ支配セリ白山坊ハ即チ般若坊ナリ古來當山衆徒入峰ノ碑傳札ニハ必ス白山妙理大宿大先達ト記スルヲ例式トナシ又三月三日ニハ當社ニ於ケル的ヲモ立テラレ的射ノ儀式アリ、要、一山ニ特殊ノ緣故ヲ有スル社頭ナリシナランモ由緒不明ニ屬セリ

龍頭寺 同處ニアリ眞言宗醍醐三寶院末ニシテ藥師如來ヲ本尊トナス寺傳ニ慈照上人ヲ開基トスルモ文書ノ徵スヘキナシ本ト松岳山觀音寺光岩院ト稱シ鳥海山順峰巖岡一山ノ學頭タリ故ニ鳥海山龍頭寺ノ名稱ヲ襲用ス寶永三年本山常法談林所寺格トナル明治三年鳥海山ヨリ分離シ自檀ヲ以テ眞言ノ法燈ヲ繼續セリ觀音堂 境内ニアリ本尊十一面觀音脇士不動毘沙門ハ本ト鳥海山一之王子ノ本地佛ニシテ莊内札所觀音ノ第十八番タリ神佛分離ノ際當寺ニ撤却セラレ明治年別ニ一宇ヲ建立シ之レニ安置ス

巖岡館 松岳山上ニアリ現今大物忌神社ノ敷地即チ其處ナリ土居空塚ノ形跡今尙存セリ何人ノ之レニ據リシヲ詳カニセス土人ハ阿部貞任ト云ヒ龍澤館傳記ニハ永承中黑澤五郎正任ノ經始スル所ト云フモ明徵ナシ

水 上 明曆二年ノ現高五百六十九石六斗七升七夕同八十五石八斗九升水上分

今泉高タリシヲ同年檢毛帳ニ據ル後チ四百拾六石貳斗三升五合貳夕免四ツ五分七厘今泉村越高八十六石七斗五升七合貳夕免五ツ二分貳厘トナル但今泉越高ニ係ル事歴ハ南遊佐村外野高橋氏ノ下ニ掲クル文書及ヒ今泉ノ下ニ詳カナリ

鹿野澤 明曆二年ノ現高百九十五石五斗七升壹合與頭奧目四石貳升六合同年檢毛帳後チ百九十四石四斗七升七合免六ツ壹分貳厘同新田貳拾石四斗貳升四合免三ツ八分四厘組頭奧目四石四斗四升六合免貳ツ七分トナル當邑ハ鹿野澤組ノ組本ニシテ大組頭後藤氏コ、ニ住セシガ後チ平津ノ齋藤氏之レニ代リシヨリ更ニ平津組ト稱シタリキ

天神新田 寬永十一年大肝煎菅原次右衛門、石川作右衛門相議リ開發セシメシ所ナリ概島ノ石川氏下野澤ノ菅原氏ノ下ニ詳カナリ寬永廿一年ニ至リ高拾九石四斗余トナリ

(鹿野澤後藤氏文書 古屏風張替ノ際發見スルモノト云フ)

天神新田未ノ御年貢皆濟申事

高拾九石四斗七升三合三勺

取米貳石九斗貳升壹合

口米壹斗壹升六合九勺

未ノ免一ツ五分外一步給

本口合三石三升七合九勺

表ニハ七表貳斗三升七合九勺

一米貳拾四表

二口合三拾壹表貳斗三升七合九勺

右之通皆濟仍如件

寛永廿壹年

申ノ八月吉日

納四斗入
未ノ御貸米本利

稻忠右衛門手代

中西與三右衛門印

高長右衛門手代

塚谷次郎右衛門印

肝煎 治部左衛門殿

乍恐以書付を御訴訟申上候事

一天神新田貳拾ケ年 ○新田開發ノ着手ハ寛永十一年ニアリテ村立ハ同十三年ニアリシヲ以テ云爾 以前ニ立申候へ共其身上不罷成高拾

石あまりひらき口口賣つふれ死たへ百姓貳間ニ罷成候か五七年以來方々々百姓

才覺仕候而た、今五間ニ仕候則三ヶ年前よりひらき申候共高貳拾六石あまりニ

仕候其上一兩年もひらき申候殊ニ當年春中者あどく賣置申候者共罷歸候而

情を入ひらき可申と存候か口かしからぬ谷地之内上寺衆徒ニもひうき申様ニと

御意御座候ニ付而何共新田之百姓共めいわくニ存候間御訴訟申上候た、新田一

村之者向後ひらき申様ニ被成被下度候以上

(明暦元年)

未ノ二月十一日

肝煎 勘三郎印

百姓 吉藏印

同 藤十郎印

欠

明暦二年ノ現高三十三石貳斗五升壹合五勺 同年檢毛帳 タリシヲ貞享ノ初メ五十二斗貳升

三合九勺トナレリ 貞享村組付 後チ異同ナシ 但免五ツ並分

來生彦左衛門 天神新田ノ人ナリ資生播種ヲ好ミ夙ニ身ヲ營林ニ委ネ之レヲ以テ

邦家ニ效サンコトヲ期セリ是時ニ當リ森林ノ保護宜シキ失ヒ官民共ニ伐採ヲ事

トスルモ植付ヲ經營スルモノナク西山一帯ハ漸次剪伐セラレ幾ント不毛トナリ

又彦左衛門深ク之レヲ憂ヒ先ツ木竹ヲ便宜ノ地ニ植工銳意繁殖ヲ計畫ス藩主其

篤志ヲ嘉ミシ元祿十年八月宅地附近植立ノ諸木同十一年三月平畑植付ノ漆ヲ賜

フ

(來次氏文書)

覺

一屋敷廻植付被下置候杉桐竹并自分之植付自今以後竹自由可致候若御用之節ハ竹

御買上ケ被仰付候相改者於有之者此證面を以可申分者也

元祿十年丑八月十八日

金野 三右衛門印

鹿野 澤村

彦左衛門殿へ

覺

一平畑ニ漆壹場植付被下置候自今以後自由可致候若御用之節ハ御買上ケニ被仰付候相改者も於有之者此證文ヲ以可申分者也

元祿十一年寅三月

金野 三右衛門印

鹿野 澤村

彦左衛門殿

而モ庄内地方ニ於テ良好ノ種子乏シカリシヲ以テ寶永元年十月越後村上ニ赴キ諸木ノ種子ヲ齎ラシ歸リ苗圃ヲ作り之レヲ培養シ其生育ノ方法ヲ研究セリ

(同上)

出御判申請候事

今度鹿野澤村御百姓彦左衛門與申者壹人少用御座候而越後村上エ罷越候澁紙包壹ツ持申候鼠ケ關口御關所無相違罷通リ申様ニ御裏判被遊可被下候以上

遊佐郷鹿野澤村

御百姓 彦左衛門

寶永元年申十月

同村肝煎

左治右衛門

石山平内

御代官所

前書之通鹿野澤村御百姓彦左衛門ト申者壹人種物求ニ越後村上エ罷越候ニ付澁紙包壹ツ持參仕候鼠ケ關口御役所無相違罷通申様御裏判可被下候以上

寶永三年十二月藩主郷中ニ勸誘シ適當ノ山々ニ樹木ヲ植エシメ繁茂ノ後ハ植付者ノ用材ハ剪伐セシムルノ方法ヲ創始スルト同時ニ彦左衛門ガ曩キニ植立ノ漆及ヒ向後植付ノモノニ課役ヲ特免シ以テ造林ヲ獎勵セラル

(同上) 覺

一松杉桐槻桂并竹

但シ右之御用竹木植立可然地形見立申候ハ、何方之何山ト申處へ植立可申ト以書付相届可申候其節承届植立候地形證文相渡爲植立可申候無届にして植立候事ハ可爲無用候

一漆木 但シ是ハ當成年天神堂村彦左衛門持高之畑之内へ植立候漆ニ候間向後御役御免ニ候

右御用木并竹植立候義元祿十七年申之正月於御會所被仰渡候ハ於郷中御百姓共
山々宜キ處見立情を入植立末々御用ニ相立候様ニ可仕候尤御用木植立可申地形
見立候ハ、何與申處へ植立可申と以書付相斷可申由候其役別而指紙相渡植立候様
可申付候松杉竹之義及數年澤山ニ罷成候者手前屋作等仕候節ハ入用次第開届用
立候積可被下置候只今迄御帳面ニ付候御用漆木ハ前々之通り御役指上ケ可申候
其外今度彦左衛門持高之畑之内へ植立候漆木并向後手前ニ而植立之漆木之分ハ
御役御免被成候間情ヲ入植立蠟漆を取御郡中ニ而商買成共仕勝手相續ニ可仕候
乍去右之蠟漆他國へ賣出し候ハ堅ク御制禁ニ御座候間若相背他國へ賣出し之儀
相知候ハ、急度可被仰付候此旨相守候様申渡此覺書彦左衛門方へ相渡置可申候
仍而如件

寶永三年戊十二月

神尾 彌一 右衛門

阿部 五兵衛殿

石山 平内殿

右御書付を以被仰渡候松杉桐楓桂並漆竹植立勝手助力ニ可仕旨彌々諸木竹情ヲ
入植立勝手相續可仕と難有奉存候則御書出被下置永々急度相守可申候爲御請證
文指上ケ申候以上

寶永三年戊十二月

天神堂村 彦左衛門

同村肝煎

大組頭

阿部 五兵衛

石山 平内

御郡奉行所

同四年三月藩主大ニ領内ニ令シ造林ヲ擴張シ爲メニ獎勵ノ方法ヲ制シ且ツ始メ
テ植付役ナルモノヲ置キ以テ其普及ヲ計ラシム事第一卷ニ編詳カナリ有司彦左衛門ガ年來ノ
篤志ト斯道ノ經驗ヲ有スルニ依リ之レヲ植付役ニ擢ンテ森林ヲ經營セシム乃チ
孳々之レニ當リ同年ヨリ延享二年ニ至ルマテノ間宮野新田青塚吹浦地方ニ夥多
ノ樹木ヲ植付ス同年以下寛政元年諸木植付覺書ニ據ル
延享三年中野侯四郎兵衛飛鳥村安右衛門等西山ニ移住シ植付ノ舉アリ彦左衛門
二男八十郎ヲ彼地ニ移住セシメ之レニ從事セシムルノミナラズ自ラモ亦諸木三
萬七千余ヲ植付ケシガ下ニ揚ケル寛政ノ覺書ニ據ル會々朔風吹キ荒ミ各自幾層ノ辛酸ヲ嘗メ子育セ
シ樹木ハ悉ク砂中ニ埋歿セラレタリ西遊佐村ノ下ニ詳カナリ

彦左衛門老ヲ告ケ孫宇兵衛植付役ヲ命セラル時ニ秋田本莊領西濱ニ植付ノ事業アリ同年六月七日鹿野澤村大杖突治右衛門岩川村八右衛門ト共ニ彼地ニ赴キ親ク其狀況ヲ視察シ往復十日ヲ閲シテ歸ル

(來生氏文書)

出御判申請候事

遊佐郷鹿野澤村植付役宇兵衛同村大杖突治右衛門岩川村御百姓八右衛門右三人秋田濱植付之様子爲見分下筋エ罷下リ申候間風呂敷包壹ツ宛共吹浦口御番所無相違罷通申様御末書可被下候以上

延享三年寅六月

石山 治郎右衛門

阿部 彌七郎

御郡奉行所

御代官所

(舊例秘録) 延享三年丙寅今度本庄濱秋田濱植付之様子爲見分鹿野澤村植付役

宇兵衛同村大杖突治右衛門右三人被仰付下筋へ六月罷下申候金壹歩宛被下候

(藤崎佐藤四郎兵衛書留) 六月七日ニ宇兵衛殿治右衛門殿八右衛門殿同道ニ而

秋田へ砂除ケ見分ニ被參候出入十日ニテ被歸候替リ候事も無御座候様子ニ相見へ候

是レヨリ先キ西山植付場ニ砂除簀垣ニ要スル木材ヲ献センコトヲ稟申セシモ事未ダ實行スルニ及ハサリシガ果シテ風砂ノ爲メ稚樹埋没ノ慘況ニ遭遇セシカハ同年十一月簀垣延長ノ内五百間ノ用材トシテ鹿野澤地方所有ノ畑地ニ寶永四年以來植付ノ杉松雜木各長一丈ノモノ合計千本ヲ献納セリ藤崎村碑ニ「當郷彦左衛門と云ひし老農世を利するの志深く此事○西濱植付ノ事業ヲ云フを聞てまつ已が植付の松五百本を出して砂除の具に備ひ彼等○四郎兵衛等ヲ云フが志氣を勵す齡九十にして末期の一言も多くハ是なりとぞ」ト云ヘル此間ノ消息ヲ傳ヘタルモノナリ同四年八月宇兵衛森林繁否ヨリ生スル農漁ノ關係及ヒ植付保護ノ方法ヲ縷述シ有司ニ建議ス其書十五條ニ亘リ言フ所一々肯綮ニ中リ當時ニ於テハ頗ル剴切ナルモノニ屬セリ

(來生氏文書)

覺

一松 六百本

但壹丈木

一杉 三百本

同 斷

一栗 百壹本

同 斷

木數合千壹本

但簀垣五百間分

右者舊冬祖父彦左衛門奉願被仰付候當秋濱山植付場簀垣御入用之杭之内右之分

自分林を伐出し御用立可申候爲其覺書差上申候以上

延享三年寅七月

植付役 宇兵衛 印

阿部 傳太郎殿

石山次郎右衛門殿

覺

天神新田村植付役宇兵衛祖父彦左衛門四十年前○寶永四年以前鹿野澤村地形持分畑地之内へ松杉雜木植立自分林仕立置申候近年濱山實垣年々被仰付候故來年實垣被仰付候ハ、長壹丈之柱杭木右林エ有之木取合五百間分指上御用立申度旨右彦左衛門願出申候尤壹尺廻以上之木切出たし御用立可申候故朽不申候内ハ堀出し年々相用候様被仰付被下置度候左候ハ、御物入之筋相淀ミ可申と奉存候段申出候彌彦左衛門奉願候通被仰付被下置候ハ、難有仕合可奉存候爲其覺ヲ以申上候以上

延享三年寅十一月

石山 治郎右衛門

阿部 傳太郎

御郡奉行所

御代官所

乍恐覺書ヲ以申上候

一 西濱近年別而砂吹立強ク罷成山際通御田地砂埋ニ罷成殊ニ西海道累年大理仕御

田地水湛ニテ過分之御水損相立申儀ニ罷成申候故品々様子申上度奉存候

一 砂山下リ罷成先年ハ鹽風はけしく吹申候故山際通御田地エ砂吹掛砂埋ニ罷成勿

論遊佐半郷余之御田地えも冬風ニ而砂飛込申候依之土段々疲申候而稻柄細小

長ニ出不作仕迷惑至極ニ奉存候殊ニ西船通砂埋ニ而先年無キ御普請所出來唯今

ハ春中ノ内過分ノ御人足申請候へ共水落兼申候而迷惑至極ニ奉存候殊ニ過分

之御人足相勤申候得ハ三組中ニテ御田地打騒申候節故農業之障ニ罷成惣御百姓

共至極迷惑仕候何卒植付實垣等仕砂埋相防申度奉存候

一 砂山下リ罷成申候へハ次第ニ鹽風吹付強東山迄草木共ニ育惡敷罷成候諸木之内

ニモ別而杉者鹽風ニこまり申候况稻ニハ鹽風至極障八月比大鹽風吹申候へバ作

物實入兼惡作ニ罷成迷惑仕候其末九月ニ至大鹽風吹申候へバ稻小長ニ御座候故

事夥敷こほれ申候而旁迷惑至極ニ奉存候右申上候通御田地へ砂飛込土渡申候故

ト奉存候

一 西山段々東エ飛寄先年谷地ニ御座候處砂埋ニテ唯今ハ砂山之中段ニ罷成候故谷

地茂過分ニ詰リ御田地茂砂埋ニ罷成勿論馬ノ草肥草等茂萬端迷惑ニ罷成申候

一 西船通之儀者御田地用水堰諸方ハ落合申候處ニ段々砂吹掛埋申候ニ付先年ハ度

々東エ船通堀替被仰付候由然共唯今猶以砂埋強罷成申候而御人足過分ニ掛リ申

候此末段々砂埋ニ罷成候ハ、又候船通堀替被仰付候茂砂追掛無間茂埋可申與奉存候近年段々ノ砂上ニ而通際御田地次第ニ御損地出申候間御百姓共迷惑至極ニ奉存候兎角西山ニテ砂留之方便肝要ニ奉存候

一西船通先年者宮内新田村之方エ多水落申候又ハ吹浦村之方エも水流双方之川エ水落申候故洪水之後早速水引申候唯今者砂吹立強罷成小湊川エ者春中之内者透與水落不申候吹浦川エ斗水落申候故御田地新田本田共ニ度々水湛ニ罷成申候田植ノ後稻小葉育之節多水掛ケ申候而茂無稻木不作仕候况本田エ年々水湛増早速落兼申候故御百姓共心醉精働之勤辨モ難勵罷成申候而少之雨ニ茂水湛御百姓共甚迷惑仕候唯今之通ニ御座候ハ、山際村々亡所仕候様ニ罷成可申茂難計迷惑至極ニ奉存候

一西砂山先年モ青山ニ而五濱中ニ而木伐薪ニ相用申候由其後ハ柴迄モ伐盡クシ草モ盡砂御田地エ吹込申候而土疲先年百苧之御田地ニ而只今上作仕候場處ニ而七八拾束苧申候又ハ稻壹束ニ付合取三升モ仕候場處ニ而唯今者貳升五合取茂漸仕候夫故先年肥入不申御田地エ茂澤山ニ糞入作申候へハ出來能御座候然共先年與遠山谷地草生惡敷御座候故肥草茂溜リ兼段々御田地土疲申候

一砂山段々草木さへ育申候へバ砂吹立茂止海方上リ申候砂茂却てなぎさに留り陸方海エ生出可申與奉存候然者自然ニ流寄物之内種相求メ自西之方カモ草木共

ニ育可申與奉存候夫程ニ相成候ハ、山上カ東エハ杉檜松漆唐竹环植付候而隨分能育可申與奉存候中ニ茂松檜ハ別而能有御座與奉存候

一砂山青山ニ相成申候ハ、山之色ニ移魚岸ニ寄安ク別而鱒之類近寄ためし御座候由濱邊之者共咄申候其子細承申候處ニ青山移申候へハ海茂小關不明故海岸ニ寄安悉獵有之五濱中過分之究ニ罷成可申與何茂咄仕候

一近年濱山別而吹立申候故古來カ悉山下リ罷成夫故鹽風ニ茂田歩之雪薄消茂早御座候故肥厩土肥等引申候ニ茂別而迷惑仕候殊ニ遊佐山ハ鹽風吹付強御座候故諸組カハ山之雪悉不足ニ而鹿猪之類多遊佐山エ集冬を越申候依之杉檜松木之皮鹿食申候而育兼申候木多御座候勿論山田畑エ鹿猪之類障申候而迷惑仕候依之田畑之獅子番ニ秋中作物實入之節ハ小屋掛ケ作人共相守申候へ共數百疋之獅子之事故山陰ハ晝之内ニ茂作痛メ或ハ夜廻之内ニハ猶處々痛メ何共難防迷惑仕候諸組カ遊佐山エ獅子多集候事偏ニ鹽風ニ而雪不足成故ニ御座候其故遊佐山之内ニ茂別而女鹿山ハ磯ニ近雪薄故鹿多集申候

一西山草木育青山ニ罷成申候へハ鹽風も吹越弱ク罷成田歩茂雪厚勿論東山エ茂雪深積申候へハ鹿猪共ニ冬暮申候茂喰物無之罷成尤足立も惡敷御座候而冬住居不仕筈與奉存候

一三組山中之内茂山土善惡段々御座候遊佐山ハ第一土惡敷御座候而諸木育惡敷殊

一 鹽風吹付強御座候故歟近年古木ニ不限若木共ニ冬枯申候右申上候通西山青山
 二 罷成申候ハ東山共ニ諸木之育茂能用水之水多罷成申候ハ、御百姓共之爲
 三 罷成申儀與奉存候扱又鹽風吹越弱罷成候ハ東山之雪澤山ニ積獅子狩仕候ニ
 留安ク罷成可申與奉存候
 一 荒瀬郷日光川内ハ遊佐山之蔭ニ而鹽風之障無之山之入深殊ニ遊佐山與違格別土
 能御座候故青木杯植付申候而茂育能御座候殊ニ西風北風共ニ當不申雪多く積り
 申候故鹿猪不足ニ而木之育茂別能御座候扱又觀音寺山之入者猶土能相見申候平
 田郷飛鳥山中ハ荒瀬山ハ又格別之土増ニ相見申候依而右三ヶ處之山中エハ漆桐
 杉桑桂類植付申候而茂遊佐山ハ格別育能御座候三ヶ處ハ山土上々ニ御座候故諸
 木之育能殊ニ水下水掛リ之御田地ハ山本ハ小際ニ至迄稻之出來格別能御座候
 遊佐山ハ別而土惡敷御座候故用水之潤ニ而御田地肥シ可申便茂無御座候處ニ砂
 吹込猶々出來惡敷罷成迷惑之至ニ奉存候
 一 酒田濱之方ハ最上川ハ吹上之泥ニ而砂ニ潤御座候故歟草木之育格別能御座候最
 上山ハ上土ニ御座候故木之育悉能御座候夫ハ流申候川之吹上者濱山ニ至迄物之
 育別而能御座候此末酒田濱ハ松之木植付申候ハ、御林ニ罷成可申與奉存候
 一 濱山西前之片際エ簀垣壹通北南ニ廻シ壹貳千間程之場處仕候ハ、大概西風凌申
 候而砂吹立不足ニ罷成可申與奉存候又山之中程ニ壹通同北南エ通垣之長サ前同

様ニ仕申候ハ、自然與山段々ニ高罷成風靜ニ罷成吹越し 弱御座候ハ、山上ハ
 東ニ植付申候木能育青山ニ罷成可申與奉存候右之垣不仕候ハ、鹽風強砂難凌
 御座候故草木共ニはかどり不御迷惑至極ニ奉存候何卒右之通ニ年々簀垣被仰付
 被下置候ハ、難有仕合ニ可奉存候右之通近年遊佐濱砂吹立強御座候故御田地水
 湛ニ罷成殊ニ鹽風ニ而田畑萬物ニ相障迷惑至極ニ奉存候此末共ニ砂除植付被仰
 付被下置候ハ、惣御百姓共之究ニ罷成難有仕合ニ可奉存候以上

延享四年卯八月

植付役 宇 兵 衛

御郡奉行所

寛延元年正月十五日彦左衛門病歿ス 菩提所遊佐本願寺過去帳 行年九十、畢生ノ目的ハ森林ヲ繁
 殖シ地方ヲ碑益セントスルニアリ故ニ臨終ノ際モ尙之レニ係ル事項ヲ兒孫ニ訓
 誠シ更ニ他ノ言ナカリシトナリ延享三年以來藤崎村民ト共ニ西山植付ニ從事シ
 彦左衛門宇兵衛ノ植ウルモノ諸木合計九萬一千六十二本寛延二年ヨリ合歡木植
 木ノ必要ヲ認メ安永元年マテ廿四年ノ間毎年壹萬六拾貳本ツ、ヲ植エ合計貳拾
 四萬一千四百八十八本ノ多キニ上レリ安永二年代屋守ヲ西山ニ置キ諸木ヲ植付
 ケシメ自ラ之レヲ監督セシガ同三年正月三日病歿ス 本願寺過去帳 享年詳カナラズ子孫其
 遺志ト職掌トヲ繼キ心力ヲ營林ニ盡シ維新ノ際ニ及ヘリ

(藤崎佐藤四郎兵衛書留)

巳寛延二年之植付場當リ前

- 一番目 豊次郎
- 二番目 惣四郎
- 三番目 大仙坊
- 四番目 四郎兵衛
- 五番目 安右衛門
- 六番目 清七
- 七番目 八十郎
- 八番目 善三郎
- 九番目 善太郎
- 十番目 八右衛門
- 十一番目 宇兵衛
- 十二番目 治右衛門
- 十三番目 亥七

(來生氏文書) 遊佐郷濱山地形ニ先年ノ諸御植付書上横折

覺

一松苗五百本

但八十五年以前寶永四亥四月宮内新田村外へ植付申候

一雜木取合拾貳万八千四百本

但五十八年以前享保十七子年吹浦渡場同一ニ諸木取合寅年迄三ヶ年之間壹ヶ年

ニ四萬貳千八百本斗宛植付申候

一合歡木千五拾本

但五十一年以前元文四未年青塚村東濱ニ植付申候

一楸木四百五拾本

但右同斷同處ニ植付申候

一合歡木貳百本

但四十八年以前寛保二戌年宮内新田村外へ植付申候

一諸木取合貳万千八拾本

但四十六年以前延享元子年青冢村東濱ニ植付申候

一同壹万貳千三百貳拾本

但四十五年以前延享二丑年右同所ニ植付申候

一同三万七千六拾貳本

但四十四年以前迄享保三寅年藤崎村植付被仰植付申候

一同貳万五千貳百本

但四十三年以前延享四卯年右同處ニ植付申候

一同貳万八千八百本

但四十二年以前寛永元年辰右同處ニ植付申候

一合歡木貳拾四万四千四百八拾八本

但四十一年以前寛延二巳年藤崎村ニ植付申候寅年〇延享三年辰年迄三ヶ年間雜木植付

候へ共合歡木ハ砂地ニ能育申候故巳年ヨリ安永元辰年迄貳拾四年之間壹萬六千
貳本宛合歡木植付申候其後巳^{○安永}年^年代家守ヲ指置キ藤崎村同様ニ植付申候

一同六千四百本

但拾壹年以前安永八亥年小湊村御林地ニ植付被仰付候天明三卯年迄五ヶ年間本
數壹ヶ年ニ千本宛植付申候辰年^年迄三ヶ年間木數合千四百本植付申候翌未
年^年新御林植付被仰付木苗貯無之行届兼蒔置候木苗生長仕候迄暫ク植付指扣申
候

一同三千五百拾四本

但三年前天明七未年兩中島村宮海村上林興屋村新御林地ニ植付被仰付植付申
候

内九百貳拾壹本 大木

一同四千六百八拾本

但去申年右同斷ニ植付申候

一同四千七百拾五本

但當酉年右同斷ニ植付申候

惣木數合五十壹萬五千八百五拾九本

右之通先年^年濱山ニ植付申候諸木員數如此ニ御座候以上

寛政元年酉八月

植付役 彦兵衛

加判 三十郎

高橋儀六殿

來生氏ノ森林ニ關スル功勞ハ斯クノ如キヲ以テ明治十五年三月開設ノ山林共進
會ニ於テ審査ノ上農商務卿ヨリ故彦左衛門ニ七等褒賞木盃壹個、藤崎村植付ノ
功績ニ對シ佐藤四郎兵衛等ト連名ニ四等褒賞銀盃壹組並金七圓ヲ授與セラレタ
リ

杉 澤 南興屋北興屋ノ小字アリ明曆二年ノ現高貳百貳拾四石四斗七升、杉澤

神領分四拾壹石三斗八升

同年檢毛帳○但神領ハ鳥海山
神領ニ屬スル杉澤地分ヲ云フ

タリシヲ後チ本高貳百廿七石九斗貳

升貳合六夕

免五ツ壹
分七厘

同新田八石八斗六升二合四夕

免三ツ
三分

神領四拾壹石三斗八升四合

免五ツ壹
分七厘

水上村越高百六十六石七斗五升五合六夕

免四ツ五
分七厘

トナル但水上越石ニ係ル事歴

ハ南遊佐村字今泉ノ下ニ掲クル文書ニ詳カナリ

熊野神社 字宮後ニアリ伊裝諾伊裝冊ノ二神ヲ祭ル創始詳カナラス本ト鳥海山二

之王子ト稱シ同山順峰衆徒入峰ノ二^ニ之宿^シタリ明治八年八月村社ニ列セラル